

雷帝の英雄譚

Rain one

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は、西暦1996年そして神武暦2656年。日本皇国。この国の貴族の家にある一人の少年が生まれた。その少年はのちの歴史の教科書で英雄と呼ばれ、そして彼の誕生はまさに後の世から数多くの歴史上の偉人の再来にして、生まれ変わりと云われたこれはその少年の英雄譚である。

作品名変更しました。この作品のR-18はピクシブで投稿します。なおピクシブのアカウントの名前はzero starです。気になった方は是非そちらも見てください。

さい。

上のタグに乗せなかった分があるのでここに乗せます。

途中から原作無視及び崩壊、設定無茶苦茶及び他作品、魔法と能力が他作品の技と能力、オリジナル展開そして、ストーリー飛び飛び少し不定期更新。

設定や内容で気になった事が有れば活動報告の方に有りますので感想ではなくそちらの方でお願いします。

西暦表記の変更を報告します。

目次

設定と用語集

日本皇国の歴史と設定及び友好国そし

て仮想敵国

設定

設定2と用語

日本皇国憲法

日本皇国連邦軍

入学編

プロローグ

入学編 story 1

入学編 story 2

入学編 story 3

134

131

126

121

95

62

47

28

1

入学編 story 4

九校戦編

九校戦 story 1

九校戦 story 2

九校戦 story 3

九校戦 story 4

九校戦 story 5

横浜動乱編

横浜動乱編 story 1

横浜動乱編 story 2

横浜動乱編 story 3

横浜動乱編 story 4

幕間

168

164

161

158

153

150

147

144

141

137

幕間 1		176	ry		227
幕間 2		182	古都騒乱、四葉継承、師族会議編		
HAPPY NEW YEAR			古都騒乱編 story 1		231
187			古都内乱編 story 2		238
古代遺跡編			四葉継承編 story 1		245
古代遺跡編 story 1		201	四葉継承編 story 2		269
古代遺跡編 story 2		204	師族会議編 full story		
古代遺跡編 story 3		207	301		
ダブルセブン及びスティープルチェース			過去編		
編			過去編 story 1		343
ダブルセブン story 1		217	過去編 story 2		380
ダブルセブン story 2		220			
ステュープルチェース full story					

設定と用語集

日本皇国の歴史と設定及び友好国そして仮想敵国

1914年、この年後の歴史書で第一次世界大戦と呼ばれる。戦争が始まる。

1915年、日本はイギリスとの同盟を理由に大戦に参加。そしてこの時からだが、魔法師と思われる存在が確認されるが、まだこの時魔法師の有効性を知られず差別される。

1918年、第一次世界大戦終結。この年に日本はイギリスが落ち始めることとを見抜き、アメリカに急接近する。そしてアメリカも、徐々に力を付けつつある、日本の力を見抜き同盟を結ぶことに決めた。

1925年、日本、大日本帝国憲法を大幅改正し、日本皇国憲法として発布し、その3カ月後に、交付した、そして日本皇国憲法の内容は、主権が天皇から、君臣の一体の主権者とし更に議会の力を強くし、更には議院内閣制を採用し国務大臣は全員文民で半

分以上が皇国議會議員ではならないと言う、文民統制を明記したのだ。これにより軍部の政治介入を未然に防ぐことになった。そして、この年女性の社会進出が徐々に声が高まりがあり、憲法並びに法律で男女平等が明記されたのだ。そして、女性の選挙権及び被選挙権も認められたのだ。

1931年、突如中国大陸にてソ連軍の一部が暴走して、満州人民共和国を建国した。ソ連の行動に警戒した、日米はさらに接近した。

1939年ドイツが突然ポーランドに侵攻したのだ。第二次世界大戦が勃発しヨーロッパの大部分を占領。

1941年イギリスとアメリカが日本対して、戦争参加を要請する。そして日本は今ある植民地の多くを独立させる条件としてドイツに宣戦布告をして英米はそれを了承して日本はそれを確認次第に日本近海にあるドイツの拠点を攻撃した。

1946年2月史実より一年近く長かった、第二次世界大戦終結した。

そして同年5月、日本は第三軍として空軍を設立、そしてさらに日本国内にある島に

ユダヤ人自治共和国を設立を認めカナンの地に帰るまでの間は日本で暮らす事を認め、さらに魔法師の有効性を気付いた日本は、魔法師の地位向上と世界各国に居る魔法師の保護を行い、自国への亡命を認めたのだ。

そして、この年に終戦後、国際連合が設立されて日本皇国も常任理事国として参加する。

1947年アメリカが核実験に成功する。日英はアメリカの支援の元日本は1949年に核実験を成功、イギリスはその翌年に核実験を成功する。

1955年日本とソ連が日ソ基本条約を締結した。

1956年日本は憲法を再び改正し、基本的人権の尊重や道州制導入並びに徴兵制の廃止と志願制への移行、そして皇国議会の上院にあたる、貴族院の改革が行われ、貴族院議員が選出議員を追加した。

まず自治共和国から最低でも五人は選出ができ、地方州からは人口比で選出をする事になった。

1960年日本の人口はこの年、1億人を突破。

1968年日本の人口はこの年で倍増以上の2億5千万人を突破

1976年この年には、人口が4億2千万人を突破

1989年米ソ首脳会談し冷戦の終結を宣言

1994年この年に人口が8億人を突破

1995年阪神淡路大震災が発生。同年にオウム真理教が地下鉄サリン事件を起こしてこの年に最高裁判所で非合法組織に認定される。

1996年犬塚孝一を始めとしたその同級生は誕生。

2001年この年に9・11が発生して甚大な被害は起きた。しかし、英米以外の国連常任理事国とドイツやイタリアなどが反対を表明。

2003年この年にはアメリカを中心とした多国籍軍が大量破壊兵器の保有の疑いありとしてイラクに侵攻する。

2008年この年に人口は16億8500万人を突破したのだ。この年にアメリカのリーマンショックが起きるが日本皇国は対応を早急に行つた為に影響はそれ程、大きくなかつた。

2009年現在ある、一部の地方州と特別構成国がそれぞれ国として、この年に出現或は転移をして来て、後の祖国統一戦争と呼ばれる戦争が勃発した。最終的には日本皇国の勝利で終わり、彼らに一部を地方州として、それ以外を高度な自治権を認められた、特別構成国の大公国及び皇王国として日本に編入されたのだ。そして、人口は23億人を超えたのだ。それと同時にこの年に首都である東京特別市で同時多発テロが勃発するが皇国連邦政府がすぐに戒厳令と緊急事態宣言を発令して対応して事態を即座に対応した為に特にこれと言つた混乱が起きずにすぐに収まつたのだ。

2011年、この年に東日本大震災が起きたが史実よりも対策がされていたため被害

が必要最小限に収まり原発事故も起きなかった。

2012年犬塚孝一魔法科高校に入学した。そして、この年に孝一とその弟の夏が皇国七武海に加盟。更にこの秋に中華民主主義人民連邦共和国が日本に侵略を行うことが孝一を始めとした七武海と十師族が始めたとした魔法協会と軍の活躍により壊滅。

2013年この年の年明けに謎の古代遺跡が発見されるがその調査を行なったが全の魔王獣のマガオロチが復活する。

黒羽姉弟と桜井水波と七草姉妹と七宝琢磨が第一高校に入学。

この年の年末犬塚姉弟が四葉家の本家に行くが暴走した一部の四葉家の分家の当主達と執事の手の者による襲撃を受けるが孝一の手により撃退される。

2014年

年明けと同時に四葉家から魔法協会を通じて達也が四葉家の次期当主である事を発表される。

それと同時に犬塚公爵家から尾獣と人柱力の存在を公表される。

日本皇国

国号、日本皇国 英称 e m p i r e o f j a p a n

国家元首、天皇

国歌、君が代

国旗、旭日旗

首都、東京特別市

最大都市、大阪特別市

通貨、円

国土面積、318万平方キロメートル

領土、千島列島、樺太、北海道、本州、四国、九州、沖縄、台湾島、朝鮮半島、由古丹島、秋津島、山城島、瑞穂島、鳥加露亜乃巢島、龍獸島、水魚島、精妖島、魔夢幻島

議會制民主主義、立憲君主制、議院内閣制、連邦制、民主主義、皇帝制、地方分権主義、資本主義、重武装平和主義。

日本皇国の概要

連邦制民主主義立憲君主制で経済、軍事とも世界第二位の国で国際連合常任理事国になつている。領土、領海、領空は現実よりは広く海底資源なども採掘をして居る。そして海底資源だけでなく藻を元に石油の開発を進めており同時に電気自動車と電動バイクの開発では世界をリードして居る。

日本皇国は民主主義の連邦制立憲君主制を取っているが天皇は戦後の天皇と戦前の天皇を足して二で割つた君主制で君臣一体の立憲君主制国家。

連邦制はアメリカ程の連邦の権限は強くなく何方かと言えば緩やかな連邦制を取つて居る。

民主主義指数は世界第十位で世界でも高く腐敗度指数と報道の自由度の順位は世界で第四位である。

日本皇国は世界でも高福祉国家と教育国家でもありその代わり税金は世界的にも高いが法人税と所得税は非常に低く抑えられており法人税は20・5%で所得税は収入にもよるが平均で1・5%であるが消費税は世界で一番高く、30%生活必需品に限っては軽減税率でその税率は10%である。それら税収で教育や社会保障そして子育て支援にも充てて居るため合計特殊出生率が先進国でも数少ない3・89人である。全体の税収としては1100兆円であり国家予算は950兆円である。

日本皇国は第一次、第二次の両世界大戦以降の現実の大日本帝国からのIFでここから歴史は枝分かれをしており特に第二次世界大戦では現実では枢軸国だが此方では連合国側に立って第二次世界大戦に参加しており第二次大戦後に核兵器や原子力空母や原子力潜水艦を保有して居る。

統治機構

立法府

皇国連邦議會

下院、衆議院

議員数、1200

上院、貴族院

議員数、750

行政府

皇国連邦政府

内閣府

内閣官房

内務省

消防庁

皇国連邦警察庁

大蔵省

司法省

經濟産業省

国土交通省

皇国沿岸警備隊

外務省

文部科学省

厚生労働省

農林水産省

国防省

統合参謀幕僚本部

陸軍参謀本部

海軍司令部

空軍作戦司令部

宇宙軍司令部

海兵隊参謀本部

情報本部

国防技術研究所

軍情報局

独立官庁

宮内省

皇国中央情報省

人事院

会計検査院

司法部

大審院

高等裁判所

地方裁判所

簡易裁判所

行政裁判所

違憲裁判所

軍事裁判所

家庭裁判所

人口

25億8500万人

GDPと経済力と国防費

20兆ドル（日本円で2200兆円）

日本皇国の経済力は世界第二位で経済成長率は年に4・3%で国民の平均年収は約980万円。日本皇国の富裕層は世界でも多くその多さは世界でも第二位である。

そして、日本皇国の通貨である円は地金より硬くスイスフランと同じくらい硬い事で有名で世界でも安定した通貨でもある。

国防費はGDP3・5%の77兆円

軍隊

日本皇国連邦軍

日本皇国連邦陸軍

常備兵48万人

予備役32万人

日本皇国連邦海軍

常備兵50万人

予備役34万人

日本皇国連邦空軍

常備兵46万人

予備役30万人

日本皇国連邦宇宙軍

常備兵44万人

予備役28万人

日本皇国連邦海兵隊

常備兵32万人

予備役26万人

常備兵220万人

予備役150万人

合計370万人

准尉 准士官 少尉 中尉 大尉 尉官 少佐 中佐 大佐 佐官 准将 少将 中将 大将 将官 元帥 軍隊の階級

下士官

曹長

軍曹

伍長

兵士

兵長

上等兵

一等兵

二等兵

連邦構成自治体

皇国連邦政府直轄特別自治市

東京特別市

大阪特別市

平壤特別市

新北特別市

ソラ特別市

連邦道州

北海道州

州都、札幌市

東北州

州都、仙台市

関東州

州都、横浜市

甲信越州

州都、新潟市

北陸州

州都、金沢市

東海州

州都、名古屋市

近畿州

州都、京都市

四国州

州都、高知市

中国州

州都、広島市

九州

州都、博多市

琉球州

州都、那覇市

由古丹州

州都、丹子市

秋津州

州都、秋津市

山城州

州都、山市

瑞穂州

州都、瑞穂市

特別自治共和国

イスラエル自治共和国

自治共和国首都、北部平安京市

台湾自治共和国

自治共和国首都、台北市

特別構成国

トリスティン大公国

首都、トリスタニア市

カトヴァーナ大公国

首都、バンハタール市

ロートレアモン大公国

首都、ロートレアモン市

アティスマータ大公国

首都、アティス市

アルザーノ大公国

首都、アルザーノ市

ジュラ・テンペスト大公国

首都、テンペスト市

朝鮮大公国

首都、京城市

龍人皇王国

首都、龍泉市
水魚人皇王国
首都、水仙市
精妖皇王国
首都、精蓮市
獸人皇王国
首都、獸動市
魔夢幻皇王国
首都、魔幻市
貴族の爵位
大公
公爵
侯爵
伯爵
子爵
男爵
日本皇国の政党

民主自民党

現実の自民党で変わりませんが派閥間の対立が非常に少ないが現実以上の反共と反社会主義と反左派主義でもある。

民主国民党

現実の国民民主党だが、現実よりは非常にまでも憲法改正などや国民の為の政策で有れば賛成に回る事が多い。左寄りの野党政党としては最大であるが

民主立憲党

現実の立憲民主党でもあるが、こちらでも一部の党員が色々ブーメラン発言や爆弾発言や二重国籍や政治資金関係等でやらかしすぎてしまい国民からの支持や人気は殆ど無い。

皇国改新党

現実の日本維新の会で現実同様政策を主張している。中央政府の権限を縮小と規制緩和をしようとしている。

皇国旭日党

オリジナル政党。公共事業の拡大や金融業の強化や欧米諸国やアジア諸国等の関係を重点に置いている。

皇国社会労働党

モデルは現実における北朝鮮の政党の朝鮮労働党だが現実よりは現実的でまともな政党である。主に掲げる政策は公共事業や労働者の権利の保護や給料引き上げなどを掲げている。さらに穏健派の日本共産党員や社会民主党員などを受け入れている。

日本皇国の非合法組織及び政党

日本共産党

此方でも暴力革命を主張してさらに君主制や民主主義や国民の基本的人権をさらに無視した政策を掲げた為大審院で非合法組織と認定された。

社会民主党

此方では現実以上に過激な行動をしまくったので共産党同様に大審院で非合法組織として認定された

その他の極左勢力

現実以上の暴力革命の為にテロを起こしまくったので軍の憲兵や公安警察などに組織の拠点や組織の構成員などが捜査や逮捕をされまくったのだ。

オウム真理教

此方でも地下鉄サリン事件を起こした結果テロ組織として大審院で非合法組織として認定された。

日本皇国の同盟国と友好国及び仮想敵国

同盟国と友好国

アメリカ合衆国

日本皇国の最大の友好国にして最大の同盟国です。こちらでも世界最大の経済大国にして軍事大国です。こちら世界でも日本同様史実以上に発展して居ます。

イギリス（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）

日本皇国の最初の同盟国でもある。政治的にも経済的にも関係が強い。

フランス共和国

経済と文化で非常に関係が強く、文化面では関係が両国の文化に影響を及ぼしている。

満州王国

冷戦時代は対立して居たが、1992年以降の民主化と王政復古によって友好国になっている上、日本とは同君連合を組んでいて日本皇国の天皇を国家元首として仰いでおり、満州王国の国王としている。英連邦王国の日本版です。

ミネクロシア連邦公国

日本皇国の委任統治領が1959年に独立して冷戦後の2004年に日本連邦皇国に加盟して日本皇国の元首、天皇をミネクロシア連邦公爵としてミネクロシア連邦の元首としている。

インド

1947年以降の独立以降日本とは友好関係を保っている。

香港公国

ミニ国家で、世界でも有数の金融国家。日本皇国とは同君連合を組んでいる。

チベット藩王国

現実でのチベット自治区です。日本皇国とは同君連合を組んでいる。

新疆ウイグル藩王国

現実での新疆ウイグル自治区です。日本皇国とは同君連合を組んでいる。

イランイスラム王国

現実とは違い親米国家で立憲君主制で日本と同君連合を組んでいる。イラン王室は存続して居る。

アラブ首長国連邦

現実同様七つの首長国の連邦国家で日本と同君連合を組んでいる。七つの首長国の君主は存続して居る。

リヒテンシュタイン公国

現実とは殆ど変わらない。日本と同君連合を組んでいる。リヒテンシュタイン公国家は存続して居る。

オランダ王国

現実とは変わらず日本皇国とは同君連合を組んでいる。オランダ王室は存続して居る。

ベルギー王国

現実とは変わらず日本皇国とは同君連合を組んでいる。ベルギー王室は存続して居る。

ルクセンブルク大公国

現実とは殆ど変わらず日本皇国とは同君連合を組んでいる。ルクセンブルク大公家は存続して居る。

モンゴル王国

現実とは殆ど変わらないが此方では立憲君主制の日本皇国の天皇をモンゴル王国国王として同君連合を組んでいる。

オマーン国

現実とは殆ど変わらないが此方では立憲君主制を取っており日本皇国の天皇をオマーン国スルターンとして居る。オマーン王室は存続して居る。

カタール国

オマーン国同様此方も現実とは殆ど変わらないが此方では立憲君主制を取っており

日本皇国の天皇をカタル国首長として居る。カタル首長家は存続して居る。

クウェート国

オマーンとカタル同様此方も現実とは殆ど変わらないが此方では立憲君主制を取っており日本皇国の天皇をクウェート国首長として居る。クウェート首長家は存続して居る。

サウジアラビア王国

上記の三ヶ国同様此方も現実とは殆ど変わらないが此方では立憲君主制を取っており日本皇国の天皇をサウジアラビア王国国王として居る。サウジアラビア王室は存続して居る。

アジア諸国

第二次大戦以降に独立して友好的な関係を保っている。

仮想敵国

中華民主主義人民連邦共和国

現実の中国と北朝鮮を足して二で割った感じですが。民主主義と連邦はもはや名ばかりで個人崇拜が酷く独裁政治が行なわれている。日本皇国とアジア諸国を始めとした国々と領土問題で対立している。

中立

ロシア連邦

日露戦争以来日本とは対立したり仲良くなったりと微妙な関係を保っているが千島列島と樺太の一部で領土問題を抱えて居るが表面的にはそれによる紛争などは起きて居ない。

ドイツ連邦共和国

こちらではロシア同様微妙な関係を保っている。

設定

犬塚孝一（15⇒16⇒17）

6月5日生まれ。犬塚公爵家の長男として生まれる。父が持つ爵位の一つである侯爵を儀礼称号として名乗っている。その後、九校戦の後に七武海に加盟して更に二年生の時に少尉の階級を与えられた。

入試試験での順位総合三位とかなりの頭の良さと魔法の腕がある。

身長は178cmで髪型と顔は少年陰陽師の安倍昌浩をイメージしていますが両頬に三本ずつの合計六本の猫髭があります。

クラスは一年B組。性格は実力、現実、合理主義でなおかつ、一度でも決めた事は周りがどう言おうと貫く信念の強さと自分の家族とみなしたものに対する愛情の深さは、彼なりの優しさでもある。

面倒事や厄介事だけは嫌い、しかも自己紹介もしようとしない時は、リーナに怒られそれのたびに自己紹介を手短にする。一方で貴族の生まれでもある彼にとって、成り上

がりの十師族を頂点とする魔法協会と数字付きを少なからず嫌ってはいるが、自分も魔法師でもあるため今の所、表立って文句は無い。

しかし、かなりのマッドサイエンティストなのだが、自分の研究結果を私利私欲の為に使わずに周囲に提供をしたりするなど扱っている研究テーマや技術力がぶっ飛んでいるだけの変人で、その点を除けば人として倫理的にも常識的にも真つ当で正義感が強い存在。そして彼の開発した幾つかの技術は国と企業にとつて喉から手が出る程の代物のなのだが本人の意思で特許申請を行い特許権を得ておりその特許を多くの企業に貸し出しておりその月々の特許料だけでも家の何件かと数台の高級外車を買える程の収入を得ている。

ちよくちよく何処かに居なくなるので周囲から心配される事もある。変装や後述のウルトラマンの能力のおかげで他の姿への擬態が出来る為得意。その変装や擬態のレパートリーが多いが逆に使用するレパートリーが少ない為、身内や彼とは付き合ひの長い者にはすぐにバレる。

彼の家族構成は、祖父母と両親そして第一高校に通う一個上の姉が一人と三つ子の弟

が二人である。動物には懐かれやすく、特に猫には懐かれており、本人も猫好きの為喜んでおり、自室に猫を二匹ほか家にはハヤブサとナマケモノとフクロウと鷹が各一匹ずついてその四匹にも懐かれている。

普通二輪免許も持っており、バイクはスカイウエーブとニンジャ400rを愛車にしている。

趣味は自宅で飼っている動物達と戯れる事と茶室で茶をたてる事と狩猟で取り分けその中でも鷹狩を好んで行なっている。

余談だが。彼の母は四葉真夜であり、四葉深雪とその兄の達也は、従兄妹になるのだ。

彼の使用魔法は原作とオメガ版で一部で使用させられた、黄金聖闘士の技とワンピースに出て来る、超人系と動物系と自然系の悪魔の実を使う。ただし悪魔の実は実際に幾つかを食べて能力を得ている。(この世界の悪魔の実は何個食べても良いし、カナヅチにはならない。)

尾獣。ナルトに出て来る、例の魔獣です。尾獣全てとその能力や尾獣化やそれぞれの

尾獣チャクラモードを使用できる。

母の真夜が使う流星群も使え、その流星群を応用し、そこから派生した魔法も使える。これらと同時に彼は剣の達人でいくつか刀を持っておりその腕前は世界の中でも三本指に入る程の腕前でもある。

全ての覇気を使いこなし、武装色と見聞色は既に少し先の未来を見たり、武装色の流桜や内部破壊そして外に纏う武装色も習得している。霸王色の覇気も凄まじく少し威圧しただけでも大概の相手を気絶させる。

小宇宙《コスモ》も習得して居る。セブンセンスやエイトセンスシズ及びナインセンスなども覚醒して居る上、常時覚醒している。ウルトラマンへの変身能力を持っている。現在今放送中のウルトラマンZまでの全てのウルトラマンに変身可能。一部は一人での変身となります。(作者がウルトラシリーズが好きなので追加しました。とは言っても本編では、あまり登場しません。出たとしてもちよつとだけの戦闘で終わります。)後、ジャグラス・ジャグラーにも変身します。かなりジャグラーが人気があるのと作者がジャグラーの事が好きなのとウルトラマンゼットにジャグラーが出たので出し

ます。

後、うずまきナルトが使用した影分身の術と螺旋丸とその関係の術と仙人モードと六道仙人モードと性質変化とその関係の血継限界を使用できる。

英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語、ラテン語、ロマンシュ語、ポルトガル語、スペイン語、スウェーデン語、デンマーク語、フィンランド語、オランダ語、ルクセンブルク語、ペルシャ語、アラビア語、タイ語、ヒンディー語、中国語、ヘブライ語などの言語を喋ることが出来る。朝鮮語も喋る事が出来るが片言でかなり訛りが出てしまうのが難点である。

刀の一覧

星斬丸

最大大業物12工の一本で、その切れ味はその名前の通り星を一刀両断した事から由来している。

閻魔

大業物21工の一本で、この刀はじゃじゃ馬で、まともに使いこなせるのはこの世界でただ一人彼だけである。

秋水

閻魔と同じく大業物21工の一本で恐竜が踏んでも1mmも曲がらない強度を誇りそして黒い刀身から、黒刀と呼ばれる珍しい刀の一本。

二代鬼鉄

閻魔と秋水と同じ大業物で妖刀で腰にさした者は非業の死を遂げると言われ恐れられるが彼はその呪いを押さえ込み使いこなしている。

和道一文字

上記の三つと同じ大業物でこれと言った特徴が無いが切れ味すまさまじく、まさに名刀にふさわしい刀である。

天羽々斬

大業物の一つでその切れ味は天を真つ二つにしたと言う伝説がある程で刀の名前の

由来になつた程である。

悪魔の実の能力

超人系

グラグラの実

ズシズシの実

モチモチの実

ドクドクの実

動物系（幻獣種）

ヘビヘビの実 モデルアジ・ダハーク

自然系

メラメラの実

マグマグの実

ゴロゴロの実

ピカピカの実

ヒエヒエの実

ヤミヤミの実

スナスナの実

ちなみに彼のヒロインは、リーナと愛梨とエリカです。今の所はこの三人ですが、今後も増やすかどうかは、考えています。決まり次第お伝えします。

ペットの名前

猫の種類

白と黒のスコティッシュフォールド×2

猫の名前

白猫はヴァイス

黒猫はシュヴァルツ

フクロウの種類

ワシミミズク×1

フクロウの名前

フウ

ハヤブサの種類

チヨウゲンボウ

ハヤブサの名前

サヤ

ナマケモノの種類

ミユビナナマケモノ

ナマケモノの名前

マナ

鷹の種類

大鷹

鷹の名前

タカスケ

四葉達也 (15 ⇒ 16 ⇒ 17)

四葉家の次期当主筆頭

シスコンと分解と再生は原作通りだが、それ以外の魔法も使用できる。入試試験における、総合順位は二位。基本的にたまたま暴走する孝一のストッパーの役割を持つて居る。

達也のヒロインは七草三姉妹です。(決定事項)

アンジェリーナクドウシルーズ(15)

孝一の恋人で、小学校の時から恋人仲で中学二年生の時に欲情した孝一に抱かれて以来、時々彼の夜の相手にしている。アメリカから諸事情により亡命してた為、日本国籍保持者。一科生。1年B組それ以外は原作通り。

千葉エリカ(15⇒16⇒17)

孝一のヒロイン2

渡辺摩利との仲と家での待遇と異母姉の仲以外原作通り。

孝一とはお互い剣士同士で馬が合い、九校戦が始まる頃には彼の二番目の彼女になる。二科生。1年E組

一色愛梨(15⇒16⇒17)

孝一のヒロイン3

エクレールの異名で知られる、一色家令嬢。実は孝一と愛梨は小さい時、何回か会った事があるがお互いその時の事を忘れており、九校戦の新人戦でお互い思い出して、自分の思いを伝え彼の三番目の彼女になる。ちなみに一色家は彼女の兄が継ぐ予定。後、少し変態思考になっている。

千代田花音（16⇒17⇒18）

孝一のヒロイン4

千代田家の息女でもある。九校戦以降に孝一の恋人になったのだ。

それ以外は原作通り。一科生。2年生

如月千早（15⇒16⇒17）

孝一のヒロイン5

元々、犬塚公爵家の江戸時代以来の家臣で明治以降は使用人として仕えていた家の出身で孝一達姉弟の世話役をしていたが、孝一に好意を抱いてたが身分違いなので、諦めていたが九校戦以降に恋人になった。

羽澄奏（16⇒17）

魔法科高校の生徒で一科生。孝一達姉弟とは幼馴染で彼女の実家は伯爵家で家ぐるみの付き合いがあるのだ。孝一とは恋仲である。

七草真由美（17⇒）

第一高の生徒会長にして、達也の正妻。それ以外は原作通り

七草香澄（15⇒16）

第一高の生徒会長の真由美の妹の一人で達也の第二夫人で、それ以外は原作通り。

七草泉美（15⇒16）

第一高の生徒会長の真由美の妹の一人で香澄とは双子の姉妹で、他の二人同様に達也の許嫁でもある。それ以外は原作通り。

犬塚咲（16⇒17⇒18）

4月5日生まれ。孝一の姉で、彼の一番の理解者でもある。第一高校に通う一科生。彼女は非常に美しい容姿をしており、この学校有数の美少女。髪は腰までのロングで少

し赤みがかった黒髪。彼女も弟同様剣士で弟には及ばないものの、かなりの腕前でもあ
る。2年A組

身長は158cm

雪走

良業物の一つで元々は孝一が持っていた刀なのだが、彼が使わなくなったので彼女に
譲られた。

犬塚紅音（15⇒16⇒17）

6月5日生まれの犬塚公爵家の次男で孝一とは三つ子の兄弟

容姿はデイベインゲートのアカネをイメージです。

甲装型CADを使用する。性格はデイベインゲートと一緒にです。

クラスは1年C組。

精霊魔法のイフリートを自分に憑依させる事で炎を操る。

兄や弟と共に悪魔の実の能力者。（動物系幻獣種）

身長172cm

悪魔の実

動物系（幻獣種）

ヘビヘビの実モデルサラマンダー

犬塚夏（15⇒16⇒17）

6月5日生まれの犬塚公爵家の三男で犬塚姉弟の四番目

容姿はフェアリーテイルのナツをイメージです。

性格もフェアリーテイルと一緒です。

CADは首に巻いているマフラーで、兄の孝一同様悪魔の实の能力者。（動物系幻獣種）

クラスは1年C組

滅竜魔法を得意としており、紅音同様炎を操る。

身長は175cm

九高戦の後に兄の孝一と共に七武海に加盟した。

悪魔の实

動物系（幻獣種）

ヘビヘビの実モデル竜（ドラゴン）

犬塚信乃（12⇒13⇒14）

7月29日生まれの犬塚公爵家の四男で犬塚姉弟の末っ子

容姿は八犬伝東方八犬異聞の犬塚信乃のそのものです。

彼も姉の咲や長兄の孝一同様、剣士で使用する刀は良業物の村雨を使う。

使用魔法は今の所不明。

身長は154cm。

五十里啓（16⇒17⇒18）

孝一の姉である、咲の許嫁である。一科生。2年C組

それ以外は原作通り。

身長174cm

犬塚真夜（46⇒47）

犬塚五姉弟の母。そして、極東の魔女や夜の魔女の異名で恐れられている。肝が座って居る上、実子達からも恐れられて居るが実際は姉弟達の事を大事に思っており親として彼等、姉弟の幸せを願うなど親としての一面を見せており孝一の恋人である実の母が居ないリーナとエリカからも実の母の様に慕われている。

犬塚総一（45⇒46）

犬塚五姉弟の父。犬塚公爵家32代目当主で日本皇国陸軍大将でもあり陸軍参謀本部本部長の陸軍軍人のトップでもある。軍人としては厳格だが、家庭では妻や子供達を大事にしている為、子供達からも尊敬されている。

侯爵と伯爵と子爵を儀礼称号を名乗っている。

犬塚正一（65）

犬塚公爵家の前当主で現当主の総一の父で犬塚五姉弟の祖父でもある。今は内閣の大蔵大臣を務めており彼も元々は軍人で空軍大将にまで登り詰め空軍作戦司令部司令長官を務めた事もある。

安倍晴子（66）

犬塚正一の妻で現当主の総一の母で犬塚五姉弟の祖母でもある。性格は非常に強気で男勝りで夫の正一や息子の総一などを尻に敷いて居る。元々は犬塚公爵家の本家に当たる安倍公爵家の出身である。実は彼女は元海軍中将で女性初の連合艦隊司令長官でもある為孫達からは上記の性格などから義娘の真夜共々恐れられている。

治仁親王（17）

皇位継承順位第二位の皇族で母親が犬塚五姉弟の父の姉にあたるため彼等とは従兄弟になる。性格は少し自由な所もあるが非常に国や国民を第一に考える人物のため犬塚五姉弟、特に孝一からは敬意を払われている。

桜井水波（15 → 16）

幼少期から四葉家のメイドで孝一達、犬塚五姉弟とは幼い頃から知り合いで紅音には幼い時から好意を抱いて居たが身分違いから諦めかけて居たがその後孝一と真夜の提案で両思いになったのだ。

黒羽亜夜子（15 → 16）

四葉家の分家の一つ黒羽家の長女で幼い頃から再従兄弟の孝一に好意を持って居るためにその為にだけに魔法科第一高校に双子の弟の文弥と一緒に入学した。その後、孝一とは両思いになった。

黒羽文弥（15 → 16）

四葉家の分家の一つの黒羽家の長男であり次期当主である。再従兄弟の孝一と達也

の事を実の兄の様に慕っており亜夜子と一緒に第一高校に入学したのだ。

設定2と用語

尾獣

ナルトに出てくる、尻尾を持ったあの魔獣達です。この世界では、代々犬塚公爵家が受け継いでおり。当代は現当主の長男孝一が人柱力となる。

尾獣

一尾、守鶴

二尾、又旅

三尾、磯舞

四尾、孫悟空

五尾、穆王

六尾、犀犬

七尾、重明

八尾、牛鬼

九尾、九喇嘛

人柱力

ナルトの世界同様、尾獣を収める器の事。ただ、この世界では尾獣の存在は一部の人間しか知らないため、人柱力に対する差別や迫害がない。そして、尾獣を抜いても死にません。

悪魔の実

ワンピースに出でくる、あの不味くて泳げなくなる果实。そして複数の悪魔の実は食

べる事が出来ないが、この世界では何個食べても大丈夫な上泳げます。ただしワンピースの原作同様味は不味い。超人系と動物系そして自然系の三系統からなる。

覇気

ワンピースに出てくる、例の武術。こちらは上の三つとは違い原作との差があまりなく、設定上同じ。

小宇宙

小宇宙と書いてコスモと呼ぶ。聖闘士星矢に出て来るものと同じ物。原子と分子を破壊することに重点を置いている。

究極の小宇宙として第七感、セブセンスィズと第八感、エイトセンスィズ。またエイトセンスィズは阿頼耶識とも呼ばれる。この二つに到達すれば規格外な小宇宙を会得することができる。

セブセンスィズ

第七感で究極の小宇宙でもあり此処に到達した者は強大な小宇宙を有する事になる。

エイトセンスズ

第八感で第七感、セブンセンスズの上位で此処で到達した場合生きたまま死の世界へと冥界へ自由に生きたまま行き来が出来る。

ナインセンスズ

第九感で第七感と第八感の上位で此処に到達した場合もはや人間の域を超えて神の領域に到達する事になる。

統合参謀幕僚本部

通称大本営。軍人全てを束ねる、軍の最高期間にして、軍の意思を政府に伝えるための機関。

皇国連邦議会

この国の立法機関にして、国権の最高機関でも有る。ちなみに、二院制で下院は公選による選出される衆議院と上院は貴族や地方州及び皇王国や大公国から皇国政府に任命された者そして勅任や多額納税者で構成される貴族院からなる。民意を重んじるこの国では衆議院の優越を認めている。

魔法師

原作の劣等生と同じ設定です。

魔法協会

全ての魔法師を統括し管理する組織。ただ、強大な組織故に強権的な部分もあり一部の貴族や人々から嫌われている節がある。

十師族

魔法協会の頂点に立つ存在でもあり。師族会議によって、魔法協会の意思決定を行う。

魔法科高校

全国に九つある国立魔法大学付属の高校で、全ての国立が難関で入るだけでも難しい。そして入試を受け入り入学出来たならエリートの中のエリートになる。

皇王族

皇王国を支配する身分の者達で此処に属するのは獸人と精霊と妖精と魚人と水人と竜人と魔族と夢魔人などの亜人と呼ばれる種族が皇王国に君臨して皇王族として日本皇国の支配階級に属する。

大公族

主に大公と呼ばれる貴族で貴族の爵位の第一位で特別構成国の大公国を君臨して居る。

貴族

身分上、この国の皇族そして皇王族ならびに大公族の次の身分で国民の身分としては最高位に位置している身分の人達でよくやんごとなき人と言った場合最初の三つもしくはこの貴族の人達の事を指している。

世襲貴族と一代貴族が居る。ただし、爵位を複数保有している場合、長男が当主が保有している爵位の次に高い爵位を与えられる。

皇国連邦議会貴族院に議席に席を有する又は私有財産及び一部の税金そして遺産では特権を法律で認められて居るがその代わりにノブレス・オブリージュを求められてお

りそれらを行う事で様々な特権を認められて居る。

ちなみに1960年以降は世襲貴族は分家や貴族の次男以降又は子女の婚姻に際してのみ認められておりそれ以外で爵位を得た場合は一代貴族として扱われる。一代に限ってであればその爵位と同等の地位を得る事ができる。ただし、親子三代で同じ又は上の爵位を得た場合は例外的に世襲が認められる。

爵位

日本皇国の爵位は大公、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵で明治時代に華族令を発令して居た時点での公家や大名だった者をその公家では家の家格で大名なら石高の実高で爵位を授かる事が出来るが明治維新の際にその偉勲を加味されて本来、授けられた爵位より上の爵位を授けられるの。

大公

爵位の第一位で旧君主国だった特別構成国の大公国の王族又は臣籍降下した皇族などに与えられて居る爵位でありこの爵位だけは貴族と呼ばれるが大公族とも呼ばれる事がある。

公爵

爵位の第二位で主に五摂家と徳川將軍家そして水戸徳川家と徳川慶喜家、犬塚公爵家と薩摩島津家と長州毛利家などがこの爵位を保持して居る。

侯爵

爵位の第三位で主に尾張、紀州徳川家と加賀前田家と広島藩浅野家と福岡藩黒田家と熊本藩細川家などがこの爵位を保持して居る。

伯爵

爵位の第四位で主に御三卿と彦根藩井伊家と米沢藩上杉家と仙台藩伊達家と対馬藩宗家と信濃松代藩真田家などがこの爵位を保持して居る。

子爵

爵位の第五位で主に柳生藩柳生家などがこの爵位を保持して居る。

男爵

爵位の第六位で現在ある爵位の中でも最下位であるこの爵位を保持して居るのは主に貴族の分家が殆どである。

日本国憲法

現実の日本国憲法と大日本帝国憲法を足して、いくつかの章と条文を加えたのが、この憲法では主権者は天皇と国民の両方と定められている。

日本皇国

世界最大の人口と常備兵力を保有する連邦制民主主義の立憲君主制の国家。世界有数の経済力と軍事力を誇る国。多民族国家であり、世界で唯一の多民族国家でもある。民族としては大和系、ユダヤ系、トリスティン系、カドヴァーナ系、ロートレアモン系、アテイスマータ系、中華系、台湾系、朝鮮系、そして一番多い民族は大和民族である。代表的な種族として人族、獣人や精霊や妖精、魚人や水人さらには竜人や魔族と夢魔族などがいるが具体的にどんな種族がいて数がどれだけあるかは現在調査中の為詳細は不明。

一夫多妻

この世界の日本では認められている制度。ただし、国から認められる程の功績又はノーベル賞を受賞あるいは一代貴族になるか収入が年間で最低でも2000万円以上か、国にとって重要な存在でもない限り、認められない制度。人数に関しては制限はないものの平均的に2〜3人で今までの最高が7人である。

ちなみに主人公と四葉達也は国にとって重要な存在の為一夫多妻ができる。

天皇、皇室

天皇は日本皇国のトップであり国の約30%の土地を所有する大地主で資産家でもありその皇太子を含めた皇族で皇室を構成して居る。現在の天皇陛下が第125代天皇である。そして、天皇陛下の総資産は132兆8900億円で土地を含めた諸々の収入は79兆7650億円。

犬塚公爵家

この国きつての名門貴族で、軍の将官や内閣総理大臣始めとした国務大臣に輩出して来た一族として有名で、政治的にも経済的にも十師族も無視できない影響力を持っている。

そしてこの国の約25%の土地を所有する大地主でもあり様々な企業を経営をする

実業家一族でもありその中でも公爵家の保有する土地の賃貸やマンションやアパートを建てての不動産業並びに金融業や保険業及び畜産業そして運輸業と建築業などを中心に経営をされておりロックフェラー一族とロスチャイルド一族に並ぶ世界でも名だたる実業家一族でもあり犬塚財閥として名が知られて居る。

複数の爵位を保有して居る。そして、文化でも非常に精通しているため家族全員が文化人という側面も持っている。

主な爵位は侯爵と伯爵と子爵を儀礼称号として保有している。

犬塚公爵家の総資産は105兆8660億円で土地と事業の総収入は68兆8900億円である。

皇国七武海

ワンピースとは違い、日本皇国の守護神にして他の国への抑止力の一つでもある為、基本的には強者がここに名を連ねる。

現在は三人ほど欠員が居るため、補充のため人材を探している。

その後、二名程が七武海に加盟したので現在の欠員は一名。

七武海のメンバー

鷹の目、ジユラキユール・ミホーク

棘の魔法使い、エリアス・エインズワース

オーバーロード、アインズ・ウール・ゴウン

国崩し、イビルアイ

雷帝、犬塚孝一

竜拳、犬塚夏

海賊女帝、ボア・ハンコック

魔王獣

ウルトラマンオーブに出て来た物と同じです。

太平風土記

ウルトラマンXやオーブ、ジードに出てきた書物です。ただ、此方では犬塚公爵家の先祖、安倍晴明が書き残した予言書です。

日本皇国連邦

英連邦王国の日本版だが、独自の君主や王室があつた場合はその君主と王室の存続を認めて居る。

主な加盟国は

満州王国

ミクロネシア連邦公国

チベット藩王国

新疆ウイグル藩王国

イランイスラム王国

アラブ首長国連邦

オマーン国

カタール国

クウェート国

サウジアラビア王国

リヒテンシュタイン公国

ルクセンブルク大公国

オランダ王国

ベルギー王国

香港公国

モンゴル王国

北大西洋条約機構（NATO）

通称NATO

アメリカの中心に北アメリカ及びヨーロッパ諸国を中心に結成された軍事同盟。日本皇国とは非加盟国ではあるものの関係が深く弾丸や軍の階級や装備の名称等で日本皇国軍と殆ど変わらない。

日本皇国憲法

前文

日本皇国憲法は主権と統治権を持つ天皇と国民の名に於いてそして天皇と国民の意思によつてこの憲法を定める。

かつての明治の維傑がこの国を近代化し、大正には民主主義の繁栄のために天皇と国民が一体となつて民主主義を実現し、明治から昭和にかけて幾度も国難に匹敵する戦争を乗り越えて、この国の国際的地位を確立し、世界に対して二度とあの恐ろしい禍根起こさない事を世界に対して日本皇国は国民の民主的な選挙によつて選ばれた代表によつて宣誓し、国際社会のさらなる発展を祈願し、日本皇国のさらなる発展と国民の幸福と生存権を守る為に日本皇国は世界に対して如何なる侵略戦争も行わないと宣言する。

そして、日本皇国連邦政府は合理的な理由を除き連邦州の権限の剥奪、国民の人権を剥奪そして差別を禁止する。

天皇と国民は以上の事を決意して皇国連邦政府対して以上の事を守り抜くを伝える責務と義務がある。

そして、日本皇国民は皇国連邦政府を監視し、調査、また管理し、皇国連邦政府により国民が不当なる行為を受けぬようにする、責務がある。

第一章天皇

第一条天皇

天皇は日本皇国の象徴にして元首であり日本皇国並びに連邦そして日本皇国民の統合の象徴である。その地位と統治権は主権の存する日本皇国民の総意に基く。

第二条皇位継承

①皇位は世襲であつて皇位継承は皇統に属する男系子孫によつて継承する。

②皇位継承は皇国連邦議会の議決した皇室典範の定める所により此れを継承する。

第三条天皇と内閣

天皇の統治権は連邦内閣が助言と承認を行い連邦内閣の責任に及び主権の存する国民の名に於いて統治権を行使を行う。

第四条天皇の国事行為

①天皇の国事行為は以下の物とする。

1 皇国連邦議会の招集

2 衆議院の解散する事

3 連邦内閣の認証を行う事

4 連邦内閣の総辞職を認証する事

5 憲法改正、法律、政令、条約、戒嚴令、その他勅令の公布する事

6 衆議院の選挙の公示を行う事

7 国務大臣並びに皇国連邦議會議員及びその他法律で定められた公務員の任命並びに全権公使や大使の信任状の認証を行う事。

8 爵位並びに栄転の授与及び返上を行う事

9 大赦、特赦、減刑、刑の執行の停止や免除を行う

10 御前会議を行う

11 緊急事態宣言の宣言を行う

12 軍を指揮する事

13 その他法律、政令で国事行為と指定した行為

② 天皇の国事行為は連邦内閣の助言と承認が無ければ行う事は出来ない。

第五条 摂政

① 天皇は摂政を皇室典範の規定で任命する。

② 摂政は天皇の代行として前条の国事行為を行う。但し、前条5の憲法改正に、限つては摂政が代行している間は行う事が出来ない。

第六条 皇室財産

① 皇室財産は皇国連邦政府から独立する。

② 皇室財産の譲渡をする場合、皇国連邦議会の承認を得なければならない。

第七条勅命と詔勅

① 天皇は皇国の公共との安全と福祉と国民の権利と生活を守る為、勅命と詔勅を連邦内閣の承認と副署で発令できる

② 勅命及び、詔勅は発令した時、連邦内閣は、次の皇国連邦議会に提出して承認を得なければならぬ。もし、承認を得らねなければ、皇国連邦政府はその勅命と詔勅を未
来向けて廃止を宣言をする。

③ 勅令及び詔勅の効力は法律と同等とするが適用する範囲は法律でこれを定める。

第八条天皇の任命権

① 天皇は、皇国連邦議会の指名に基づいて、連邦内閣総理大臣を任命する

② 天皇は、連邦内閣の指名に基づいて、大審院の長たる裁判官を任命する

第二章 国家

第九条 国号

国号は日本皇国とする。

第十条 国旗と公用語

① 国旗は旭日旗とする。

②第一公用語は日本語とする。

第二公用語はその皇王国及び大公国並びにイスラエル自治共和国そして台湾自治共和国で使用される言語とする。

第十一条国歌

国歌は君が代とする。

第十二条首都

首都は東京特別市とする。

第十三条元号と暦

①暦は元号と西暦と神武暦とする。

②元号は皇位継承があつた時のみに変更する。

第三章皇国連邦軍

第十四条平和主義

①日本皇国は如何なる理由があつても、国際紛争を解決する為の自衛以外の侵略戦争又はそれに準ずる計画を永久に放棄する。また、日本皇国連邦政府及び日本皇国民は平和という崇高な理想のもと過ごす権利を持つ。この権利は如何なる国家、組織、他国民には侵害されない。

②前項の目的を達するため日本皇国連邦政府は軍隊を組織する。

③第一項での規定は個別的並びに集团的自衛権の発動の妨げの理由にはならない。
第十五条軍

日本皇国連邦軍は陸海空宇宙軍と海兵隊の五軍から構成される。

第十六条徴兵制の禁止と志願制

①日本皇国連邦軍は徴兵制の禁止。

②志願兵でのみ兵を編成する。

第十七条皇国連邦軍の目的

①日本皇国連邦軍は主権の存する天皇と国民と国民の人権並びに国家の主権と独立及び世界の民主主義そして世界の信仰の自由を守る事を目的とする。

②前項の目的を達するため日本皇国連邦政府は日本皇国連邦軍を皇国連邦議会の承認を以って編成する。

③日本皇国連邦軍の最高指揮官は天皇とし、天皇の指揮を実行し責任を負うのは連邦内閣総理大臣とする。

④日本皇国連邦軍は如何なる理由があっても政治に介入してはならず、政治的中立を保たなければならない。

⑤日本皇国連邦軍は防衛出動及び災害派遣そして海外派遣を行う場合は事前に、時宜によつては事後に、皇国連邦議会の承認を経ることを必要とする。

第十八条軍令と戒嚴令

軍令と戒嚴令はその他の法律で定める。

第四章日本皇国民

第十九条国民の要件及び国籍そして帰化の条件

①日本皇国民の要件は法律で定める。

②日本皇国民は日本皇国籍のみを保有し、その他の外国籍を保有を認めない。

③外国籍の者が帰化する期間は3年とする。

第二十条国民の主権

日本皇国民の主権は統治権を持つ天皇の名に於いて行使する。

第二十一条基本的人権

基本的人権は如何なる理由があつても永久に侵害と剥奪をされない。

第二十二条華族と法の下の平等

①華族は下の爵位を持つ者を指す。

1 大公

2 公爵

3 侯爵

4 伯爵

5 子爵

6 男爵

②華族は貴族院に議席を置く事ができる。ただし、現役軍人の場合は議席を持つ事は出来ない。

③日本皇国民は法の下で平等を保障される。

④人種、信条、生物、社会的身分、政治的、経済的な理由で差別をされない。

第二十三条居住・移転及び職業選択の自由・外国移住及び国籍離脱の自由

①日本皇国民は公共の福祉に反しない限り、居住、移転と居転及び職業選択の自由を有する。

②何人も、外国に移住、又は国籍を離脱する自由を侵されない。

第二十四条思想と表現の自由

①日本皇国民は公共の福祉に反しない限り思想と表現の自由を有する。

②通信の自由は侵害してはいけない。

第二十五条集会結社の自由

①日本皇国民は公共の福祉と法律に反しない限り集会と結社の自由を有する。

②ただし、前項の規定で、国民の基本的人權と君主制と議會制民主主義を否定する組

織は結社を認めない。

第二十六条文武官の罷免と選挙

①文武官は国民の名に於いて罷免と選挙が行われる。

②普通選挙は保証しなければならない。

③帰化した者の被選挙権は帰化してから5年経ってから出ないと認められない。

第二十七条思想と良心の自由

日本皇国民は思想及び良心の自由を有する

第二十八条宗教の自由

①宗教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治的な権力を行使してはならない。

②何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することは強制されない。

③国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。

第二十九条学問の自由

①学問の自由は保証する。

②皇国は国民全てに平等に学問を保証しなければならない。

③皇国は国民の教育に於いて無償にしなければならない。

第三十条家族生活における個人の尊厳と両性の平等、夫婦別姓

①婚姻は両性の合意のみに基いて成立する。

②個人の尊厳は侵害してはならない。

③夫婦の姓は同姓又は別姓、統合性のどれかを選ぶ事が出来る。

第三十一条生存権と、国の社会的使命

①全ての国民は、健康で文化的な最低限の生活を営む権利を有する。

②国は社会的福祉と保険及び公衆衛生の向上に努めなければならない。

第三十二条勤労の権利と義務と、勤労条件の条件と、勤労者の団結権、児童酷使の禁

止

①全ての国民は勤労の義務と権利を有する。

②賃金、就業時間、休息その他の勤労条件に関する基準は法律で定める。

③勤労者は団結する権利及び団体交渉並び行動をする権利はこれを保証する。

④児童は、これを酷使してはならない。

第三十三条財産権

①財産権はこれを侵してはならない。

②財産権の内容は公共の福祉に適合するように、法律で定める。

③私有財産は、正当な補償の下に、これを公共のために用いる事が出来る。

第三十四条納税の義務

国民は法律の定めるところにより、納税の義務を負う。

第三十五条法律の手續に保証と裁判を受ける権利

①何人も、法律の定める手續によらなければ、その生命若しくは自由を奪われ、又はその他の刑罰を科せられない。

②何人も、裁判所において裁判所を受ける権利を奪われない。

第三十六条逮捕と抑留・拘禁の要件・不法拘禁に対する保障

①何人も、現行犯としては逮捕される場合を除いては、権限を司法官憲が発し、且つ理由となつている犯罪を明示する令状によらなければ、逮捕されない。

②何人も、理由を直ちにつげられ、且つ、直ちに弁護人に依頼する権利を与えられなければ、抑留又は拘禁されない。又、何人も、正当な理由がなければ、拘禁されず要求があれば、その理由は、直ちに本人及びその弁護人の出席する公開の法廷で示されなければならない。

第三十七条住居の不可侵

①何人も、その住居、書類及び所持品について、侵入、搜索及び押収を受けることのない権利は、第三十五条の場合を除いては、正当な理由に基いて発せられ、且つ搜索する場所及び押収する物を明示する令状がなければ、侵されない。

②捜査又は押収は、権限を有する司法官憲が発する各別の令状により、これを行う。

第三十八条拷問及び残虐刑の禁止

公務員による拷問及び残虐な刑罰は、絶対にこれを禁ずる。

第三十九条 刑事被告人の権利及び自己に不利益、自白の証拠能力

① すべて刑事事件においては、被告人は、公平な裁判所の迅速な公開裁判を受ける権利を有する。

② 刑事被告人は、すべての証人に対して審問する機会を充分に与えられ、又、公費で自己のために強制的な手続により証人を求める権利を有する。

③ 刑事被告人は、如何なる場合にも、資格を有する弁護人を依頼することができる。被告人は自らこれを依頼することができじやいときは、国でこれを附する。

④ 何人も、自己に不利益な供述を強要されない。

⑤ 強制、拷問若しくは脅迫による自白又は不当に長く抑留若しくは拘禁された後の自白は、これを証拠とすることができない。

⑥ 何人も、自己に不利益な唯一の証拠が自白である場合には、有罪とされ、又は刑罰を科せられない。

第四十条 遡及処罰の禁止・一時不再理及び刑事補償

① 何人も、実行の時に適法であつた行為又は既に無罪とされた行為については、刑事上の責任は問はれない。又、同一の犯罪について、重ねて刑事上の責任を問はれない。

② 何人も、勾留又は拘禁された後に、無罪の裁判を受けたときは、法律の定めるところ

ろにより、国にその補償を求める事ができる。

第四章皇国連邦議會

第四十一条皇国連邦議會の地位・立法権・義務

①皇国連邦議會は、国権の最高機関であつて、国の唯一の立法機関である。

②皇国連邦議會は、主権の存する天皇と国民の名に於いて立法権を行使して民主主義と皇国の發展と国民の権利を守るために連邦法を制定する義務がある。

第四十二条兩院制

皇国連邦議會は、衆議院及び貴族院の兩院でこれを構成する。

第四十三条兩議院の組織・代表

①衆議院は全国民の代表する選挙された議員で組織する。

②貴族院は華族議員と勅選議員及び多額納税者並びに地方州と特別構成国と自治国から選出される。

③兩議院の議院の定数は、法律でこれを定める。

第四十四条議員及び選挙人の資格

兩議院の議員及びその選挙人の資格は、法律でこれを定める。但し、人種、信条、性別、社会的身分、門地、教育、財産又は収入によつて差別してはならない。

第四十五条衆議院の任期

衆議院議員の任期は四年とする。但し衆議院解散の場合にはその期間満了前に終了する。

第四十六条貴族院議員の任期

大公公侯爵議員と勅選議員は終身制として伯子男爵議員と多額納税者と地方州議員と特別構成国議員と自治国議員は七年に一回の互選または国民の直接選挙とする。

第四十七条選挙に関する事項

選挙区、投票の方法その他両議院の議員の選挙に関する事項は、法律でこれを定める。

第四十八条両議院議員兼職の禁止

何人も、同時に両議院の議員たることはできない。

第四十九条議員の歳費

両議院の議員は法律の定めるところにより、国庫から相当額の歳費を受ける。

第五十条議員の不逮捕特権

両議院の議員は、法律の定める場合を除いては、皇国議会の会期中逮捕されず、会期前に逮捕された議員は、その議院の要求があれば、会期中これを釈放しなければならぬ。

第五十一条議員の発言・表決の無責任

両議院の議員は、議院で行った演説、討論又は表決について、院外で責任を問はれな

い。

第五十二条常会

① 皇国連邦議会の常会は、毎年一回これを召集する。

② 皇国連邦議会の常会は、通年とする。

第五十三条臨時会

① 内閣は、皇国連邦議会の休会中に臨時会の召集を決定することができる。いづれかの議院の総議員の4分の1以上の要求があれば、内閣は、その召集を決定しなければならない。

第五十四条衆議院の解散・特別会、貴族院の緊急集会

① 衆議院を解散されたときは、解散の日から40日以内に、衆議院議員の総選挙を行い、その選挙の30日以内に、皇国議會を召集しなければならない。

② 衆議院が解散されたときは、貴族院は、同時に閉会となる。但し、内閣は、国に緊急の必要がある時に貴族院に緊急集会を求めることができる。

③ 前項の但書の緊急集会において採られた措置は、臨時のものであって、次の皇国議會開会の後10日以内に、衆議院の同意がない場合にはその効力を失う。

第五十五条資格争訟の裁判

両議院は、各々その議員の資格に関する争訟を裁判する。但し、議員の議席を失はせ

るには、出席議員の3分の2以上に多数による議決を必要とする。

五十六条 定足数、表決

①両議院は、各々その総議員の3分の1以上の出席がなければ、議事を開き議決することができない。

②両議院の議事は、この憲法に特別の定がある場合を除いては、出席議員の過半数でこれを決し、可否同数のときは、議長が決するところによる。

第五十七条 会議の公開、会議録、表決の記載

①両議院の会議は、公開とする。但し、出席議員の3分の2以上の多数で議決したときは、秘密会を開くことができる。

②両議院は、各々その会議の記録を保存し、秘密会の記録の中で特に秘密を要すると認められるもの以外は、これを公表し、且つ一般に頒布しなければならない。

③出席議員の5分の1以上の要求があれば、各議員の表決は、これを会議録に記載しなければならない。

第五十八条 役員を選任、議員規則・懲罰

①両議院は、各々その議長その他の役員を選任する。

②両議院は、各々その会議その他の手続及び内部の規律に関する規則を定め、又、院内の秩序をみだした議員を懲罰することができる。但し、議員を除名するには、出席議

員の3分の2以上の多数による議決を必要とする。

第五十九条法律案の議決、衆議院の優越

①決議案は、この憲法に特別の定めがある場合を除いては、両議院で可決したとき法律となる。

②衆議院で可決し、貴族院でこれと異なつた議決をした法律案は、衆議院で出席議員の3分の2以上の多数で再び可決したときは、法律となる。

③前項の規定は、法律の定めるところにより、衆議院が、両議院の協議会を開くことを求めることを妨げない。

④貴族院が、衆議院の可決した法律案を受け取つた後、皇国議會休会中の期間を除いて60日以内に、議決しないときは、衆議院は、貴族院がその法律とを否決したものとみなすことができる。

第六十条衆議院の予算決議、予算決議に関する衆議院の優越

①予算は、さきに衆議院に提出しなければならぬ。

②予算について、貴族院で衆議院と異なつた議決をした場合に、法律の定めるところにより、両議院の協議会を開いても意見が一致しないときは、又は貴族院が衆議院の可決した予算を受け取つた後、皇国議會休会中の期間を除いて30日以内に、議決しないときは、衆議院の議決を皇国議會の議決とする。

第六十一条 条約の承認に関する衆議院の優越

条約の締結に必要な皇国連邦議会の承認については、前条第二項の規定を準用する。

第六十二条 議員の国政調査権

両議院は、各々国政に関する調査を行い、これに関して、証人の出頭及び証言並びに記録の提出を要求することができる。

第六十三条 閣僚の議員出席の権利と義務

連邦内閣総理大臣その他の國務大臣は、両議院の一に議席を有すると有しないにかかはらず、何時でも議案について発言するため議院について発言するため議院に出席することができる。又、答弁又は説明のため求められたときは、出席しなければならない。

第六十四条 弾劾裁判所

① 皇国連邦議会は、罷免の訴追を受けた裁判官を裁判するため、両議院の議員で組織する弾劾裁判所を設ける。

② 弾劾に関する事項は、法律でこれを定める。

第五章 連邦内閣と連邦政府

第六十五条 行政権と連邦政府の権限

① 行政権は連邦内閣と連邦内閣総理大臣に属する。

② 連邦政府の権限はこの憲法及び法律の定めるところにより定める。

第六十六条連邦内閣の組織、皇国連邦議会に対する連帯責任

①連邦内閣は、法律の定めるところにより、その首長たる連邦内閣総理大臣及びその他の國務大臣でこれを組織する。

②連邦内閣総理大臣その他の國務大臣は、文民でなければならない。

③連邦内閣は、行政権の行使について、皇国連邦議会に対し連帯して責任を負う。

第六十七条連邦内閣総理大臣の指名、衆議院の優越

①連邦内閣総理大臣は、皇国連邦議会議員の中から皇国連邦議会の議決でこれを指名すること。この指名は、他のすべての案件に先立つて、これを行う。

②衆議院と貴族院とが異なった指名に議決をした場合に、法律の定めるところにより、両議院の協議会を議決をした後、皇国連邦議会休会中の期間を除いて10日以内に、貴族院が、指名の議決をしないときは、衆議院を皇国連邦議会の議決とする。

第六十八条國務大臣の任免及び罷免

①連邦内閣総理大臣は、國務大臣を任命する。但し、その過半数は、皇国連邦議会の中から選ばなければならない。

②連邦内閣総理大臣は、任意に國務大臣を罷免することができる。

第六十九条連邦内閣不信任決議の効果及び建設的内閣不信任案と衆議院の解散

①連邦内閣は、衆議院で不信任の決議案を可決し、又は信任の決議案を否決したとき

は、10日以内に衆議院が解散されない限り、総辞職をしなければならない。

②但し、皇国連邦議会は内閣不信任案を提出する場合、次の連邦内閣総理大臣を指名してからでないとい閣不信任案を提出は出来ず、連邦内閣も内閣不信任案が可決された時又は否決された際に皇国連邦議会にて衆議院と貴族院にて全会一致の賛成された時以外は衆議院を解散出来ない。

第七十条連邦内閣総理大臣の欠缺・新皇国連邦議会に召集と連邦内閣の総辞職

連邦内閣総理大臣が欠けたとき、又は衆議院議員総選挙の後に初めて皇国連邦議会の召集があつたときは、連邦内閣は、総辞職をしなければならない。

第七十一条総辞職後の連邦内閣

前二条の場合には、連邦内閣は、あらたに連邦内閣総理大臣が任命されるまで引き続きその職務を行う。

第七十二条連邦内閣総理大臣の職務

連邦内閣総理大臣は、連邦内閣を代表して議案を皇国連邦議会に提出し、一般国務及び外交関係について皇国議会に報告し、並びに行政各部を指揮監督する。

第七十三条連邦内閣の職務及び皇国連邦政府と皇国連邦議会の専属事項

①連邦内閣は、他の一般行政事務の外、左の事務を行う。

1 法律を誠実に執行し、国務を総理するころ。

2 外交関係を処理すること。

3 条約を締結すること。但し、事前に、時宜によつては事後に、皇国連邦議会の承認を経ることを必要とする。

4 法律の定める基準に従い、官吏に関する事務を掌理すること。

5 予算を作成して皇国連邦議会に提出すること。

6 この憲法及び法律の規定を実施するために、政令を制定する。但し、政令には、特にその法律の委任がある場合を除いては、罰則を設けることができない。

7 大赦、特赦、減刑、刑の執行の免除及び復権を決定する。

②皇国連邦政府と皇国連邦議会の専属事項

1 天皇、及び皇室及び元号そして暦に関すること。

2 国歌、並びに国旗に関すること。

3 皇国連邦議会の組織及び運営、又は皇国連邦議会選挙に関すること

4 外交並びに住民保護を含む安全保障に関すること。

5 日本皇国国民たる要件に関すること。

6 国の財政のこと。

7 皇国連邦政府及び皇国連邦政府直轄の法人の組織及び職員に関すること。

8 移転の自由、旅券制度、出入国及び犯罪人の引渡に関すること。

9 通貨、貨幣及び造幣制度、度量衡並びに日時制度に関すること。

10 関税及び通商区域の統一、通商及び航行条約、貨物取り引きの自由並びに関税及び国境の警備を含む外国との貨物取引並びに支払取引に関すること。

11 道路交通並びに海上又は航空の交通及び運輸に関すること。

12 皇国連邦政府の所有する道路又は鉄道の交通、建設、維持及び運営並びに利用料金の徴収に関すること。

13 郵便、電気通信制度及びエネルギー供給に関すること。

14 刑事警察、連邦及び道州の存立及び安全の擁護又は国際犯罪の取締における皇国連邦政府と連邦道州との協力に関すること。

15 公教育の原則及び学校教育制度に関すること。

16 皇国連邦政府のために利用する統計に関すること。

17 租税法

18 裁判法

19 社会法

20 民法、民事訴訟法、商法及び公認会計士制度。

21 刑法、刑事手続法及び矯正保護に関すること。

22 知的財産法

23 経済法

24 日本皇国における均一な生活關係を創出するため、又は国家全体の利益に関わる法的又は経済的統一を保持するため、皇国連邦法律が必要なこと。

25 その他この憲法において皇国連邦法律による規定が定められている事項。

第七十四条法律・政令の実施

法律及び政令には、すべての主任の國務大臣が署名し、連邦内閣總理大臣が連署することをする。

第七十五条國務大臣の特典

國務大臣は、その在任中、連邦内閣總理大臣の同意がなければ、追訴されない。但し、これがため、追訴に権利は、害されない。

第六章司法権

第七十六条司法権、裁判所、裁判官の独立

① 全ての司法権は大審院及び法律の定めるところにより設置する下級裁判所に属する。

② 全ての裁判官はその良心に従い独立してその職権を行いこの憲法及び法律にのみ拘束される。

③ 特別裁判所は軍事裁判所並びに行政裁判所及び憲法裁判所を除きこれを設置でき

ない。行政機関終審として裁判を行うことができない。

第七十七条大審院の規則制定権

①大審院は、訴訟に関する手続、弁護士、裁判の内部規律及び司法事務処理に関する事項について発言規則を定める権限を有する。

②検察官は、大審院定める規則に従はなければならない。

③大審院は、下級裁判所に関する規則を定める権限を、下級裁判所に委任することができる。

第七十八条裁判官の身分の保障

裁判官は、裁判により、心身の故障のために職務を執ることができないと決定された場合を除いては、公の弾劾によらなければ罷免されない。裁判官の懲戒処分は、行政機関がこれを行うことはできない。

第七十九条大審院の裁判官、国民審査、定年、報酬

①大審院は、その長たる裁判官及び法律の定める員数のその他の裁判官でこれを構成し、その長たる裁判官以外の裁判官は、内閣でこれを任命する。

②大審院の裁判官の任命は、その任命後初めて行はれる衆議院議員総選挙の際国民の審査に付し、その後10年を経過した後初めて行はれる衆議院議員総選挙の際更に審査に付し、その後も同様とする。

③前項の場合において、投票者の多数が裁判官の罷免を可とするときは、その裁判官は、罷免される。

④審査に関する事項は、法律でこれを定める。

⑤大審院の裁判官は、法律の定める年齢に達した時に退官する。

⑥大審院の裁判官は、すべて定期に相当額の報酬受ける。この報酬は、在任中、これを減額することができない。

第八十条 下級裁判所の裁判官・任期・定年、報酬

①下級裁判所の裁判官は、最高裁判所の指名した者の名簿によつて、内閣でこれを任命する。この裁判官は、任期は10年とし、在任されることが出来る。

但し、法律の定める年齢に達した時には退官する。

②下級裁判所の裁判官は、すべて定期に相当額の報酬を受ける。この報酬は、在任中、これを減額することができない。

第八十一条 法令審査権と憲法裁判所

憲法裁判所は、一切の法律、命令、規則又は処分が憲法に適合するかしないかを決定する権限を有する終裁判所である。

第八十二条 裁判の公開

①裁判の対審及び判決は、公開法廷でこれを行う。

②裁判所が発表裁判官の全員一致で、公の秩序又は善良の風俗を害する虞があると行うことができる。但し、政治犯罪、出版に関する犯罪又はこの第四章で保証する国民の権利が問題となつてゐる事件の対審は、常にこれを公開しなければならない。

第七章財政

第八十三条財政処理の基本原則

国の財政を処理する権限は、皇国連邦議会の決議に基いて、これを行使する。

第八十四条課税

あらたに租税を課し、又は現行の租税を変更するには、法律又は法律の定める条件によることを必要とする。

第八十五条国費の支出及び国の債務負担

国費を支出又は国が債務を負担するには、皇国連邦議会の議決に基くことを必要とする。

第八十六条予算

連邦内閣は、毎会計年度の予算を作成し、皇国連邦議会に提出して、その審議を受け議決を経なければならない。

第八十七条予備費

①予見し難い予算の不足に充てるため、皇国連邦議会の議決に基いて予備費を設け、

連邦内閣の責任でこれを支出することができる。

②すべて予備費の支出については、連邦内閣は、事後に皇国連邦議会の承諾を得なければならぬ。

第八十八条皇室財産・皇室の費用

皇室財産は国から独立する。但し、すべての皇室の費用は、予算に計上して皇国連邦議会の議決を経なければならない。

第八十九条公の財産の支出又は利用の制限

公金その他の公の財産は、宗教上の組織若しくは団体の使用、便益若しくは維持のため、又は公の支配に属しない慈善、教育若しくは博愛の事業に対し、これを支出し、又はその利用に供してはならない。

第九十条予算検査、会計検査院

①国の収入支出の計算は、すべて毎年会計検査院がこれをケし、内閣は、次の年度に、その検査報告とともに、これを皇国連邦議会に提出しなければならない。

②会計検査院の組織及び権限は、法律のでこれを定める。

第九十一条財政状況の報告

連邦内閣は、皇国連邦議会及び国民に対し、定期に、少くとも毎年一回、国の財政状況について報告しなければならない。

第八章連邦と特別構成国と自治国

第九十二条連邦構成体の権限とその構成

① 連邦構成体の権限は連邦政府の権限に属さない権限は連邦構成体の権限とする。連邦政府の権限は第七十三条第二項の規定に基く。

② 連邦道州及び皇王国並びに大公国そして、イスラエル自治共和国と台湾自治共和国はこの憲法並びに皇国連邦法に違反する法律並びに条例を執行、公布をしなければその権限は剥奪されない。

③ 連邦道州及び皇王国並びに大公国そしてイスラエル自治共和国はこの憲法の第四十条第七項及び第四十三条第二項の規定により貴族院議員を選出する事が出来る。但し、議席数は第四十三条第三項の規定に基く。

第九十三条皇王国と大公国と連邦政府直轄特別自治都市

① 皇王国は皇王が治める特別自治国家である。

② 大公国は大公が治める特別自治国家である。

③ 連邦政府直轄特別自治都市は首都、東京特別市、大阪特別市、平壤特別市、新北特別市、ソラ特別市の四市として扱う。

④ 前項の四つの特別市は連邦道州と皇王国と大公国そしてイスラエル自治共和国と同等に扱う。

第九十四条イスラエル自治共和国

①イスラエル自治共和国はユダヤ人による自治共和国である。

②イスラエル自治共和国の首長はイスラエル自治共和国大統領とする。

第九十五条台湾自治共和国

①台湾自治共和国は台湾住民による自治共和国である。

②台湾自治共和国の首長は台湾自治共和国総統とする。

第九十六条連邦道州の機関、その直接選挙及び特別法の住民投票

①連邦道州には、法律の定めるところにより、その議事機関として議会を設置する。

②連邦道州の長、その議会の議員及び法律の定めるその他の吏員は、その連邦道州の

住民が、直接これを選挙する。

③一の連邦道州のみに適用される特別法は、法律の定めるところにより、その連邦道州の住民の投票においてその過半数の同意を得なければ、皇国連邦議会は、これを制定することができない。

第九章緊急事態と戒厳令

第九十七条緊急事態の宣言

①連邦内閣総理大臣は統治権を持つ天皇の名に於いて我が国に対する外部からの武力攻撃、内乱等による社会的秩序の混乱、地震等による大規模自然災害その他の法律で

定める、緊急事態において、特に必要があると認めるときは、法律の定めるところにより、閣議にかけて、緊急事態の宣言を発することができる。

② 緊急事態の宣言は、法律の定めるところにより、事前又は事後に皇国連邦議会の承諾を得なければならない。

③ 連邦内閣総理大臣は、前項の場合に於いて不承認の議決があつた時、皇国連邦議会が緊急事態の宣言を解除すべき旨を議決した時、又は事態の推移により当該宣言を継続する必要ないと認められる時は、法律の定めるところにより、閣議にかけて、当該宣言を速やかに解除しなければならない。また、百日を超えて緊急事態の宣言を継続しようとする時は、百日越えるごとに、事前に皇国連邦議会の承認を得なければならない。

④ 第二項及び前項後段の皇国連邦議会の承認については、第五十九条第二項の規定を準用する。この場合に於いて、同項中「三十日以内」とあるのは、「五日以内」と読み替えるものとする。

第九十八条緊急事態の宣言の効果

① 緊急事態の宣言が発せられた時は、法律の定めるところにより、連邦内閣は法律と同一の効力を有する政令を制定する事が出来るほか、連邦内閣総理大臣は財政上必要な支出その他の処分を行い連邦州及び皇王国並びに大公国、自治共和国の首長に対して必要な指示をすることができる。

②前項の政令の制定及び処分については、法律の定めるところにより、皇国連邦議会の承認を得なければならない。

③緊急事態の宣言が発せられた場合には、何人も、法律の定めるところにより、当該宣言に係る事態に於いて国民の生命、身体及び財産を守るために行われる処置はに關しては国その他の公の機関の指示に従わなければならない。この場合に於いても、国民の権利その他の基本的人權に關する規定は、最大限に尊重しなければならない。

④緊急事態の宣言が発せられた場合に於いては、法律の定めるところにより、その宣言が効力を有する期間、衆議院は解散されないものとする、両議院の議員の任期及びその選挙日の特例を設ける事ができる。

第九十九条戒嚴令の宣告

①連邦内閣総理大臣は国民の権利及び生命、身体、財産の危険がある場合、連邦内閣は主権の存する、天皇と国民の名に於いて戒嚴令を宣告する。

②戒嚴令の宣告は事前又は時宜によつては事後に皇国連邦議會に承諾を得なければならない。

③戒嚴令の発令中は軍に行政及び司法に一部又は全部の権限を委譲しなければならない。戒嚴令の宣告の承諾は同条の前項の規定に基づく。

④戒嚴令の期間は第九十七条第四項の規定及び政令又は法律に基づく。

⑤連邦内閣総理大臣は、前項の場合に於いて、不承認の議決があつた時、皇国連邦議会にて戒嚴令の宣告解除を解除する議決が行われた時、内閣総理大臣は戒嚴令を法律に定める所により宣告を解除をする宣言する。

第百条憲法改正とその限界

第百条憲法改正の手続き、その公布

①この憲法の改正は、各議院の総議員の過半数以上の賛成で、皇国連邦議会が、これを発議し、国民に提案してその承認を経なければならぬ。

この承認には特別の国民投票又は皇国連邦議会の定める選挙の際行はれる投票において、その過半数の賛成を必要とする。ただし皇国連邦議会の総議員の三分の二以上の場合は国民投票は行はず連邦構成体の過半数の賛成でこれを承認する。

②憲法改正について前項の承認を経たときは、天皇は、天皇と国民の名で、この憲法と一体を成すものとして、直ちにこれを公布する。

第百条憲法改正と改正の限界と制限

①君主制と議会制民主主義及び国の伝統文化と基本的人権そして連邦道州の権限を否定する憲法改正は行ふ事は出来ない。

②この憲法は天皇が崩御してから一カ月を経ない時、連邦内閣総理大臣が不在の

時、衆議院が解散されており特別会を經ていない時、貴族院の道州及び特別構成国並びに自治国議員の選挙が行われている時または摂政が置かれている時は改正する事が出来ない。

第百零九条 最高法規

第百零九条 最高法規、条約及び国際法規の遵守

①この憲法は、国の最高法規であつて、その条規に反する法律、命令、詔勅及び国務に関するその他の行為の全部又は一部は、その効力を有しない。

②日本皇国が締結した条約及び確立した国際法規は、これを誠実に遵守する事を必要とする。

第百一十条 憲法尊重擁護の義務

第百一十条 天皇又は摂政及び国務大臣、皇国連邦議會議員、裁判官その他の公務員はこの憲法を尊重し擁護する義務を負う。

第百一十一条 捕捉

第百

日本皇国連邦軍

日本皇国連邦軍

日本皇国連邦陸軍

常備兵 48 万人

予備役兵 32 万人

日本皇国連邦陸軍はこの国の領土防衛の最後の要でもある為、個人装備などを始めとした多くの装備が世界でも最新鋭又は旧式でも非常に性能が良く多くのアジア諸国からも陸軍の装備を輸出を希望される。現在はソラ特別市からの技術提供で最新兵器を開発を進めている。

連邦陸軍編成

第一方面軍

第一軍

近衛師団

第一師団（東京特別市、関東州）

第三十四旅団（南関東）

第三十五旅団（北関東）

第二方面軍

第二軍

第二師団（北海道）

第五師団（北海道）

第六師団（東北州南部）

第七師団（北海道）

第九師団（東北州北部）

第十一師団（北海道）

第一機甲師団（樺太、千島列島）

第三方面軍

第三軍

第三師団（関西州）

第十師団（東海州、北陸州）

第十二師団（甲信越州）

第四方面軍

第四軍

第四師団（九州北部）

第八師団（九州南部）

第十三師団（中国州）

第十四師団（四国州）

第十五師団（琉球州）

第十六師団（台湾自治共和国）

第十七師団（朝鮮大公国）

第二機甲師団（朝鮮大公国）

第三機甲師団（台湾自治共和国）

第五方面軍

第五軍

第十八師団（由古丹州）

第十九師団（山城州）

第二十師団（秋津州）

第二十一師団（瑞穂州）

第二十二師団（イスラエル自治共和国）

第六方面軍

第六軍

第二十三師団（トリスティン大公国）

第二十五旅団（アルザーノ大公国）

第二十六旅団（カトヴァーナ大公国）

第二十七旅団（アティスマータ大公国）

第二十八旅団（ロートレアモン大公国）

第二十九旅団（ジユラ・テンペスト大公国）

第七方面軍

第七軍

第二十四師団（龍人皇王国）

第三十旅団（水魚人皇王国）

第三十一旅団（精妖皇王国）

第三十二旅団（獸人皇王国）

第三十三旅団（魔夢幻皇王国）

連邦陸軍裝備

銃火器と機関銃

89式5・56mm自動小銃

1989年に正式採用されたアサルトライフル。多くのアジア諸国の陸軍に採用されているアサルトライフル。その為現実より調達価格が低い。調達数の半分が輸出されている。

調達配備数、30万丁

06式7.62mm自動小銃

2006年に正式採用されたアサルトライフル。89式自動小銃より口径が大きく威力はあるが射程が89式より短い。

調達配備数、26万丁

M4A15.56mmカービン銃

アメリカ陸軍で使用されるアサルトカービン銃。

調達配備数、1万6000丁

12式12.7mm重機関銃

2012年に採用された12.7mmの重機関銃で主に支援戦闘に使われたり軍艦と軍の車にも搭載されている。

調達配備数、16万8000丁

ミニミ7.62mm軽機関銃

現実の変わららずです。

調達配備数、3万丁

ブローニングM2・12.7mm重機関銃

現実と変わらずです。

調達配備数、2万丁

03式7.62mm対人狙撃銃

2003年に正式採用された対人狙撃銃。

調達配備数、5万丁

M82・12.7mm対物狙撃銃

2006年に正式採用された対物狙撃銃。

口径が大きすぎるため戦車や装甲車に主に使用される。

調達配備数、6000丁

ヘカトII対物狙撃銃

2007年に正式採用された対物狙撃銃

M82対物狙撃銃同様に戦車や装甲車に使用される。

調達配備数、4000丁

05式貫通銃

2005年に正式採用されて装甲歩兵専用の貫通銃で装甲車と戦車の装甲を最も簡

単に貫通してしまう槍。

調達配備数、1万3000丁

04式7・62mm機関銃

2004年に正式採用された装甲歩兵専用の手持ちガトリングでもある。

調達配備数、1万1600丁

08式35mmキャノン砲

2008年に正式採用された装甲歩兵専用の手持ち35mmの火砲で威力の高さゆえに反動が強い。

調達配備数、9200丁

06式軽量迫撃砲

2006年に正式採用された装甲歩兵専用の迫撃砲で一発で装甲車を大破させる破壊力を誇る。

調達配備数、8200丁

07式重爆迫撃砲

2007年に正式採用された装甲歩兵専用の迫撃砲で06式軽量迫撃砲より破壊力があるその威力は戦車の装甲をぶち抜いて一発で戦車を破壊する威力を誇る。

調達配備数、7300丁

12式高高度対空ミサイル砲

2012年に正式採用された装甲歩兵専用の十発の高高度対空ミサイルで一度に十発を打つ事が出来るミサイル砲で一発でヘリコプターを破壊する威力を誇る。

調達配備数、6900丁

10式多連式対戦車ミサイル砲

2010年に正式採用された装甲歩兵専用の手持ちの六発を撃つことが出来る多連式のミサイルで一発で戦車を破壊する威力を誇る。

調達配備数、7200丁

軍事車両

戦車と機動戦車及び自走砲

10式戦車

2010年に正式採用された主力戦車で口径が大きく55口径の125mm砲

調達配備数、5300両

90式戦車

1990年に正式採用された主力戦車の一つで50口径の125mm砲

調達配備数、4500両

12式機動戦車

2012年に正式採用された主力機動戦車。

現実の2016年に正式採用された16式機動戦車だが、55口径125mm砲で口径が大きい。

調達配備数、8000両

09式200mm自走加榴砲

2009年に正式採用された自走砲。大口径の自走砲。

調達配備数、5000両

99式155mm自走加榴砲

1999年に正式採用された自走砲。現実と変わらずです。

調達配備数、3000両

装甲車

07式攻撃装甲車

装備は74式7・62mm自動小銃

調達配備数、2000両

05式偵察警戒車

威力偵察、警戒任務を主としている。

調達配備数、2500両

09式指揮車

主に後方で指揮などを行う車両

調達数、3000両

その他、多数

ヘリコプター

AH-1Sコブラ

アメリカ陸軍で正式採用された後に2004年に採用された攻撃ヘリコプター。

調達配備数、1500機

AH-64Dアパッチロングボウ

此方もアメリカ陸軍で正式採用された後に1990年に正式採用された攻撃ヘリコプター。

調達配備数、2000機

01式攻撃ヘリコプター

日本で開発されて、2001年に正式採用された攻撃ヘリコプター。

調達配備数、1800機

11式偵察ヘリコプター

日本で開発されて、2011年に正式採用された偵察ヘリコプター。

調達配備数、500機

02式輸送ヘリコプター

日本で開発されて、2002年に正式採用された輸送ヘリコプター。

調達配備数、780機

装甲兵器

装甲歩兵科

装甲甲冑

日本皇国連邦陸軍の独自の兵科である装甲歩兵科専用の戦闘服でもある。

見た目はEDF4に出て来るフェンサーの同じ見た目である。その防御力は最大20mm弾を耐えられるだけの防御力を誇り機動力は低いがその代わりに圧倒的な火力を誇り様々な専用の武器を使用のハンマーもどきや機械式で刃先だけが出て来る槍そして連射式のガトリングや高火力である追撃砲やロックオン式のミサイルなどがある。

配備数2万4000機

日本皇国連邦海軍

常備兵50万人

予備役兵34万人

日本皇国の領海を守護する軍隊。世界三大海軍の一つで世界で唯一でアメリカ海軍

が恐れられている。

海軍の編成

連合艦隊

世界で最も有名な日本皇国連邦海軍の通常編成艦隊で構成される艦隊部隊。

第一艦隊（関東州、東北州、北海道）

第二艦隊（関西州、東海州）

第三艦隊（中国州、四国州、北陸州）

第四艦隊（九州、琉球州、台湾州、朝鮮大公国）

第五艦隊（由古丹州、山城州、秋津州、瑞穂州）

第六艦隊（イスラエル自治共和国）

第七艦隊（トリストイン大公国、アルザーノ大公国、カトヴァーナ大公国、アティス

マータ大公国、ロートレアモン大公国、ジユラ・テンペスト大公国）

第八艦隊（龍人皇王国、水魚人皇王国、精霊皇王国、獣人皇王国、魔夢幻皇王国）

海軍の装備

原子力空母

赤城型原子力空母

一番艦「赤城」

全長340メートル

全幅64メートル

最大満水排水数量11万トン

艦載機数100機

二番艦「信濃」

全長338メートル

全幅63メートル

最大満水排水数量10万9800トン

艦載機96機

三番艦「出雲」

全長340メートル

全幅65メートル

最大満水排水数量11万トン

艦載機100機

四番艦「日向」

全員335メートル

全幅62メートル

最大満水排水数量10万9700トン

艦載機94機

原子力潜水艦

青龍型原子力潜水艦

一番艦「青龍」

全長165メートル

全幅12メートル

二番艦「蒼龍」

全長168メートル

全幅12・6メートル

三番艦「光龍」

全長164メートル

全幅12・7メートル

四番艦「龍神」

全長166メートル

全幅13メートル

その他、多数の通常動力潜水艦24隻と攻撃型原子力潜水艦を9隻程保有。

巡洋艦

大和型ミサイルイージス巡洋艦

一番艦「大和」

全長320メートル

全幅63メートル

最大満水排水数量12万トン

二番艦「武蔵」

全長318メートル

全幅62メートル

最大満水排水数量11万5600トン

その他三隻

長門型攻撃ミサイル巡洋艦

一番艦「長門」

全長315メートル

全長61メートル

最大満水排水数量10万9800トン

二番艦「陸奥」

全長316メートル

全幅61・5メートル

最大満水排水数量11万2600トン

その他2隻

金剛型ミサイル巡洋艦

一番艦「金剛」

全長300メートル

全幅59・5メートル

最大満水排水数量9万8500トン

二番艦「三笠」

全長302メートル

全幅59・7メートル

最大満水排水数量9万8600トン

その他2隻

村雨型ミサイル駆逐艦

一番艦「村雨」

全長250メートル

全幅48・5メートル

最大満水排水数量8万7500トン

二番艦「春雨」

全長251メートル

全幅48・6メートル

最大満水排水数量8万7700トン

その他巡洋艦並びに駆逐艦及びフリゲート艦、二百隻

日本皇国連邦空軍

常備兵46万人

予備役兵30万人

日本皇国の領空を守る第三の軍で広い領空を守っているため非常に性能の高い戦闘機は調達、配備されている。

空軍の編成

第一航空軍団

首都防衛航空軍（東京特別市）

第一航空軍（関東州）

第二航空軍団

第二航空軍（北海道）

第五航空団（北海道）

第六航空軍（東北州北部）

第七航空団（北海道樺太）

第九航空軍（東北州南部）

第十一航空団（北海道千島）

第三航空軍団

第三航空軍（関西州）

第十航空団（東海、北陸州）

第十二航空団（甲信越州）

第四航空軍団

第四航空軍（九州北部）

第八航空団（九州南部）

第十三航空団（中国州）

第十四航空団（四国州）

第十五航空団（琉球、台湾州）

第十六航空団（朝鮮大公国、イスラエル自治共和国）

第十七航空軍（アルザーノ、アティスマータ、カトヴァーナ、トリステイン、ロー
トレアモン、ジュラ・テンペスト大公爵）

第五航空軍団

第十八航空軍（龍人皇王国）

第十九航空軍（水魚人皇王国）

第二十航空軍（精妖皇王国）

第二十一航空軍（獸人皇王国）

第二十二航空軍（魔夢幻皇王国）

空軍の装備

主力戦闘機

F-15J

アメリカ軍で開発された第四世代ジェット戦闘機。イーグルの通称で知られる当時
としては最強の戦闘機。1986年に日本皇国空軍にて正式採用及びライセンス生産
を開始。

調達配備数480機

F-35J/A/B/C

第五世代ジェット戦闘機のマルチロール機で通常離着陸のA型が空軍にSVTOL

機のB型が海兵隊に艦載機のC型が海軍にそれぞれ配備された。

調達配備数がA型、580機、B型、240機、C型、230機で合計1050機

F-22JA

第五世代ジェット戦闘機の制空戦闘機。

アメリカ軍で開発されてアメリカ空軍以外では配備、調達そしてライセンス生産をしているのは日本皇国のみ。

調達配備数690機

F-2A/B

第4・5世代型のジェット戦闘機のマルチロール機。

現実とは殆ど変わらないが日本皇国の完全な国産ジェット戦闘機だが、モデルがF-16と言うのは変わらない。しかし、A型は空軍にB型はSVTL0機として海兵隊に配備されている。

調達配備数、A型、450機、B型は150機で合計は650機

F-3A/B

第五世代型のジェット戦闘機。此方も完全に日本皇国の国産ジェット戦闘機。

F-35とF-22のデータを元に開発されたステルス機で双方の弱点をカバーする戦闘機でもありマルチロール機でもある。A型は空軍にB型は海軍に配備されてい

る。

調達配備数、A型は560機、B型は240機で合計は800機

ユーロファイタータイフーン

ヨーロッパの共同開発された第4・5世代ジェット戦闘機でF-22とF-35、両機が出来ることをこの一機で行う事が可能な為日本皇国空軍でも採用、配備された。

調達配備数、300機

攻撃機

A-10サンダーボルト

アメリカ空軍で開発された攻撃機。現実とは変わらずです。

調達配備数60機

AC-130

C-130の改造で現実とは変わらずです。

調達配備数は80機

A-1

日本皇国の国産攻撃機。A-10とは見た目が殆ど変わらないが生産、運用が此方の方が新しい為運用年数が違う

調達配備数は95機

爆撃機

B—2

現実のB—2とは変わらずです。アメリカ以外では日本のみが運用。
調達配備数89機

B—1

日本の国産ジェット爆撃機で、ステルス機でもある

調達配備数は78機
輸送機

C—130

殆ど変わらずですが長距離を輸送可能。

調達配備数は240機

早期警戒機、早期管制機

E—767

現実とは変わらずです。

調達配備数34機

哨戒機

P—1

アメリカで開発された哨戒機で、日本でも採用されている。

調達配備数 15 機

空中給油機

KC-11

日本皇国で開発された空中給油機。その性能の高さは折り紙付きでアメリカがわざわざ購入を表明するほどの高性能な空中給油機で、実際にアメリカを始めとしたイギリス軍にも販売している空中給油機。

調達配備数は 26 機

練習機

T-1

ジェット練習機

調達配備数 230 機

T-2

ジェット練習機

調達配備数 350 機

無人戦闘機

今だ開発中につき、調達配備がまだ行われていない。

日本皇国連邦宇宙軍

常備兵 44 万人

予備役兵 28 万人

日本皇国軍の中で ICBM や軍事衛星などで他の軍の援護をしている。編成や装備は秘匿事項が多いため常備兵と予備兵のみ判明している。

日本皇国連邦海兵隊

常備兵 32 万人

予備役兵 26 万人

日本皇国軍の中で唯一軍の名称が使えない軍種でもあり最小の軍種でもある。陸海空軍の統合軍種でもあり装備の殆どがその三軍とは変わらず日本版アメリカ海兵隊でもあるが此方はあくまで戦争が起きた時に他の軍が来るまでの間の防衛の部隊または先発の殴り込み隊でもある。

独自装備としては強襲揚陸艦は 25 隻程がある。

準軍事組織

皇国沿岸警備隊

国土交通省直轄の海上警察。基本的には国土交通大臣の直轄だが有事の際には日本皇国海軍になる事が国防六法に定められている。沿岸警備隊の階級は基本的に皇国軍

と同じであるが将官の人数が合計

皇国沿岸警備隊員

隊員数、10万人

日本皇国連邦軍の階級

元帥

将官

大将

中将

少将

准将

佐官

大佐

中佐

少佐

尉官

大尉

中尉
少尉
准士官
准尉
下士官
曹長
軍曹
伍長
兵
兵長
上等兵
一等兵
二等兵

入学編

プロローグ

西暦1996年。神武暦2656年6月5日

この日ある三つ子の赤子が生まれた。そしてその一人の赤子は後の英雄にして、のちの歴史に名を残す偉人となった、男の子だ。

それから数年後彼は成長した。彼は今自分を強くする為は過酷で普通のまともな成人男性がすぐに根をあげる過酷な修行を行い、その修行に耐えて彼はさらに強くなる。そして、彼の名は、犬塚孝一。名門犬塚公爵家の長男でもある。

彼や彼の家族そして彼の友人達はこの時知らなかった。彼が歴史を動かす事にこの時誰も予想していなかった。

それからさらに数年後彼は愛する恋人達と一緒に魔法科高校に入学したまさにこの事が、彼の人生とこの国と世界の歴史を動かす事になり。

2012年4月某日

「ああ、何でもここに入学しなきゃいけないんだよ。このクソが。」

と、ぼやく両頬に左右対称で三本ずつの合計六本の猫髭が特徴的な一人の少年、犬塚孝一がいた。彼は名門貴族犬塚公爵家長男として生まれ、そして犬塚公爵家の跡取りとして様々な教育を受けて成長した。まさにエリート中のエリートにして、天才の中の天才。それは彼の両親の考えで彼がここに入学することになったのだ。

彼は最初は嫌がったが、だが魔法科高校入学は謂わばエリートと言われ入学をすれば問題を起ささなければ、将来は実質約束をされたような物だ。だからこそ彼は渋々、魔法科高校の中でも難関とも言うべき第一高校に入試を受けて上位三位以内で入学したのだ。そして彼の隣で彼の愚痴を聞きながらも彼を励ます、金髪の少女が一人。

「孝一。そんな事言っても、無理だよ。一緒に頑張ろ。ね？」

と言った彼女のは、孝一の恋人の一人にして彼の後の奥さんの一人でもあるアンジェ

リーナクドウシルーズ、通称リーナ。

「リーナ。そう言われても、嫌々来てんだよ俺？」

とリーナにぼやく孝一、そしてリーナに対して、こう言った。

「あくもうねえリーナ。お願いがあるんだけど。」

孝一がリーナに言ったそしてリーナは

「何、お願いって？」

聞き、孝一が

「キスして。」

と言いリーナの顔を赤くする。だがこれで彼が大人しく入学式に出れば万々歳だ。

だからリーナは彼とキスをしたのだ。そして二人はそのまま入学式会場へ向かう。

だが見事なまでに前と後ろでハッキリと分かれている。そう第一高校は徹底した実力主義の学校で、孝一にとっては、彼の性格からすれば、自分の体に合う学校でもあったのでここに入学したのだ。

一科生と二科生で分けられるが、元々生来実力主義であると同時に現実主義で合理主義の彼にとっては胸糞悪い制度にして人の才能ややる気を無くす制度を嫌い、特に一科生や二科生の制度を極端に嫌っておるものの、入学した手の彼にそこまでの力はここには無い。

だから、秘密裏この制度を無くし、実力や才能がある者を上へ行き。ない者は落第またはエリート街道から別の場所に、行くべきだと彼は考えている。

時間が経ち、入学式がまあ色々あり新入生答辞で新入生代表として四葉深雪がスピーチを行った。そして生徒に与えられるIDを受け取り。そして自分が何処のクラスかを確認する。そしてリーナが自分のクラスを聞きに来た。

「孝一はクラスどこ？私1年B組。」

とリーナが言った。孝一こう返した。

「リーナと同じクラス。まあこれからよろしく頼むわ。」

とリーナに言って、リーナも頷く。そして二人はそのまま家に帰宅したのだ。

入学編 Story 1

入学式の翌日、孝一は朝早くから自宅の庭で木刀を振っていた。そして振り続ける事、20分。自分に近づく気配をする、しかし彼は振り向かず自分に近づく者に言つた。

「どうした。リーナ。」

と孝一が、恋人のリーナに聞いた。

「孝一、朝食出来たは、あとそろそろ制服に着替えて。登校の時間が来るからね。」

そしてその言葉を聞いた、孝一は頷き、家の中に入る。

そして、制服に着替え、家の食卓に向かう。朝食が用意された机に座った。そしてそのまま朝食を食べ始める。食べ始めてから、10分後朝食を食べ終えてその日は偶々家に帰つて来ていた父が自分に、

「孝一。今日から第一高校だが、あまりトラブルを起こすなよ。お前は昔からしょっちゅうトラブルを起こしてるからな？」

と言われ、凶星をつかれた孝一は、

「ああ。」

と言ひ、学校へ向かう準備して学校へ登校する。

孝一は恋人のリーナと一緒に登校する。そして、第一高校について二人は自分達のクラスに入った。その直後に四葉達也が登校して来て、クラスにはそれなりの人達が来ていた。そして自分達の席を確認して、その席に着いた所したら、それぞれに二人の男女は近づく。男子の方は、十三束鋼で、女子の方は、明智英美がそれぞれに話しかける。

「君が四葉達也君と犬塚孝一君それとアンジェリーナクドウシルーズさんだね。僕は十三束鋼だよ。宜しく。」

「私は明智英美だよ、エイミイと呼んで良いよ。」

と二人は自己紹介して来た。達也が、

「俺は、四葉達也だ。こいつは、」

自己紹介して自分に目を向ける。

「俺は犬塚孝一だ。あと達也何故俺に目を向ける。」

と孝一が

「私はアンジェリーナクドウシルーズよ、リーナで良いわよ。」

とリーナが言った。そして鋼が自分達に

「君達って、仲が良いんだね。」

と聞いて来た。

そして達也が

「ああ、そうだ。」

と答える。だが、当の孝一は相変わらずマイペースにやっている。リーナが自分に話しかける。

「孝一、話の輪に入ったら？」

と言つて来たが、当の本人は、「ヤダ」といい拒否をする。そしたら、リーナがあきれかえる。

時間が経ち、朝のホームルームが始まり担任が入ってきたのだ。まず、今日は様々な場所ので学校の先輩達が公開で授業するらしく、自由に見学することができたので、見学することに、そしたら、鋼とエイミイと一緒に見学をしようと誘ってきたので、一緒に見学することにそんな時達也の知り合いと思われる二科生だ声かけてきた。一人は西城レオンハルト、一人は柴田美月、で最後が、千葉エリカだ。三人共、入学式で達也と知り合つたらしい。

こちらも自己紹介したら、リーナがこちらを向いて

「孝一も、自己紹介したら？」

と言つて、言われた本人は、

「そのもんめん d 「自己紹介しよつか」 はい。」

とリーナに怒られ、自己紹介をする。

「俺は犬塚孝一だよろしく頼み。」

するとエリカが

「ねえ？いつも彼てこうなの？」

とリーナに尋ねる。するとリーナが答える

「ええ、そうよ。でも、いつもよりは幾分かマシよ。」

と言いつ他の五人が苦笑いを浮かべる。最初に工房を見学して、その後様々な場所を見学して昼休みになる。そこで昼食を取ることにした。食堂に移動してそこで昼ご飯を取ると深雪と二人の女子が近づいて来た。深雪は一緒に食べたいと言いつ他の二人も同席して良いかと聞き了承するが彼女達のクラスメイトがどうのこうのと文句を言い始めたので、深雪がその場収めたので何とかなかった。二人の女子が自己紹介をして明るい方が光井ほのかで、無表情の方が北山雫だ、その後午後の授業があるのでその場で解散をして放課後集まることにした。

しかしその場で、ひと騒動起こるとはこの時誰も思っていないかった。

放課後再び深雪とほのかそして雫のクラスメイトが再び文句を言い始めたのだが騒

がしいことと実力も無い者がとにかく嫌いな孝一は、腹を立てA組の男子一人に掴みかかり、押し倒し、しかも凄まじいレベルでの殺気と霸王色で威圧してだ。同時に一人の男子生徒が魔法を発動しようとするが、一歩手前で発動を妨害される。するとそこには二人の女子生徒が立っていた。

入学編 story 2

そこには二人の女子生徒がいた。片方は見覚えはあつた。生徒会長の七草真由美だ。すると、都内の女子生徒が

「風紀委員の渡辺摩利だ。今すぐ、CADを下ろせ。」

しかしそれに反発したのが、森崎駿だし、ここで達也が割って入った為事なきを得た。しかし森崎にとってプライドが許さなかつたらしく、文句を言いまくる為、腹の虫が収まらない孝一が霸王色で威圧してビビらせた上で黙らせたのだ。その後一緒帰る事になりエリカが使った警棒型のCADの話になり、すると今度は自分に話が振られた。

「ねえ。少し聞きたいんだけど良い？ 答えれなかつたら答えなくて良いから。」

とエリカは自分に聞いてきた為、頷く。

「先、貴方が威圧をした時普通の威圧じゃなかったのよ？ 説明してくれる。」

と言われたので、説明する事に。

「その前に一つだけ、ここで話す事はバレると少し厄介な事になりかねんからな、ここで

聞いた事は口外しないでくれ。」

と孝一は説明をする。

「俺が使ったのは覇気だ。」

レオが

「覇気？ なんじゃそりゃ。」

と言うと続ける。

「覇気とは人が本来持っているものだが、殆どの奴が覇気存在を知らずまたは知っていても、使えずに一生を終えるがな。もう良いだろ？ 俺は帰る。」

と孝一がそのまま家に帰ろうとしたが、エリカが、

「明日も一緒に帰りましょう。」

と言ったので、

「ああ。」

と返事をする。翌日何事も無く登校した。そして昼まで普通に授業が行われたが、昼になり昼食を取ろうと食堂に行こうとしたら放送が掛かり達也と深雪とリーナそして何故か自分も呼び出されたのだ。断る理由も無いので行く事にしたのだ。

そして生徒会室の前に来ていた。そして深雪が代表でドアをノックした、入室した。そして真由美に座る様に促され着席をする。そして真由美が、生徒会のメンバーの二人

と風紀委員長の摩利を紹介をする。自分達の自己紹介もして食事を取り、真由美が深雪とリーナを生徒会に入る事を促されたが、当の深雪が少し駄々をこねるが達也が風紀委員になれば同等の地位なると知り大人しくなった。そして自分にも風紀委員のお声がかかったためここで嫌がても面倒なので渋々了承した。

そして午後の授業があるので続きは放課後に話しをする事になった。そして放課後、再び生徒会室を訪れた。するとそこには、昼の時に居なかった。一人の男子生徒が居たのだ。彼は、生徒会副会長の服部刑部少掾半蔵その人だ。孝一と達也が風紀委員に入る事を反対する彼と、風紀委員長の渡辺摩利が衝突して、結局二人は彼と模擬戦を行う事になり、二人は見事に彼に勝利したのだ。

（達也は原作通りの勝ち方で、孝一は自ら編み出したしかも威力をかなり抑えたスターダストシューティングを放ち勝利した。）

その後風紀委員会の部屋に来たが、散らかっていたので片付けを行った。そして、明日の風紀委員会で紹介される予定だ。

因みに森崎が入る事を伝えられて、達也は驚き、孝一はかなり腹を立ってたのは別の話だ。

入学編 Story 3

その日の放課後風紀委員会の部屋に来た達也と孝一。そこに森崎駿がいたのだが、渡辺摩利が静止で衝突は回避された。その後二人は一緒に行く事にしたのだ。その途中無理矢理、部活に誘われるエリカを見つけたので、彼女を助けて別の場所に連れて行った。するとエリカの制服が少し脱げていた。それに気付いたエリカは顔を赤くする。

服を直して、彼女は部活見学を誘われる。そして剣道部のデモストレーションを見ていた。エリカはそのデモストレーションを酷評した。しかし達也と孝一、エリカの三人で話をする。

そんな時に下が騒がしくなっていた。よくよく見てみると剣道部と剣術部が喧嘩をしていたのだ。女子生徒は壬生紗香で男子生徒は桐原健明で、そして二人が試合を始めたのだ。壬生と桐原が同時に切り掛かったが、女性が自分の竹刀が致命傷をつけたと主張したが、いきなり男性が魔法を発動して女性を切り掛かった。その瞬間、達也が割って入った、男を取り押さえた。すると剣術部の部員が色々と文句を言って抗議したのだが、ちゃんとした理由で拘束をすると述べたが剣術部の部員が達也に殴りかかった。が

達也は余裕で交わし全ての部員を無力化した。その後騒ぎを聞きつけた他の風紀委員によつてその場は何とか収まったのだ。

その後二人はこの学校の三巨頭が居る部屋に来ていたのだ。摩利が二人に同じ事を聞く。「本当に全てを見ていないのか?」と言い、達也も見っていないと告げ、当人同士で解決できるなら解決させたと言いそして桐原の方が反省していると言い不問にする様に言った。そして部活連会頭の十文字克人も礼を言った。

そのまま開放された二人は下校する事になると正門前に気配がして見てみると先に帰つたはずのリーナ達が居た。彼らによると心配で残つていたとの事で、彼らと帰る事に。そして彼らは達也が使つた技術を聞き色々と言って言った。因みに、今回は完全にとばっちりを受けた孝一は大人しく静かにしていた。

その後それぞれ別々に帰る事になり孝一はリーナとエリカと一緒に帰る。

「ねえ?孝一君。貴方は何でいつもそんな態度なの?」

とエリカが唐突に尋ねる。と孝一が

「唐突だな。ま、俺にも家の事情とか色々あるんだ。察してくれ。」

とエリカに返した。それを聞きエリカはそれ以上聞かなかつた。しかし一瞬だが彼女の顔を赤くしているのに孝一は気付いたが、あえて触れなかつた。

その後家に帰宅したが玄関に孝一の姉である咲が立っていた。

「ねえ、孝一。今日問題起こしたらしいはね。」

と孝一に尋ねる咲。しかし孝一が言い返す。

「今回は完全に俺は無関係だ。達也が勝手に首を突っ込んで巻き添えを喰らっただけだ。」

と言った。咲は最初は疑ったが、信じる事にした。

「まあ良いは。早く着替えて夕飯が出来てるから早く食べなよ。」

と言い残し部屋に戻った。

翌日二人は学校に登校する。その日は特にこれといった問題が起こらなかったが達也が壬生沙耶香に放課後にカフェテラスで会話しているのを見た。

翌日達也が沙耶香を言葉責めしたと言う、噂が広まっていたのだ。

その後生徒会室でも摩利がその事をいじる。その後昼休みも終わり午後の授業へ向かう。

入学編 story 4

その日の午後の授業中、突如放送がかかったのだ。どうやら放送室を何者が占拠したのだ。その為達也と孝一は風紀委員会から呼び出されていた。そして中には男子生徒が数名と壬生沙耶香が放送室を占拠していたのだ。しかし孝一は苛立ちを隠せさずにいたのだ。なんせ授業を妨害された事への苛立ちを覚え尚且つ彼らへの怒りが頂点に達していた。孝一が口を開く。

「委員長、ここは強行突破をしましょうか？手短かに事を運びたいんでね。後、面倒くさいんで。」

と孝一が言い、強固手段に出ようとする。しかし達也が孝一を止めたのだ。その様な事になればさらに酷い事になりかねない為でもある。そして達也が中に居る壬生沙耶香を説得すると申し出たのだ。

孝一も流石にそんな事をすれば両親に怒られるのは目に見えているし、ただでさえ貴族と魔法協会の対立が酷いのに、自分の行動でその拍車をかける訳にはいかなかった。だから此処は達也に少し汚れ役を被って貰う事にして自分は大人しくすることにしたのだ。

それから、数分後壬生沙耶香を拘束しない条件で出て来てもらう事にしたのだ。しかし彼等は騙されたと騒ぎ立てたが壬生を拘束しない条件の為彼らも文句の言い様が無かったのだ。

すると真由美が、今度討論会を行う事を提案したのだ。此処で今この学校の問題を提議して生徒の意識を変えろと言う寸法でもあるのだ。その為、今は此処から解散と言う方向になり孝一を含めた全ての関係者が戻る事になったのだ。

家に帰宅した孝一は姉の咲と弟の紅音と夏に尋問されたのだ。

「孝一？今日なんか強行突破しようとしたらしいじゃない。どうゆう事かお姉ちゃんに説明してくれるかしら。」

と咲に問い詰められ、逃げようとするが二人の弟に逃げ場を塞がれて逃げれなかった。

「兄貴。何逃げようとしてんだ。」と紅音が言い。

「そうだぞ。何時もそうやってはぐらかすぐらいだったたら説明してくれよな兄貴。」
と夏まで彼を逃がそうとしないのだ。

「はあ。分かったよ。説明すりゃ、良いんだろ？説明するよ。」

と孝一は言い服を着替えたのだ。

そのまま家族に今日あった事を説明したのだ。それから数日後討論会当日が来たの

だ。

そして生徒会側と改革側の代表がそれぞれが、自分達の主張を言う。

そんな中、生徒会長の真由美が自分の胸の内を言い会場はその言葉を聞いて今の学校の問題を変えるべきという方向に変わって行く。

その時、会場に何者かが侵入して来たのだ。

そんな時、孝一は動いたのだ。侵入者の何人かを無力化したのだ。そして会場の外に出て侵入者の仲間達を次々と倒しまくる。すると弟達が援護にやって来た。

「兄貴！大丈夫か？」と紅音が言った。

「ああ。寧ろ傷が付くとも思ってたのんか。」と孝一は言い返す。

「お前ら行くぞ。馬鹿な侵入者達を叩きのめすぞ。」と言ったが、そんな時姉の咲が現れた。

「孝一、何処に行くのかしら？」

と咲が言い、孝一を止める。

その為彼はこれ以上暴れる事が出来ずに大人しくしたのだ。

その間に達也が壬生沙耶香とその協力者を取り押さえたのだ。

そして保健室に関係者が集まった。その際に彼女は自分の胸の内言い涙を流したのだ。達也が敵の拠点に襲撃したのだ。孝一はその攻撃に参加しなかった。

その後、敵は壊滅したのだ。

その数日後壬生沙耶香は病院から退院したのだ。孝一も彼女の退院に立ち会ったのだ。その後エリカに呼び出されたのだ。

「ねえ。貴方で一夫多妻の権利持つてるのよね？」

とエリカに尋ねられる。

と聞かれたので頷く。

「あのね、私を貴方の奥さんの一人にして。貴方の事が好きなのお願い。」

エリカに言われたのだ。

「ああ、いいぞ。覚悟は出来てるな？」と孝一が言い彼女を抱きしめてキスをしたのだ。

九校戦編

九校戦story1

2012年7月上旬

その日、期末試験の結果が発表された。

総合順位

一位 四葉達也

二位 四葉深雪

三位 犬塚孝一

実技試験

一位 四葉達也

二位 四葉深雪

三位 犬塚孝一

筆記試験

一位 四葉達也

二位 犬塚孝一

三位 吉田幹彦

という順位だ。そしてこの発表された順位をもとに九校戦に出場する、選手が選ばれる事になるのだ。

その日の昼休み。仲の良い面子で昼食を取っていた時に、九校戦の話題になった。そして、それぞれがあーでも無い、こーでも無いと言いたい放題。そして十師族の一つ、一条家の跡取りである、一条将輝の話題になり。そして達也と将輝がどっちが強いかの議論になった。孝一は自分には無関係と思いきやかに食事をしたのだ。

その後午後からの授業に向かう。その際に吉田幹比古と授業で仲良くなったのだ。そして下校の時間になり、孝一は家に帰宅した。帰宅すると使用人が母が呼んでいると伝えられたので、母の真夜の居る部屋に向かった。その際に九校戦の事に、出る様に言われたので、出る事にしたのだ。

そして次の日の昼休みに孝一とリーナは生徒会長の真由美に呼び出されたのだ。生徒会室に着いた二人は部屋の中に入ったのだ。二人は真由美に席につく様に促されたのが。孝一はピラーズブレイクとスピードシューティングに、リーナはクラウドボールに出る事になったのだ。

すると真由美が二人に九校戦に出る様に頼まれたので、出る事にしたのだ。その後、放課後に達也と孝一とリーナの出場に対して抗議がでたが色々で一悶着もあったが、彼

らのメンバー入りが決定したのだ。

次の日、幹比古ある教室で何かの練習をしていたのだ。そこで美月がいたが、色々あり達也が止めに入ったのだ。それ以来、幹比古は美月に興味を持ち始めたのだ。

その数日後、FLTから衝撃の発表がされたのだ。飛行魔法なのだ。そして孝一は興味を持たなかったのだ。なんせ自分に何も利益が無いからでもある。

部屋に姉の咲が入って来たのだ。その際に色々話をしたのだ。そして孝一はこの時、妙な胸騒ぎを覚えたのだが、九校戦でとんでもないことが起きるとは孝一はこの時は気付かなかった。

次の日、発足式という名目のお披露目会を行われたのだ。その後夏休みに、入ったのだ。そして九校戦へ向かう当日になったのだ。そして真由美が家の事情で遅れる事になっていたので待つ事にしたのだ。そして、その道中で事故に巻き込まれたのだ。千代田花音が「止まって」、森崎が「止まれ!」、雫が「止まって」と言ったが、その後色々あったが、遅れて九校戦の会場に着いたのだ。

九校戦 Story 2

九校戦の会場に着いた、第一高の生徒達。そしてそのまま、バスから下車したのだ。すると、司波兄妹が何か会話をしていたのだ。孝一は二人に近づき、一緒にホテルに入ったのだ。すると、そこには孝一の恋人の一人である千葉エリカがいたのだ。

「ヤッホー！久しぶり。一週間ぶりだね。」
とエリカが口を開いたのだ。

三人は驚いたのだ。だがエリカは実家のコネを使ったらしく、ここに入れたのだ。するとロビーの受付から、柴田美月がやって来たのだがその際色々彼女達と話をしたのだ。その後、三人は自分達の部屋に向かったのだ。その日にある懇親会に出なければならぬ為、休憩を取る事にしたのだ。

その日の夜。懇親会が開かれる会場に孝一とリーナが来ていた。しかし、孝一は目立つのを嫌い会場の端っこに移動したのだ。すると達也も端っこにいる事に気付いた孝一は彼に近づき、話をする。それと同時にエリカが来て色々会話をし、幹比古を連れて来る為とその場を離れたのだ。すると深雪とリーナと一緒に居ると雫とほのかのかがやって来たのだ。

「深雪もリーナも。向こうに行こう。」

と雫が誘う。メンバーの全員が近くにいたのだが、自分達の存在で近づこうにも近づけずにいたのだ。二人は深雪とリーナに彼等の元に向かうように言ったのだ。

そんな中、エリカが幹比古を連れて来たが深雪とリーナがメンバーの元に向かった後だった。

一方深雪とリーナに三人の第三高校の生徒が近づいたのだ。

「失礼するは。私は一色愛梨。こちらは十七夜栞。そしてこちらは四九院杏子よ。よろしくお願いしますは。」

と一色愛梨は深雪とリーナに自己紹介して二人も雫とほのかを紹介する。

その後、愛梨は彼女達から離れたのだ。すると、愛梨が自分の方にやって来たのだ。そして自分に対して口を開く。

「少し、宜しいかしら?」

と愛梨が言った。

「私は第三高校の一年の一色愛梨よ。貴方は第一高校の生徒よね?」

と自分に尋ねたのだ。そして自分も自己紹介をしたのだ。

「俺は第一高校の一年の犬塚孝一だ。出場種目はピラーズブレイクとスピードシューティングだ。」

と自分の自己紹介を終えた。

が、彼女は犬塚と言うの名前を聞いた事が無かったので彼に対してとんでも無いことを言ってしまう。

「あら。無名の方なのね。期待しただけ無駄だったみたいね。では試合を頑張ってくださいね。」

と自分を馬鹿にする態度を取り発言をしたのだ。しかし孝一は一切咎めなかった。何故なら、此処に向かう際に両親から余り問題を起こすなと言われたので、何も言わずにスルーしたのだ。

その後、九島列の話があつたが、その際色々ありそのまま終わったのだ。懇親会は終わりそのまま孝一は部屋に戻つたのだ。そのまま、孝一は横になって寝たのだ。

九校戦 story 3

九校戦初日。

まず七草真由美がスピードシューティングでパーフェクトを出して、決勝に進出したのだ。七草真由美が決勝戦でもパーフェクトを出して優勝したのだ。

そして、男子スピードシューティングで達也が出場して彼は真由美同様パーフェクトを出しまくって、決勝戦まで進み、彼は此処で優勝したのだ。

そして、渡辺摩利がバトルボードで勝利を重ねて、決勝に進出したのだ。その際、エリカが少し愚痴を漏らしていたのだ。

決勝戦、渡辺摩利と第三校の水尾佐保の試合になったのだ。だが、その際に事件が起きたのだ。試合の際に渡辺摩利が事故に遭ったのだ。その時、達也の適切な処置により重傷は免れたのだ。そして、この事故により第三校の水尾佐保が自動的に優勝したのだ。

だが、孝一は不審に思ったのだ。しかし、これと言った証拠が無いので下手に動けな

かった。その後、男子スピードシューティングで達也が予選と本戦で勝ち抜いて、優勝したのだ。

孝一は暇を持て余して、ホテル内を歩いていた。すると、達也から連絡があり、バトルボードでの試合の映像が手に入ったので来て欲しいという事だ。その為、孝一は彼がいる部屋に向かったのだ。すると、そこには吉田幹比古と柴田美月そして、姉の婚約者でもある五十里啓がいたのだ。その後試合の映像を見たが、何も見えずに分からず仕舞いなので、ここは解散する事になったのだ。孝一は自分の部屋に戻ろうと思いついて、ホテルを歩いていると前の方から第三校の生徒が歩いて来るのに気付いき、横にどいてそのまま立ち去ろうとしたのだが、その生徒が自分呼び止めたのだ。

「あら、貴方は確か懇親会の時に会ったお方かしら？」

と声かられて孝一は振り向くとそこには、一色愛梨がいたのだ。すると孝一は口を開く。

「おいおい。アンタこそ、俺に声をかけてて良いのかよ。暇じゃ無いはずだろアンタは、こっちはこつちで色々立て込んでるでね。話しかけないでくれる？ 話があるだったら、別の機会にしてくれるか？」

と孝一が突っぱねるが、愛梨が孝一に言ったのだ。

「ねえ。貴方、私と昔会ったことがあるかしら？ 昔の記憶で貴方に似た少年と会った記

憶があるのよ。どうかしら？」

と愛梨に問われた、孝一は答える。

「オメーの勘違いだろ。俺を巻き込むな。形はどうであれ、バトルボードはお前らの優勝だ。勝者が敗者に情をかけるな。それが原因で痛い目を見るぞ。分かったな。」

と孝一が言い、そのまま孝一は踵を返してその場をさる。だが、一色愛梨が後ろで何かを叫んでいたのだ。

「貴方こそ、その様な態度を取れるのは、今の内よ、後で後悔しても知らないはよ。」

と愛梨が、孝一に対して言ったが当の本人は全く意に介しておらずそのまま無視をして自分の部屋に戻ったのだ。そしてもう時期自分の試合のある。新人戦が始まろうとしていた。その準備と英気を高めるのと同時に彼は小宇宙を高めたのだ。

九校戦 Story 4

九校戦4日目。本日より、孝一達一年生が出場する、新人戦が始まったのだ。

新人戦最初は、女子スピードシューティングで雫が出たのだ。そして雫は序盤からパーフェクトを出して準々決勝にて、第三校校の十七夜葉に互角に渡り合い最終的には体力を消耗しきった、十七夜葉が途中から失敗を連発して敗北したのだ。そして、新人戦スピードシューティングは第一高校が1位から3位までを独占したのだ。

一方、第三高校の方は優勝するはずだった十七夜葉が優勝出来なかつたので緊急会議が行われたのだ。結果、技術者の手による物だと結論づけられたのだ。

そして新人戦バトルボードが行われたのだ。第一高校の光井ほのかが出場したのだ。そこで、達也の奇策により連勝を重ねたのだ。そして決勝戦で対決するであろう、相手である四十九院沓子の試合を見たのだ。そこで圧勝したのだ。

そして決勝戦。光井ほのかと四十九沓子の試合が行われたのだ。二人の試合は一進一退で最終的には、ほのかの勝利したのだ。

そして女子ピラーズブレイクで明智英美が準々決勝まで進み、そして同じく数字付き

で第三高校の十七夜栞が準々決勝まで進んだ。最後は明智英美の勝利で終わったのだ。そして、一位から三位まで第一高校が独占したので、委員会側一高側全員優勝と言う事になったが、雫が深雪と戦いたいと希望して、そのまま決戦になり、結果は深雪の勝利となったのだ。

そして、新人戦女子クラウドボールは一色愛梨の優勝で終わった。

孝一はもう時期始まる、自分の試合に準備をしていたのだ。すると、前から第三校の一色愛梨が歩いてきた。

「あら、貴方まだ会ったはね。そういえば、そろそろ貴方の試合だったはね。まあ、せいぜい頑張ってください。」

と彼女は、相変わらず孝一を馬鹿にする態度が変わらず。

遂に孝一の出番が訪れたのだ。男子ピラースブレイクの予選。孝一の最初の試合の相手は第二高校の生徒。だが、孝一の圧勝で決まり、決勝まで進み、そこでも優勝したのだ。そして次は、スピードシューティングで此処でも圧勝して、決勝まで進み此処でも優勝したのだ。その後、孝一は自分の部屋に戻ろうと思いい廊下を歩いていたのだ。すると、前から人が来る気配を感じたのだ。

そして、その人物の自分に話しかけて来たのだ。

「少し、宜しいかしら？」

と言われ振り向くと、一色愛梨がいたのだ。

「何の用だ？俺は疲れてんだ。用があるなら、手短かに頼む。」

と孝一はそう返して、話をすぐに終わらせようとする。

「貴方、中々の腕前ね。一色家に来ないかしら？」

と愛梨は孝一をスカウトするが、孝一はこう言い放つ。

「生憎、俺は基本的に自分が主人と認めた奴の下にしかつかないのでね。お断りするぜ。あとお前じゃ、俺をコントロールできねーぞ。」

と言い孝一は、その場を去った。その後、新人戦が順調に勝ち進んでいるので。その日の夜、食事会が行われたのだ。その際、森崎とその取り巻きが女子の会話を聞いて気分を悪くしたのか途中で部屋を出たのだ。その後部屋を出ると第三校のメンバー達と鉢合わせをしたのだ。愛梨が深雪と会話をして、愛梨が此処で自分達が勝利する事を言い、全力で戦うと言ったので深雪もそれに答えると言ったのだ。

九校戦 story 5

九校戦7日目新人戦4日目新人戦ミラージュバット

此処では、光井ほのかと里美スバルが出場したのだ。エンジニアの司波達也の手によって、二人は決勝戦まで進んだのだ。だが、その最中にモノリスコードで、事故が起きたので暫しモノリスコードは中断したのだ。新人戦ミラージュバット決勝戦。光井ほのかと里美スバルが次々とポイントを取ったのだ、その結果、優勝は光井ほのかで、準優勝が里美スバルになったのだ。その後、モノリスコードの事故の件で達也が真由美に呼ばれたのだが、その日の夜。達也と孝一は真由美と克人に呼ばれていたのだ。

そこで、二人はモノリスコードへの出場を打診されたのだ。孝一は、その話を断った。簡単な話だ。孝一が使う魔法は威力が高い上、悪魔の実の能力者でもあり、しかも他にも秘密にしななければいけない事があるからだ。その為、今回は達也が出場に決まりそして、西城レオンハルトと吉田幹比古が達也の推薦で出場が決まったのだ。その日の夜孝一は珍しく夢を見たのだ。だが、その夢は昔、誰かと遊ぶ夢だった。

翌日、目を覚ました、孝一は自分の見た夢を考えながら廊下を歩いていたので。すると前から、一色愛梨が歩いて来た。

「あら、またお会いしましたね。どうかしら？一緒にお茶しませんか？」
と愛梨が誘って来たが、孝一は断ったのだ。

「悪いが、断るぜ。少し考え事があるからな。」

「と孝一が言ってその場を去った。」

そして、モノリスコードの試合では、達也率いるチームが他の学校のチームを打ち破り続けて、決勝まで進んだのだ。

その新人戦モノリスコード決勝戦。第一高校と第三高校の対決となる。その試合は、十師族の次期当主同士の対決と言う事もあり、達也と将輝がお互い一步も譲らない、互角の勝負を行いその結果は、達也の勝利で決まり、他の二人も倒れた事により、新人戦モノリスコードは第一高校の優勝で決まったのである。

そして、ミラージュバット本戦。此処でも事件が起きたのだ。第一高校の選手がC A Dの誤作動で着地に失敗したのだ。その後、渡辺摩利の代役としてミラージュバットに

出場する司波深雪が出場したのだ。その、途中で彼女が使用するCADに細工をしようとしたが、達也が寸前にスタツフを取り押さえると言う騒動が起きたのだ。そして、深雪は決勝戦まで進んだのだ。その決勝戦で深雪と愛梨が互角に渡り合い、最終的には深雪の優勝が決まったのだ。そして、本戦モノリスコードで、第一高校の連勝で決勝戦まで進み、そのまま優勝したのだ。

約二週間前の時とは違い、ギスギスした空気が違ったのだ。その際、お互いの学校の生徒達が踊ったのだ。孝一は、リーナと花音と踊ったのだ。その際に孝一は花音に告白したのだ。

「花音。少し良いかな?」

と孝一は花音に言ったのだ。

「何?孝一。」

と花音が返した。

「花音、昔から好きだった。側にいてくれる?」

と花音に告白した。

「うん、良いよ。側にいるよ。」

と孝一と花音は恋仲になったのだ。

その後、孝一は少し歩くと一色愛梨がと会ったのだ。

「あら、またお会いしましたわね？ どうかしら？一緒に踊ってくださいませんかしら？」

と愛梨に言われ、踊る事にした孝一。

「なあ。この間、あんた。俺に似た奴と一緒にいたて言う話をしただろ？」

と孝一が愛梨に尋ねた。

「ええ。覚えてるは。それがどうしたのかしら？」

と愛梨が言ったのだ。

「あれから、考えて見れば昔、金沢に行った事があってな。そこで良く一緒に遊んだ、少女が居てな、そして九校戦の最中に、お前だつて思い出してよ。これから一緒にいてくれるか？」

と孝一は愛梨に尋ねた。

すると愛梨は

「私も思い出したのよ。答えはもう決まつてるは。貴方の側に居るはよ。これからも、ずっとそばでね。」

と愛梨は言った。その後、外で花火が上がると、孝一は「たくまやく」と叫んだりするなどやっていた。

横浜動乱編

横浜動乱編 story 1

2012年9月某日日本皇国関東州某所某港

そこに、二人の刑事がいた。だが、不審な人影を確認したのでその人影を刑事が追い掛けるが途中で見失ったのだ。

魔法科高校第一高校

第二学期が始まり、学校に登校した孝一と紅音と夏と咲。少し、周囲の視線が彼らに集まっていたのだ。簡単な話だ。夏休みの時に犬塚公爵家から、彼らが公爵家の当主の子供である事と母親があのお四葉真夜と、そして、孝一と夏が皇国七武海に加盟した事も発表されたからだ。しかし、当の孝一と夏は気にせずについて孝一達三人はそれぞれのクラスについて教室に入ったのだ。孝一はクラスに入る。すると、クラスと同級生の何人かが自分を囲んだのだ。

「犬塚！あの、発表は本当なのか？」

と男子生徒が聞いたのだ。

「犬塚君、すごいねー！」

と女子生徒が言ったのだ。

「貴族の生まれで、しかも爵位持ちなんて凄いな。」

と一人の男子生徒が言ったのだ。

そして、十三東鋼が

「やっぱり、何か違う雰囲気があったと思ったけど。すごいんだね。」

だが、孝一は気にせず自分の席に座ったのだ。

「あのな、お前から次から次へと言うな。俺は聖徳太子でも無いんだからよ一度に言うな。後、達也。お前はそこでなに無関係みたいな顔してんだ。」

と達也に言ってその場を取めたのだ。その後、達也は魔法論文コンペに出るように要請があったのだ。達也はその要請を受けたのだ。そして、その日は何も起きずに一日が終わったのだ。孝一は姉と弟と恋人達と一緒に帰ったのだ。

そして、その日夜。達也から、ある一報が入って来たのだ。それは、FLT居る達也と深雪の父の愛人がやって来てレリックを預かるよう言ってきたのだ。達也はその際、断ったのだが不安に思い自分にこの事を伝えて後を追うと言ったのだ。すると、孝一は家の外に出たのだ。だが、よく見ると右手には赤いゴーグルのような物を持っていたのだ。孝一はそのゴーグルを自分の目に装着したのだ。

「ジユワ。」

すると、そのゴーグルを中心に彼の姿は変わったのだ。その姿は赤く人に似た姿だった。それは、真紅のファイターにしてウルトラ兄弟の一人でもある、ウルトラセブんだ。ウルトラセブンに変身した孝一は飛び立ったのだ。その道中、二台の車を追いかけるバイクを見つけたのだ。よく見ると、そのバイクには達也が乗っていたのだ。すると、後方の車が前方の車を攻撃したので、達也を援護する形ではあるものの、後方の車から降りて来た人物達を迎撃して彼等を捕縛したのだ。

その後、路地裏で変身を解除した孝一は達也と合流して話をした後、家に帰ったのだ。ちなみに、レリックはFLTで預かる事になったのだ。家に帰宅した孝一は姉の咲に問い詰められたのだが、孝一は色々話をして部屋に戻ってそのまま、ベットのの上に寝転がって寝たのだ。

横浜動乱編 s t o r y 2

次の日、孝一は朝早くから学校にいたのだ。何故かと言うと妙な胸騒ぎを感じたらだ。昨日の一件もあり孝一は警戒をしていたのだ。そして、昨日の一件を父に報告した時か、孝一は父からあることを伝えられたのだ。それは、謎の人物が密入国をしたのだ。その為に孝一は第一高校の周辺を警戒する為に朝早くからきていたのだ。そんな時に、姉の許嫁である五十里啓に会ったのだ。

「孝一。珍しく、早くに学校に来てるんだね。」

と孝一に話しかける啓。

「そうゆう時もあるよ、啓兄。」

と孝一はそう言ったのだ。因みに、孝一は家族と一緒にいる時か二人きりの時だけだが啓のことを啓兄と呼んでいるのだ。小さい時から兄がいる事に憧れを抱いていた、孝一とって啓は兄の様な存在で本当の兄の様に慕っているのが啓なのだ。だから啓もなんだかんだいって孝一の事を本当の弟の様に大事に思っているのだ。その為、普段、二人は学校では先輩後輩として通しているがこう言う時だけは本当の兄弟の様に仲が良

いのだ。すると、啓が自分の頭を撫でてきたのだ。

「ちよ、啓兄何すんだよ!？」

と孝一は啓に抗議するが当の啓は

「昔からこうすると、お前は大人しくなるからね。でも僕にとっては大事な弟だよ。」

と言われた孝一は少し文句を言ったがそのまま立ち去ったのだ。

学校の授業が全て終わり孝一は達也の誘いで本屋に行く事になったのだ。

その後、達也と孝一そして花音と咲とその許嫁の啓と一緒に本屋に寄っていたのだ。すると孝一と達也は気配を感じてすぐに気配を感じた方角へ向くと同時に花音がその方角へ走り出したのだ。だが、その人物に逃げられてしまったので意味は無かったのだ。此処は一旦、解散する方向で終わったのだ。

次の日の学校の放課後いつものメンバーで行きつけのカフェに来ていたのだ。その途中、エリカとレオが席を立ち外に出たのだ。それから数分後、二人は戻ってきたのだ。その際に何者かから旧東側諸国がこの国を狙っていると。その為孝一は帰宅後に軍基地に居る父に今回の事を報告したのだ。次の日、授業が終わった後の放課後に論文コンペへの準備が行われていたのだ。すると、エリカとレオが達也の近くに居ると風紀委員の一人である関が文句を言っていたが達也が二人を護衛に言ったのでその場を収めたのだ。

その日の夜。日本皇国関東州横浜市某所

此処に、アジア系の人間が三人いたのだ。

「計画の方はどうでしょう？」と若い男が向かいの男性に言ったのだ。

「ああ、大丈夫だ。もう時期、祖国の軍が此処を攻める計画になっていたので。例の件が始まれば、軍が攻める事になる手筈だからな。」と言いその場は解散になったのだ。

横浜動乱編 Story 3

その日の放課後、孝一は論文コンペの準備をしている五十里啓と達也の護衛を行っていたのだ。すると、何かをする人の気配を感じた孝一とエリカはその方向を向くと一人の少女が何かをしていたのだ。それを見た孝一はエリカそして、二人の行動に気づいた花音が少女が逃げたので三人で追いかけたのだ。だが、彼女の足は早くこのままでは逃げられてしまう。すると、孝一がいきなり右腕を上げて叫んだのだ。

「アイースタイムカープセル」

と孝一の右腕から氷が出て来て彼女の左足に当たり彼女がその攻撃で転んでしまったのだ。孝一は気にせず彼女の元行つたがエリカと花音がいきなり彼に對して。

「ちよつと！何してんのよ、やり過ぎよ！」

息ピッタリに孝一にツツコンだのだ。しかし、当の本人はと言うと。

「手加減はした方だ、それに凍傷にはならない様にしてあるから大丈夫だ。」

と孝一は言ったが花音が

「いくら何でもやり過ぎよー!」

と言うが孝一は逃げていた少女を拘束したのだ。その後の調書で彼女は平河千秋と判明した。九校戦の時にミラージュバットの事故の時にCADの調整をしていた平河小春の妹だった。その後、保健室にいる平河千秋の調書が行われたのだ。

その際、彼女は達也に対して身勝手な恨み言を言ったのだ。しかし、花音が彼女に対して色々言ったが保険室の先生に止められたので、今日は此処までにしたのだ。その後、彼女は検査入院の為病院へ移送されたのだ。その翌日の放課後に事件は起きたのだ。三年の風紀委員の関本勲が論文コンペの文書を達也から盗もうとして捕らえられたのだ。そして、摩利が恋人の修次と平河千秋が入院する病院に来ていた。すると、院内の緊急のベルが鳴ったのだ。二人は急いでその階に行くとそこには大柄のアジア系の男がいたので二人はその男と交戦したのだが、その途中で取り逃したのだ。

病院の襲撃の翌日、達也は関本勲に聞きたい事があるので拘束された彼に会いたいと言ったのだが、花音は拒否をしたのだ。理由としては問題名前の方から来るからと言う理由だからであると。しかし、摩利が真由美と一緒に行くからと言うと花音は大人しくしたのだ。そして、孝一は昨日の病院襲撃事件を警戒したが達也がいるので大人しくす

る事にしたのだ。その後、関本勲が拘束されている所で再び襲撃事件が起きたのだ。その際、襲撃した男を達也達の活躍で拘束したのだ。

そして、孝一は病院にある一室に来ていた。何とそこには市原鈴音と服部半蔵の二人がいたのだ。入れ違いで入ったが二人から色々言われたので何もしない事を決めたのだ。

「よう。お前が平河千秋だな？」

と孝一が彼女に言ったのだ。千秋が彼を見たのだ。口を開いたのだ。

「貴方は確か、犬塚孝一君だよな？」

と聞いたのだ。

「ああ、そうだ。お前にちよつと言いたい事があつてな。此処に来たんだ。」

と孝一が彼女に言ったのだ。

「何かな？言いたい事って？」

と言う千秋。すると、孝一が口を開く。

「お前。あの疫病神と関わらない方が良くぞ。ロクな事にならんからな。」

と言う孝一に対して千秋はこう言ったのだ。

「じゃあ、何であいつの周りには人がいるじゃない。彼らには言わないの？」

と千秋が反論したのだ。そして、孝一は言ったのだ。

「お前の言う通りだ。だがな全員はそれを承知であいつと関わっている。俺もそれを承知であいつの近くにいるだけだ。お前はそれを理解する事を覚えろ。」

と孝一が彼女に対して言ったのだ。

「じゃあ、貴方は彼の正義もどんな悪事も認めるの？」

と千秋が孝一に対して言ったのだ。すると、孝一はこう反論したのだ。

「正義つてのは価値観だ。立場が変われば形を変える。だから、俺はあいつやお前の正義を責めやしねえ。だがな、自分の正義の為に人の正義を否定すんな。お前はそれを理解する事を覚えろ。それが無理ならこの学校を去れ。」

と言い孝一は病室を後にしたのだ。

そして、孝一は家に帰り明日の論文コンペの準備をしてベットで寝たのだ。

横浜動乱編 Story 4

日本皇国関東州都横浜市某所

2012年10月31日

今日この日、全国にある九つの魔法大学付属高校の代表が集まりそれぞれの論文を発表する日でもある。犬塚四姉弟は朝早くから論文コンペの会場に居たのだ。簡単な話だ。中人連が軍を活発に動かしており何かしらの紛争は起きると思われ、最悪戦争になる可能性が高い為、彼等は用心して早くに来ていたのだ。そして、時間がかかり経ったのか全国にある魔法大学付属高校の生徒達がやって来ていた。そして、論文コンペに出る生徒や警備の生徒達も集まっていたのだ。すると、一人の第三高校の生徒が近づいて来た。

「君が、犬塚孝一君？」

と話しかけて来たのだ。振り向くとそこには少し身長の低い少年が立っていた。

「お前は確か吉祥寺真紅郎だな？」

と返す孝一。すると彼が、孝一に対してある事を言ったのだ。

「呼び方はそっちの自由に呼んで良いよ。」

と言われ孝一は名字で呼ぶ事にしたのだ。

「それで、何の用だ。吉祥寺。俺は忙しいんでね。」

と孝一は言った。すると、彼は口を開く。

「特に用は無いけど、実は一色さんが今日ここに来てるから会ってあげるように十七夜さんに伝言を頼まれたからね。」

と彼が言い、孝一は納得したのだ。恋人との一人で有る愛梨は自分を見つけたは良いが恥ずかしくて話しかける勇気が無いのでこういう形で会いたいと言って来たのだ。気が付くと吉祥寺は居なくなっていたので孝一は愛梨に会いにいったのだ。そして、孝一は愛梨に会い色々話をしてしていると愛梨が親友で同級生なのか二人の少女が近づいて来た。

「貴方ね？愛梨の恋人は。」

と黒髪のショートトの少女が、十七夜葉だ。

「中々の男じゃな。」

と古風な口調の四十九院杳子だ。

その後、彼女達と話をしてから会場に入ったのだ。会場内で開始時刻を待っていた。すると、エリカ達がやって来たのだ。それから、時間が経つと論文コンペが始まったのだ。だがこの時、孝一はかなり胸騒ぎを覚えていた。何故なら此処までに来る時に何か中人連のスパイらしき人物を見掛けたのだからだ。しかし、完全な確証が無いので、その胸騒ぎを払拭が出来なかったのだ。

そして、第一高校の出番が来たのだ。その発表は各学校を驚かせたのだ。第一高校の発表が終わりにメンバー全員が舞台裏に戻ったのだ。そして、次は第三高校の発表が始まろうとしたのだ。

すると、孝一が何かを感じたのか周囲を見聞色の覇気を使い警戒をし始めたのだ。すると、会場に武装をした謎の兵士達が侵入したのだ。孝一は自分の胸騒ぎを当たったの事に自分の予感の良さに腹を立てたのだ。

そして、兵士は片言の日本語で大人しくする様に言うが孝一と達也はそれを無視をして立ち尽くして居ると、二人の兵士が二人に言う事を聞くように言つて来たがそれでもそれを無視したのだ。すると、二人の兵士が孝一と達也に向かって銃を発砲したのだ。だが、達也はそのまま分解の応用で銃弾を消去したのだ。一方、孝一は躲す動作もせず

に居ると銃弾はそのまま孝一を貫通したのだ。兵士達は何が起きたのか分からずに二人に近接格闘に持ち込んだのだが近接戦であれば無類の強さを誇る二人には足元にも及ばず拘束されたのだ。

そして？他の兵士達は驚きのあまり動けずに居ると他の魔法科高校の生徒達が兵士達を拘束したのだ。その後、吉祥寺真紅郎が孝一と達也に向かって話しかけて来たのだ。

「今、君達は何をしたんだ？答えてくれ。」

すると、孝一が彼に対して言ったのだ。

「吉祥寺。状況を考えろ。そんな事を言っている暇は無いはずだ。恐らくアジアのどっかの国が攻めて来てる時に悠長に話をしてる状況じゃねよ。」

と言い孝一会場の外に出たのだ。そして、孝一は外に出たのだが外は完全に阿鼻叫喚状態だ。すると、同級生の何人かが出て来た。達也が深雪に敵の武器を凍らせる様と言った。達也に言われた深雪は魔法で敵の武器を凍らせたのだ。そして、孝一達は敵兵を次々と倒してそのフロアを制圧したのだ。すると、雫が此処の会議室の鍵がある

と言うのでそこ行く事にした。

そして、現在の状況としては軍と謎の武装勢力が衝突している状況なのだ。そして、彼らはもしかしたら此処を攻めて魔法科高校のデータを盗むと判断したので孝一達はデータを消去する事にしたのだ。そして、その部屋に行くと第一高校の先輩達が居たのだ。どうやら彼らも自分達と同じ考えだった。そして、此処に居る全員は今度どうするかを話し合ったのだ。多くの者は避難をする事にしたのだ。すると、達也と孝一と夏は戦場に出ると伝えた。

「おい！幾らなんでも無理だろ。」

と摩利が言うが達也は自分は十師族を理由にして孝一と夏は七武海を理由にしたのだ。と言いいい合ひになろうとした瞬間、部屋のドアがいきなり開いたのだ。見ると迷彩服を着た女性が入って来たのだ。よく見ると少尉の階級章を着けていたのだ。更に少佐の階級章を着けた男性が入って来たのだ。そこで、達也が軍の人間で此処での情報を秘密にする様に言われたのだ。そして、達也は軍人として動く事にしたのだ。

そして、孝一と紅音と夏の三人も動いて敵兵を潰していたのだ。だが、孝一は姉とその許嫁の啓が心配になり二人を連れて、彼等の元に急いだのだ。だが、孝一達が着いた瞬間に啓が撃たれたのだ。それを見た孝一は激昂して啓を撃った敵兵とその周囲の敵

兵を殺したのだ。そして、啓に近づくと同時に達也が自身の魔法を使い啓を助けたのだ。そして、避難用のヘリが来たので彼等はそれに乗って避難したのだ。そして、孝一達四人は敵兵を殲滅の為に戦いを再開したのだ。

その頃、ヘリの中では、摩利が咲ある事を聞いたのだ。孝一が彼処まで激昂をしたのかを。咲は口を開いたのだ。

「あの子は昔、大事な友人二人を失ったの。それ以来あの子は大事な物を失う事を極端に嫌う様になったの。それに孝一にとつて啓は兄の様な存在なの。小さい時から啓に懐いてたから、だから昔から自分の大事な家族を傷つけられたから尚更激昂したのよ。」

と咲が言ったのだ。一同は沈黙したのだ。何せ彼の今までの行動原理がそう言った理由があつたからなのだ。

一方、横浜中華街に一条将輝がいたのだ。すると、中華街のドアが開いて中から人が出て来たのだ。

「どうも、一条の御曹司殿。私は周公瑾です。この者たちに脅されていたのだ。身柄をお渡しします。」

と言ひ彼はその場を立ち去つたのだ。その後、達也が戦略級魔法を使用して謎の武装勢力の艦隊を壊滅させたのだ。因みに後で分かつた事だがこの艦隊と兵士達は中人連

である事が判明したので皇国連邦政府は中人連を非難し、アメリカを始めとした日本皇国と友好国も同様の非難をしたのだ。

横浜の戦いから数日後。関東州の何処かで周公瑾は中人連のスパイと接触をしていた。

「周殿。申し訳ない。私は本国に戻らなければならぬ。あの様な事態になってしまったかたな。」

とスパイが言った。

すると、周公瑾はこう返したのだ。

「いえ、仕方ないですよ。状況が状況ですからね。」

と周公瑾は言った。

「では、周殿もどうかご無事だ」

とスパイの男が言いかけたがいきなり倒れたのだ。すると、後ろから一人の刀を持った男が現れたのだ。見ると、何とその人物は孝一だったのだ。

「お前は七武海、雷帝の孝一。何故お前が此処に居るんだ！」

と周公瑾は驚愕しつつ彼に言ったのだ。

「横浜でのお礼参りしに来たんだよ。」

と言うと周公瑾は右手から破壊光線を放ったのだ。だが、孝一は刀でそれを防いだのだ。すると、孝一の口元が少し笑った様に見えると同時に爆発が起きたのだ。煙が晴れると周公瑾は驚いたのだ。そこにいた孝一は胸に三日月状の傷が付いた魔人になっていたのだ。すると、孝一は周公瑾に斬りかかり彼を斬ってこう言ったのだ。

「周公瑾。策士策に溺れるとはこの事だ。これでお前も終わりだ。」

と言いながら孝一は周公瑾の腹部に刀を突き刺したのだ。

「お…の…れ」

と言い周公瑾は息絶えたのだ。

すると、孝一は周公瑾が息絶えたのを確認すると彼の懐を探りある一枚のカードを取り出して言ったのだ。

「これで全ての魔王獣のカードが揃ったな。後は例の遺跡を見つければいいだけだな。」

と孝一が言ったのだ。そのまま、孝一は彼等の死体を燃やしてその場を立ち去ったのだ。

幕間

幕間 1

2012年8月下旬

日本皇国首都東京特別市某所某高級住宅街

此処にある大きな屋敷。此処に犬塚姉弟が居たのだ。何故彼等がこの屋敷にいるのかと言うと、此処は彼等の実家であり自宅でもあるのだ。彼等はそれぞれの過ごし方をしていた。咲は庭で茶を立てており、夏と紅音は組み手を組んでいた。そして、孝一はと言うと、自分の部屋で本を読んでいた。孝一は基本的には剣や覇気といった修行を行なっているのだが、珍しく本を読んでいたのだ。何故彼が本を読んでいるのかと言うと九校戦の時にある夢を見たからだ。その夢は不鮮明であるが故に内容は余り覚えていないのだが、それが原因で胸騒ぎをしていたのだ。

「あー、辞めだ。考えても無駄だ。例の遺跡の事もあるからな。政府を通して十師族に言わなきゃいけねえしな。」と孝一が言う。どう言う事かというと、九校戦が終わった直後、政府から弟の夏と共に七武海に加盟を要請をされたのだ。理由としては魔法師との融和の為にと言っているが孝一としては表向きはそうだが実際は七武海の戦力を強化

と政府と魔法協会の力関係を均衡にする為でもあるのだが、孝一としても好都合である目的の為に今回の話に乗る事にしたのだ。すると、部屋のドアがノックされたのだ。

「若様。失礼します。」

と女性の声があったのだ。そして、孝一は返したのだ。

「入って良いぞ。千早。」

と彼女に言ったのだ。そして、ドアを開けて入って来たのが黒髪の長髪の少女だ。彼女の名前は如月千早。彼女の実家の如月家は元々、室町時代以来の犬塚家の家臣の子孫で明治以降も現在この家の使用人として代々仕えているのだ。

「何かあったのか？千早。」

と彼女に尋ねる、孝一。そして、千早が答えたのだ。

「はい。旦那様がお呼びですので、書斎の方へのとの事です。」

と千早が答えるのだった。そして、孝一は答える。

「ああ、分かった。」

と言いつ自分の部屋を後にした。そして、孝一は父の書齋にやって来て書齋のドアをノックしたのだ。

「親父。俺だ。」

と孝一が言い中から父が入って良いぞと言ったので書齋に入ったのだ。父の名前は犬塚総一。犬塚公爵家32代目当主だ。

「親父、話ってなんだ。」

と孝一が尋ねたのだ。

そして、父が言ったのだ。

「ああ、七武海への加盟の話は如何するつもりだ？」

と聞いて来たのだ。孝一は答えたのだ。

「その話なら、乗るつもりだ。例の遺跡の調査への権利を求めるつもりだ。」と答えたのだ。孝一は以前からある遺跡の調査をしており、その調査の為に七武海への加盟を考えていたのだ。その後、父と話を終えて自分の部屋に戻ったのだ。そして、部屋に戻ると千早が部屋の片付けていたのだ。

「千早。悪いな。片付けをやらしちまってな。」

と孝一は千早にお礼を言ったのだ。

「いえ、若様の周りをお世話をするのが私の役目ですので。」

と千早が答えるのだ。すると、孝一は千早を後ろから抱き寄せたのだ。

「千早。もう我慢できね。」

と言ったのだ。いきなりの事で千早は驚いていて顔を赤くしていた。何故なら、彼女は幼い頃から孝一に対して好意を抱いていたが自分の立場を理由に諦めていたのだ。だが、彼は自分の事に対して好意を持っている事を今知ったのだ。

「私で宜しいんですか？」

と千早は孝一に尋ねたのだ。そして、孝一は頷き自分のベットに押し倒したのだ。

「ああ、覚悟は出来てるな？」

と孝一は千早に言い。千早は頷いたのだ。その後、二人は恋仲になったのだ。

〈 ウルトラマン全ての人類に目撃される。登場怪獣ベムラー 〉

2012年11月中旬

その日、皇国連邦議会の臨時会が開かれていた。何故なら横浜の一件の復興予算案と中人連への謝罪と賠償請求と非難の決議が行われていた。そして、衆貴両院で全会一致で復興予算案や謝罪と賠償請求と非難声明が賛成されたのだ。

これにより国内は復興が始まり外交では中人連の外交交渉が始まったのだ。

それから、皇国連邦議会の決議が行われてから数日後。孝一は第一高校に相変わらずつ通っていたのだ。しかし、ここ最近妙な電磁波が発生が確認されており皇国連邦政府や皇国軍は警戒をしていたのだ。

孝一は全く気にせずになっていた。何せ自分に関係が無いのからだ。学校にて孝一は授業を受けていたのだ。すると、警報が鳴り響くと同時に地響きがしたのだ。生徒達は外に出た時、一つ巨大な生物がいて鳴き声を出したのだ。その怪獣の名前は宇宙怪獣ベムラーだ。生徒や周辺住民は混乱の余り避難が遅れたのだ。

だが、孝一は冷静に居たのだ。すると、右手には機械的な棒の様な物を持っていたのだ。それは、ベーターカプセルだ。そして、孝一は右手を掲げてベーターカプセルのスイッチを押して光が彼を包み込んだのだ。

そして、ベムラーの前に一人の赤と銀の体色をした巨人が立ちはだかつたのだ。そう、彼は全てのウルトラマンの原点である初代ウルトラマンだ。そして、初代ウルトラマンはベムラーに立ち向かったのだ。周囲の人々は驚き、ベムラーと戦う、ウルトラマンを見守ったのだ。そんな時、ウルトラマンの胸に付いていた物が青から赤に点滅して鳴り出したのだ。そして、ウルトラマンは手を十字に交差して光線を放ったのだ。そう、スペシウム光線だ。そしてスペシウム光線の直撃したベムラーは爆発したのだ。

その後、皇国連邦政府と皇国軍はベムラーの肉片を集めて研究したのだ。

そして変身を解除した孝一は学校に何食わぬ顔で居たのだが特に言われずに居たのだ。今日の学校の授業は続行してそのまま放課後になり家に帰ったのだ。そして家のテレビをつけると今日の一件がニュースになっていた。専門家が色々言っていたが最終的には分からず仕舞いなのだ。孝一はそのまま自分の部屋に入りベットに横になって寝たのだ。

幕間2

2012年5月某日

その日、孝一はある場所に居たのだ。そこは、恋人の一人である千葉エリカの実家である千葉家である。今日はエリカの頼みでこの千葉家に来ていたのだ。

「ごめんね、孝一。私のわがままで。」

とエリカが孝一に言ったのだ。すると孝一が答えたのだ。

「構わねーよ。エリカ。今回ばかりは。」

そう、孝一はエリカとの付き合いを報告する為に千葉家に来ていたのだ。そして、孝一はエリカの案内で本邸の客間に座って居たのだ。それから五分位たった時にエリカの父である、千葉丈一郎がやって来たのだ。そして、後ろには三人の男女が立っていた。すると、いきなり丈一郎が孝一に対してある事を言ったのだ。

「やれやれ、エリカめ。とんだ、小童を連れて来おつたは。」

と丈一郎が孝一に対して言ったのだが、それを聞いたエリカは怒鳴ろうとするが、孝一は止めたのだ。

「エリカ、良いんだ。この馬鹿共は何れ自分達が痛い目を見ないと学習をしないかた

な。」

と強気の口調で言い放ったのだ。それを聞いた女性が孝一に食ってかかったのだ。

「貴方こそ何様のつもりよ！良い気にならないで！どうせ私達、千葉家のコネが欲しくて此処に来たのでしょ？」

彼女の名前は千葉早苗、25歳。エリカの異母姉だ。エリカと彼女は昔は折り合いが悪く仲が悪かったが、昔ある事件がきっかけで仲が良くなったのだ。すると、孝一が彼女に言ったのだ。

「俺は千葉家のコネが欲しいわけではありません。第一、俺には当の昔に進路を決めています。ですので千葉家のコネで出世など考えて居ないですよ。それに俺は彼女を千葉の娘としては無く一人の女性として心から愛しています。ですのであなた方がなると言おうと俺は彼女を愛します。」

と孝一が言くと、少し癖つ毛の男性が口を開いたのだ。彼の名前は千葉修次、千葉丈一郎の次男だ。

「孝一君、気を悪くしないでくれるかな？父も姉もエリカを大事にしてるからこう言っってしまうんだ。」

と言うと孝一が答えたのだ。

「いえ、お構い無く。俺も少し腹を立ててしまったので、すみません。」

と言うと、ボサボサ頭の男性が口を開いたのだ。彼の名前は千葉寿和で千葉家の次期当主で今は皇国連邦警察庁の警部をやっている。

「まあ、しょうがないけどな。あんま、気にすんな。」

と寿和が言うのとそれまで黙っていた丈一郎が口を開いたのだ。

「流石、正一殿のお孫殿にして、総一の息子だな。」

それを聞いた孝一が反応したのだ。

「祖父と父を知っているのですか？」

と孝一が尋ねたのだ。すると、丈一郎は頷き答えたのだ。

「ああ、君の父とは同じ小中の同輩でね。彼とは良くいろんな事を競い合った仲でね。君が生まれたと聞いた時は嬉しかったよ。それにまさか自分の娘が親友の息子連れに来るとは驚きだよ。」

と言うと兄妹達は驚いた表情をしていた。そして、修次が丈一郎に尋ねたのだ。

「父さん。彼の事を知ってるんですか？」

その問いに丈一郎は答えたのだ。

「まあな、彼は現在、内閣で大蔵大臣をされている犬塚正一閣下の孫にして、陸軍大将にして陸軍参謀本部長にして犬塚公爵家の現当主の犬塚総一の嫡子だ。」

それを聞いてエリカは勿論の事その場に居た三人も驚きを隠せなかったのだ。簡単

な話だ。今、自分達の目の前に居る少年があの名門貴族である犬塚公爵家の次期当主なのだからだ。しかし、本人はこう言ったのだ。

「余り、家の事は人にべらべら喋らないので良く驚かれますよ。」

と言い孝一はその場を取めたのだ。そして、丈一郎の意向で今日はエリカは孝一の家泊まって行く事になったのだ。

「驚いたわよ。孝一。貴方が貴族の生まれなんて。」

とエリカが歩きながら孝一に話しかけたのだ。すると、孝一はエリカに言ったのだ。「まあな。昔、それでロクな目に遭わなかったからな。余り周囲には貴族の生まれである事を言わな様にしてるんだ。」

と孝一が答えたのだ。それから孝一の家に着いた二人は家に入り家族に紹介したらこれまた一悶着が起きたのは別のお話。

—————
これは、2012年の九校戦の最中の話である。

九校戦の会場のホテルの一室に二人の男女が居たのだ。男性の方が九島烈。十師族、九島家の前当主だ。女性の方は犬塚真夜、旧姓四葉真夜。四葉家現当主の四葉深夜の双子の妹だ。

「それでだ、真夜。そろそろ彼の事を教えてくれないかね？彼と彼の弟達は少し秘密が

多すぎるのだよ?」

と烈が言うと真夜が答えたのだ。

「あら? 先生。あの子達はあの子達、なりに考えて行動をしているのですよ? 余り変な事を言わないで下さい。それに秘密の一つや二つくらい、誰にだってあるのですから先生も人の事を言えませんか?」

と言うと烈が口を開いたのだ。

「確かにそうだが、彼らの場合は話が違うのだよ。真夜。魔法師でありながら魔法に頼らない魔法師。それでは、魔法協会の権威に関わる事なのだよ。」

と烈が言うと真夜がさらに答えたのだ。

「確かにそうですね。でも、あの子達の場合は秘密にしなければこの国を狙う国々からしてみればあの子達は格好の的なのですよ、先生? です、あの子達は余り魔法協会に関わろうとはしないのですよ。それと何れ言う時が来ますのでそれまではお待ち下さいね。」

と言うと烈は納得した様な顔で真夜に言ったのだ。

「分かった、真夜。何れ時が来た時に話をしてもらうとしようでは無いか。」

と二人は席を立ちそのまま部屋を出たのだ。

HAPPY NEW YEAR

2021年元日

そこには着物を着た顔に不思議な仮面をつけた謎の人物がいたのだ。すると、その仮面をつけた人物が喋り始めた。

作者「新年明けましておめでと「どが」ごぶ！」

すると、その仮面の人物が蹴り飛ばされたのだ。蹴り飛ばした人物を見るとこの作品の主人公である犬塚孝一がいたのだ。そして、孝一が仮面をつけた人物を蹴り始めたのだ。

孝一「何が新年明けましてだこのクソ作者！」

作者「ちよ、暴力はやめてください！何するんですか！」

孝一「何するんですかじゃねーよ！バカ作者！お前、急に何してんだ！読者が何してんだこいつって思われるだろうが！」

孝一が仮面をつけた人物を作者と呼ぶと作者は暴力から抵抗したのだ。

作者「仕方無いじゃないですか。この作品を投稿してからの始めての年末の行事を全て越しての初めての元日なんですよ？良いじゃないですか。ね？」

孝一「作者、お前。一回死んで来い。」

作者「ちよ、酷くないですか!? 私、そんな酷いことしましたか!？」

と二人は喋りながらも立ち上がったのだ。

孝一「知るか! お前、この所、作品の投稿頻度も遅いし質と量が悪すぎるんだよ!」

作者「仕方無いじゃないですか! 私には文才も無いですし書くだけでも精一杯なんです

よ! 文句言わないでくださいよ!」

と作者が言うのと孝一は返したのだ。

孝一「つち。仕方ねーな。お前の文才の無さと日本語力の無さは今に始めた訳で無いな。まあ良い。それで、他の奴等は何処にいるんだ?」

作者「嗚呼。ご心配無く。他の人達は時期に来ますからのんびりと仲良く談笑しましょうか? 彼等が来ないと話が進みませんか?」

孝一「ま、しょうがねえな。どうせ暇だしn。ん?」

作者「どうしましたか? おや? 噂をすれば、どうやら来たみたいですかね?」

二人は見た先には学校の制服を着た男女の集団が居たのだ。そして金髪碧眼の少女が二人に話しかけたのだ。

少女「ちよつと、孝一! 今まで何処で何してたのよ! 心配したんだからね!」

孝一「あーすまない。リーナ。ちよつとこのウストラトンカチ作者に制裁を加えてた所

だ。気にすんな。」

とリーナと呼ばれた少女が孝一に話しかけ、孝一が返したのだ。すると、リーナの後ろからかなりの大人数の男女がやって来たのだ。そして彼等が話をしてる三人の所までやって来たのだ。オレンジ色に近い赤髪のポニーテールの少女が口を開いたのだ。

ポニーテールの少女「ねえ、孝一。その変な仮面をつけた人、誰？」

孝一「ああ、エリカ。こいつはただの自称、神を名乗るバカだ。」

とエリカと呼ばれた少女に孝一は答えたのだ。

達也「お前は少しは落ち着け。」

深雪「孝一さん。お兄様の言う通りですよ？」

レオ「なんじゃ、そりゃ。」

幹比古「えっと。どう言うことかな？」

鋼「えっと、少しは辞めた方が良くないかな？」

美月「あの、皆さん。一回、落ち着きましょうか？」

ほのか「そうですね！皆さん。落ち着いて下さい！」

雫「美月。ほのか。貴方達が一番、落ち着いて。」

紅音「兄貴、此処に居たのかよ。」

夏「全くだぜ。兄貴が昔からそうだからな。」

咲「全くね。孝一は。」

啓「仕方ないよ。孝一は昔からこうだからね？」

花音「確かに昔から良く私達を振り回しまくってたからね？」

奏「まあ、孝一の自由奔放な所は公爵閣下譲りつて所かしらね？」

と口々に言う十四人の男女。さらに後ろからまたもや複数人の男女が来ていたのだ。そして、彼等も口を開いて話しかけたのだ。

将輝「犬塚、此処に居たのか？」

真紅郎「僕達が迷ったのにここまで良く来れたね？」

愛梨「孝一！心配したわよ！」

栞「やれやれね。」

沓子「全くじゃ！少しは儂等の苦勞を考慮してもらわねば！」

真由美「孝一君と達也君！やっと思つけたわよ！」

摩利「しかし、こんな所でのんびりしているとはな。」

克人「お前達。少しは落ち着け。」

と八名の男女も追加でやって来たのだ。そして全員が作者の方に目を向けたのだ。そして、代表で達也が作者に尋ねたのだ。

達也「お前は誰なんだ？ 一体何者で何処からやって来たんだ？ 目的は何だ？」

作者「私は一言で言えばこの作品の作者であり神でもあり人間でもありますよ。まあ、貴方方とは敵対する意思はありませんし色々ツツコミたい気持ちがあると思います。そこはツツコマずにスルーでお願いします。目的はまあ一種の個人的な暇つぶしであり、ただ単に面白味も無いこの作品に面白味をあげようとしただけですよ？」

達也「そう言う事なら仕方ない。余りツツコムのは辞めておこう。」

作者「ありがとうございます。四葉家次期当主殿。」

と達也に聞かれた作者は答えてのだが少し答えを濁す形で答えたのだ。その答えに達也は少し不信感を持ったが必要以上に目的を探っても意味は無いと判断して聞こうとはしなかったのだ。

孝一「それで作者、何でお前はこの話を作成して投稿したんだ？」

作者「それですか？ まあ、冒頭でも言いましたけどこの作品が投稿して始まって半年が過ぎて最初の年末の行事が過ぎて最初の元日なので折角なのでやりましたよ？」

孝一「そんな理由でか？ だったらクリスマスも作って投稿すれば良いだろ？」

作者「貴方、私に恋人が居ないのを知ってるでしょ？ その話は終わりしましょうよ？ 私が泣きたくなるので。しかも、さらっと私の地雷踏まないで下さい。」

孝一「仕方ねえな。この話を終わらだ。」

と孝一と作者が話を終わらせたのだ。そして全員が作者を中心に円となって話を始めたのだ。

レオ「それで、何でこんな白くて広い空間に俺達は居るんだ？」

幹比古「確かにそうだね。それが一番の問題だよ？」

真紅郎「それに此処が何処かも調べなきやいけないしね。」

将輝「その前に、この仮面の奴に聞いたほうが早いと思うが？」

と全員が作者に視線を集中させたのだ。

作者「嫌ー。それに関しては、ごめんなさいね。言えないですよ。色々有るんですよ。まあ、作者権限で此処に呼び出したと言った方が良いでしょう？」

と質問に対して答えをはぐらかす作者。するとリーナと愛梨が作者に掴みかかったのだ。

リーナ・愛梨「正直に答えなさい！」

作者「此処は一種の夢の世界ですよ。まあ、夢の世界なので起きれば何も無かったか様になるので良いですけど、貴方達が望むであれば記憶を残しますけど如何ですか？」

二人に言う様に詰め寄られた作者は答えたのだ。そしてそれを聞いた彼等は答える。

一同「分かった。消してくれても構わない。」

そして、そこから会話が始まったのだ。

孝一「おい、作者。冒頭の挨拶の続きをするぞ?」

作者「分かりました。では、皆さん。ご一緒にご唱和下さい、私の名w「ドガ」ごほ
!」

孝一「何、やってんだお前は!少しは考えろ!もう一回やり直しをしろ!てつか何さりげなくウルトラマンゼットの決め台詞を言おうとしてんだ!」

作者「仕方ないじゃ無いですか!折角ウルトラマンZが最終回を迎えたんですから。分かりましたよ。やり直しをしますよ。」

と孝一が作者がボケようとしたのでツツコンで止めたのだ。そして作者もやり直しをしたのだ。

作者「では、気を取り直して行きましようか。では、皆さん。ご一緒にご唱和下さい。」
一同「新年明けましておめでとございます!」

全員が新年の挨拶をしたのだ。そして、それを皮切りに話を開始したのだ。

作者「嫌々。まさかこの作品が半年も続くとは思いませんでしたよ。全く。」

孝一「まあ、作者は少し飽き性な所があるからな。意外ちや、意外だな。」

リーナ「てか、どうして何食わぬ顔で二人は会話してるのよ。」

エリカ「確かにそうよ。何で気にせずによってるのよ!」

真顔で普通に会話をする二人にリーナとエリカがツツコミを入れたのだが孝一が口を開いたのだ。

孝一「それは、突っ込むのは野暮な話だ。それに一々それを気にしてたら話が進まないからな。辞めてくれ。」

リーナ・エリカ「分かったは。」

すると、達也が作者に尋ねたのだ。

達也「お前は何故、俺達を此処に呼び出したんだ？教えてくれるか？」

作者「ああ、それはただの数合わせですよ。私と孝一殿だけでは面白味が一切無いので貴方達を呼ばせていただきました。」

レオ・幹比古・将輝・真紅郎「それだけでか!?!?!」

作者が答えるとレオ、幹比古、将輝、真紅郎が突っ込んだのだ。

作者「仕方ないですよ。本当なら最初の段階では私と彼だけでするつもりがこれでは花も無ければ面白味も無いので文句は言わないでください。私だってそれはしたくないんですよ?」

愛梨「そんな単純な事で私達が寝ている間に夢に干渉したのかしら?」

と愛梨が作者の答えを聞いて呆れていたのだ。

作者「まあ、そうですが。元々は色々書いてる最中に思いついた事を書き込んだ結果

がこの回なんですよ？まあ、本当はナルトやワンピースやSAOの方々も呼ぼうかと思いましたが色々ややこしくなるので辞めましたよ。」

すると、孝一が作者にある事を言ったのだ。

孝一「そりやそうだろうな。それは賢明な判断だ。そう言えば、作者。」

作者「はい。何でしょうか？」

作者が孝一の方へ振り向くと彼が口を開いたのだ。

孝一「そう言えば元々この作品は設定や内容が違ってたて言う話が出て来たんだが。」

栞・杏子・真由美・摩利「「え!?!」」

作者「それは、本当ですよ。」

深雪「まあ。」

孝一はとんでも無い事を言い周囲を驚かせ作者はそれを認めたのだ。そして作者が喋り始めたのだ。

作者「まあ、元々この作品は最初全く違う内容にするつもりだったんですけど、実は私とその作品を書こうとしたタイミングで携帯が壊れてしまったので機種変更と電話番号の変更などをしていた後にハーメルンのアカウントを再取得したんですよ。」

克人「それで、どうしたんだ？」

作者「はい、それでその作品を書こうと思い書き始めたんですが、最初はその作品は

クロスオーバーだったんですがよくよく考えてみればクロスオーバーのしすぎや登場人物が多すぎてややこしくなったのと内容がかなり複雑かつ頓珍漢で何だこれの状態になってしまったので結局のところそれを没にして設定の幾つかだけをこちらに持つて来まして登場人物や舞台の設定のいくつかは元々はそちらの方の設定の流用が多いですね。」

ほのか「え!? そう何ですか!？」

雫「全部じゃなくて良いんで設定の幾つかは教えてくれませんか?」

作者の発言に驚くほのか。しかし、雫は冷静に質問したので作者は答えたのだ。

作者「ええ、良いですよ。まず、主人公の名前と容姿と一部の家族設定はそのままでしたし貴族制度やこの国の歴史と地方自治制度そして魔法師の設定などが殆ど変わっていませんよ?」

咲「あら、そうなの? 意外だは!」

紅音「作者の事だろくな設定じゃ無いんだろくな。」

夏「だろくな。その設定の内容を知りたいだが?」

啓「まあまあ、皆落ち着いて。」

衝撃の内容に全員が驚いたのだが作者は話を続ける。

作者「まあ、まず祖父母と両親の設定は変わらずにと姉と弟の夏殿の設定は殆ど変わ

らずに達也殿と深雪殿と愛梨殿の設定は変わらずにですよ。大部分の人の設定も変わりなくですよ。」

紅音「じゃあ、中には初期設定とは違う奴が居るってか事か？」

紅音は作者に尋ねたのだ。

作者「はい。まずは、貴方ですね。紅音君。」

紅音「は!?!何で。」

作者「元々は孝一殿に妹が居てその妹の彼氏と言う設定だったんですがそれは結局は没にしましたけどね。それと羽澄奏殿と五十里啓殿と千代田花音殿も全く初期設定が違いますね。五十里啓殿と千代田花音殿は原作通りで羽澄奏殿は初期設定の段階では主人公の年の離れた姉という設定だったんです。此方も色々あって没にしましたね。咲殿は実際は年齢を除けば初期設定とは殆ど変わりませんよ。」

奏「そうなの? まあ、孝一の姉も悪く無いわね。」

啓「あくそう何だ。」

花音「まあ、そうだよね。」

咲「あらそうなの?」

それぞれの反応があるが本人達は余り気にしていないようだ。そして作者は話を続けたのだ。

作者「後、真由美殿は達也殿との婚約者設定ですね。これは初期設定の段階でも決まった路線ですね。」

真由美「あら、そうなのね、」

真由美は作者の発言に嬉しそうにしている。

作者「残りの方々は原作とは殆ど変わりなくですね」

一同「「はあ!?!」」

作者の言葉に残りのメンバーは驚きの余り固まったのだが作者は言ったのだ。

作者「仕方無いじゃないですか。そうしとかなないと設定上色々大変なんですから。」

作者が裏話をしたのだ。そしたら孝一が作者に聞いたのだ。

孝一「そう言えば作者。登場人物以外では何か世界観や舞台や用語の中の初期設定の中で没になったりした設定があったり途中で変更した設定もあるんだろ?」

作者「嗚呼、結構ありますね。まず、舞台や世界観は実は殆ど初期設定とは違いがありませんね。」

孝一「そうなのか?」

孝一の問いに作者が答えて孝一が返したのだ。そして、作者を話を続ける。

作者「作中の年代や日本などの設定は元々の設定の段階で決まってきましたね。それと、初期設定では四皇を出そうと思ったんですけどややこしくなるので没にしました

ね。それと一夫多妻や幾つかの大公国や一部の連邦州の設定も初期設定の段階では元々無くてその後製作段階で追加したり初期設定とは大幅に違ったりしてますね。」

孝一「は!?!何でそんな事したんだ?」

作者「嫌々それがですね。四皇は政府が魔法協会への対抗勢力として作ったんですけど結局力オスな状況になるので没にしましたし。一夫多妻も初期設定の時点では無かったんですけど孝一殿や達也殿の設定を作ってる時点で思い付きましたね。大公国や一部の連邦州も最初は違うタイミングで転移して来て戦争になって日本に編入されるという流れでしたしね? ジュラ・テンペストも元々は初期設定の段階では無くて途中で追加しましたからね? 後、貴方の動物好きは元から無かった設定ですしね。」

孝一「そりゃ制作の途中で追加や没はあるからな。仕方ないしな。」

作者が初期設定の話をして孝一も答えたのだ。作者はまだ話を続ける。

作者「皇国七武海や尾獣と人柱力などは初期設定の段階での名残りですね。」

孝一「そうなのか?どれも俺に関わる事だからな。是非聞いてみたいな。」

作者の言葉に孝一が何処か嬉しそうに話を聞こうとする。

作者「七武海は元々四皇の一つの勢力の最高幹部の予定でしたけど四皇が没になったので国の守護神として設定を変えましたね。後、尾獣と人柱力は元々あの原作ナルトの本人達にしようかなと思っただんですが色々大変かと思っただけにしましたね。」

孝一「だろうな。しかし、今の設定と初期設定とはかなり掛け離れているからな驚きだな。作者、お前は少し考えて作品を書いて投稿した方が良いぞ。」

作者「ええ、私もそうした方が良いと思っっているのですがまあ可能な限りはやりまよ。やらないと貴方に何されるか分かりませんからね？」

孝一「まあ、お前も頑張つて投稿しろ。それに無理に質や量の事を言っても無駄だからな。」

作者「そちらの方が私としても良いですよ。」

二人はそのまま会話を続けると作者が腕時計を見たのだ。それに気付いた孝一が作者に聞いたのだ。

孝一「作者。どうしたんだ？」

作者「そろそろ時間ですね。では、皆さんお上がりの時間ですね。」

孝一「もう、そんなの時間か？ま、良いか。」

作者「では、皆さんご一緒に。では、行きますよ。」

一同「「新年明けましておめでとうございます。今年一年も無病息災、この作品を応援をよろしく願います。」」

古代遺跡編

古代遺跡編 story 1

2013年1月1日午前8時

この日、犬塚公爵家一家は京都にある清明神社に来ていた。此処は犬塚公爵家の先祖にあたる安倍清明が祀られている神社でもある為、毎年正月の三ヶ日は犬塚公爵家を含めた安倍清明の子孫達はここの神社に参拝して近くのホテルで宴会をしていたのだ。その後、三ヶ日が明けて犬塚公爵家一家は東京に戻ったのだ。

2013年1月7日

この日、学校の始業式が終わりそのまま家に帰ってテレビをつけた。すると、ニュースで関東州の川越市郊外である遺跡が発見されたと報道されたのだ。そのニュースよれば遺跡は少なく見積もっても今から2000年前から多く見積もっても1万2000年前前程はあるとキャスターが言ったのだ。だが、孝一はその遺跡発見ニュースを不敵な笑みを浮かべながら見ていたのだ。

「漸く見つけたぞ。オロチ遺跡。アイツを絶対に復活させる訳にはいけない。魔法協会の連中には探索させる訳にはいけない。あいつらの事だ。何をするか分からんから

な。」

と言いつつ、孝一は自分の部屋を出て道場に向かったのだ。

そして、三人の弟達を相手に稽古を付けたのだ。

「「はあああー」」

と孝一に三方向から同時に突撃する紅音、夏、信乃の三人達。だが、孝一は最も容易く三人の攻撃をかわすのだった。そして、そのまま彼等に三人にそれぞれ一撃をお見舞いしたのだ。

「お前達は、少しは考えて攻撃をしろ。俺が敵で此処が戦場だったら、お前ら死んでんぞ。今日の稽古は此処までだ。シャワー浴びて、着替えろ。」

と言いつつ道場を去ったのだ。

その後、家族全員で晩御飯を取って、咲と信乃は学校の課題を紅音と夏は魔法と悪魔の実際の能力の練習をして、孝一は自分の部屋である書物を見ていた。

その書物は太平風土記だ。それはかつて、犬塚公爵家の先祖である安倍晴明が子孫に對して残した予言の書でもある。そこにはオロチ遺跡の事が書かれており、そこに眠る者を目覚めさせてはいけけないと書かれている為、子孫である安倍一族の者達はその遺跡を見つけ次第破壊しなければならない。

だから、今回見つかった遺跡はどれだけ歴史的価値があっても破壊しなければならぬのだ。例えば政府や軍そして魔法協会の妨害があったとしてもだ。

その為に孝一は明日政府に今回見つかった遺跡に関して自分に優先的に遺跡の調査権を認める様に掛け合うつもりだ。

そして、孝一は更に別の書物を開いて調査を続けたのだ。だが、それ以上は何も出て来なかったのだ。その為に孝一は書物をしまつて、明日に備える為に、ベットに横になつて寝たのだ。

古代遺跡編 story 2

日本皇国関東州八王子市某所魔法第一高校

2013年1月8日

その日、学校中は昨日の遺跡発見のニュースで持ちきりだったのだ。孝一達、犬塚姉弟はそんな中で学校に登校していたのだ。

そして、四人は自分のクラスに分かれて入ったのだ。孝一は自分のクラスに入ってたのだ。席に着いたのだ。だが、孝一はクラスメイト達の話の輪に入らずに考え事をして居たのだ。簡単な話だ。遺跡の件を今日の朝、皇国政府に掛け合って遺跡調査の優先権を求めているからだ。そして、政府は閣議で決めると通達して来たので、その閣議決定が終わるのが今日の午前中だからだ。

だが、孝一は気にせずに授業を受けて居たのだ。一限目が終わると同級生の十三束鋼が話しかけて来たのだ。

「ねえ、犬塚君。昨日の遺跡発見のニュースをどう思うかな？」

と鋼が孝一に尋ねて来たのだ。そして、孝一はこう返したのだ。

「そんな事を聞いてどうすんだ？」

と鋼に対して孝一は言ったのだ。

「まあ、そうだけど。でも君は気にならないのかなと思つて聞いてみたんだけど。だつて君はみんなの話の輪に入つて無かつたからね？」

と鋼と言うが孝一は言ったのだ。

「それがどうした。遺跡に關しては何か、お前らに利益があんのか？」

と孝一が鋼に対して言ったのだ。すると鋼がこう返したのだ。

「でも、誰だつて気になるんじゃないのかな？」

と鋼が言ったのだ。それを聞いて孝一はこう言ったのだ。

「全く。どいつもこいつも。物好きな奴が多いな、此処の奴らは。」

と言いつつ次の授業の準備をしたのだ。その後、午前中の授業が終わつたと同時に孝一の携帯のメールにある一通のメールが届いたのだ。そのメールには閣議にて今回の遺跡の調査に於ける孝一の調査権を優先的に認めると通達されたのだ。そのまま、孝一は昼食を取る為に学校の食堂で昼食を取つたのだ。

その後、午後の授業を受けて全ての授業を終えた孝一は帰ろうと思つたが、エリカと

リーナと一緒にいきつけのカフェに行こうと誘って来たので行く事にしたのだ。そして、彼女達と達也達が行きつけのカフェに着いたのだ。彼等は席に着いて、それぞれの自分の好きな物を注文をしたのだ。ちなみに、孝一はチョコケーキとコーヒーを頼んだのだ。その際、彼等は昨日の遺跡発見ニュースを自分達の色々な憶測を述べて居たのだ。だが、孝一は黙っていたが仲の良いメンバーの一人でもある雫が孝一に尋ねてきたのだ。

「ねえ、孝一さんはどう思うの?」

と孝一に尋ねたのだ。孝一は答えたのだ。

「あの遺跡に関しては俺は語る頃は無いな。そもそも、遺跡が俺達に利益があるのか? 逆に不利益をもたらすかもしんねーな。じゃあ、俺はもう帰るは。」

と孝一は言って、リーナと一緒にいたのだ。そして、家に帰宅したのだ。

古代遺跡編 story 3

2013年1月13日日本皇国関東州川越市郊外

此処にある遺跡があつたのだ。そう、先日発見された遺跡だ。しかし、此処は皇国軍と国家警察と関東州警察が周囲を警備して居たのだ。簡単な話だ。此処では貴重な遺物や宝があるからだ。そんな時に魔法協会の十師族の代表が一人やって来たのだ。

「此処の調査及び発掘に関して、我々十師族を中心にして魔法協会が行います。どうか、お引き取りをお願いします。」

とその代表が言ったのだが、軍の兵士が彼に対して言ったのだ。

「それは、出来ません。」

と返答して、拒否をしたのだ。すると、その代表が言い返したのだ。

「何故、出来ないのですか？」

と代表が言うが兵士がこう答えたのだ。

「皇国七武海、犬塚孝一殿が此処の最優先調査権を保持しております。彼の許可無く此

処の調査は出来ません。お引き取りをお願いします。」

と云われてその代表はこう言つて立ち去つたのだ。

「その様な事をして許されると思ふなよ?」

と言つて立ち去つたのだ。その場に居た兵士や警官達は呆れつつ言つたのだ。

「お前らこそ何様のつもりだ? 偉そうにしているのも今の内だぞ?」

と言つたのだ。その言葉はまさに一部の者達の魔法協会への不満と不信感を代弁して居たのだ。今日の出来事が報告された孝一は魔法協会に抗議の声明を出したのだ。簡単な話だ。自分が優先的に調査する遺跡に関して横槍を入れられたも同然なのだ。この声明の後、魔法協会は今回の事で音沙汰も無くして居たのだ。

それから、月日が経ち2月11日。この日は、皇国にとって大事な日なのだ。そう、紀元節なのだ。皇国全土でどこも休みなのだが、孝一や彼の父である総一を初めとした貴族や内閣の国務大臣及び皇国両議会議員は皇室主催の祝賀会に来ていた。その後、祝賀会は無事終わり出席者全ては帰路に着いたのだ。家に帰宅した総一と孝一。

前々から計画して居た遺跡調査の日を父から伝えられて、明日遺跡の調査をする様に言われたので明日、学校を公欠として姉の咲と弟の紅音と夏を連れて行く事になったの

だ。

翌日、孝一達は川越市郊外にある遺跡に来ていた。そして、警備の兵士や警官達は彼を通じたのだ。そして、入口付近までやって来たのだが孝一は足を止めたのだ。すると、紅音が口を開く。

「兄貴？ どうしたんだ？」

と尋ねる紅音。

「ああ、気を付けろ。魔法協会の奴らが居るからこの先に二手に分かれる場所がある。そこで二手に分かれるぞ。俺は左に行く。三人は右へ行ってくれ。それと、左の方は壁を崩壊させて塞ぐ。三人は右の方で待ち構えて居てくれ。」

と言い三人は頷いたのだ。そして、四人は遺跡のある程度入った時に孝一は姿を変えて魔人態になって左に入ってそのまま壁を崩壊させたのだ。そして、残った三人は右の通路で彼等魔法師達を待ち構えたのだ。

それから、10分後。十師族を中心にした魔法協会があつた四人が分かれた場所に来たのだが、左側が孝一の手により壁が崩壊して居たので右側の方に行く事にしたのだ。因みにメンバーの中には彼等の同じ第一高校の生徒達や全国にある魔法大学付属高校の生徒も何人か居たのだ。それから、彼等はある程度進むといきなり長髪の少女が魔法協会の調査団を攻撃して来たのだ。そう、孝一の姉である咲だ。そして、体の一部が鱗に

なつて居てそして片方は背中から翼が生えてもう片方は所々炎が出ているのだ。よく見ると翼が生えているのが夏で炎が出ているのが紅音だ。渡辺摩利が口を開いたのだ。

「お前達！何故私達の邪魔をするんだ！」

と摩利が言うが咲が口を開いて言い返したのだ。

「此処から先へ行かせないは。遺跡の調査が終わるまで此処で止まってもらはうは！」

と言ひ咲の同学年の一人である桐原が咲に斬りかかると夏がそれを防いで蹴り上げたのだ。三人は調査団を妨害したのだ。

三人が調査団を止めている一方、孝一は遺跡の最深部に來ていたのだ。よく見ると左手にはダークリングを持っていたのだ。そして、六枚の何か生き物の様な物を書かれていたカードを右手に持っていたのだ。

「これであいつを、マガオロチを封印して此処を破壊する。」

と孝一は言ったのだ。カードをリードしたのだ。すると、六つの光の玉が浮かび上がり、奥にあつた石像に入ったのだ。そして、孝一は刀を抜刀したのだ。孝一は抜刀した刀で蛇心劍新月斬波を放つたのだ。だが、その斬撃が届かなかつたのだ。否、正確には防がれたのだ。後ろに気配を感じた孝一は振り向いたのだ。そこには、四葉達也と十文字克人が居たのだ。

「そこまでだ。お前は何者だ？」

と達也が尋ねたのだ。そして、十文字克人が口を開く。

「お前は何か目的はなんだ？犬塚は何処に行ったのだ？」

と克人が言う。と孝一は変身を解除して姿を見せたのだ。

「俺だ、達也。後、邪魔しないで下さいよ十文字先輩。」

と孝一が言ったのだ。そして、自分の目的を言ったのだ。

「俺の目的は此処に眠る大魔王獣を封印する為だよ？」

と孝一が答えたのだ。達也が尋ねたのだ。

「大魔王獣？なんだそれは？後、何を封印するんだ？」

と達也が聞いたのだ。

「魔王獣は太古の地球に居た怪物で光の巨人に封印された、怪物達だ。そして、大魔王獣はその魔王獣の頂点に立つ怪物だ。俺はその大魔王獣を封印する為に此処にしに来たんだ。」

と孝一は答えたのだ。すると、克人が聞いたのだ。

「まさか、その為にこの遺跡の調査権を要求したのか？」

克人が言ったのだ。そして、孝一は答えたのだ。

「ええ、そうですね？ まあ、封印が終われば後はそつちに調査権を譲るつもりでしたけど、貴方が勝手に来たせいで封印が出来ませんけどね？」

と孝一は言ったのだ、達也が言ったのだ。

「では、此処でそいつの封印が終われば調査権を譲るのか？」

と達也は聞いて来たのだ。孝一は頷いたのだ。すると、石像から光弾が出て来たのだ。孝一は魔人態になってそれを防いだのだ。その石像が動き出したのだ。

「まさか、奴の封印が解けたのか!？」

と孝一が言ったのだ。それを聞いた達也は尋ねたのだ。

「奴の封印とは、大魔王獣の事なのか？」

と達也が言ったのだ。そして、孝一は答えたのだ。

「ああ、早く此処から出た方がいいな。」

と言い三人は脱出を図ったのだ。

一方その頃、咲達三人は調査団を止めていたのだが、遺跡全体が揺れ始めたので三人と遺跡内に居た調査団のメンバーが遺跡の入口から出たのだ。外に居た調査団の面々

は三人に驚いていたのだ。彼等は三人に質問攻めをしたのだが、咲は言ったのだ。

「此処から早く逃げて下さい。早く逃げないと死にますよ?」

と言ったが一人の調査団メンバーが言ったのだ。

「何故だ! 此処には何かしらの過去の遺物があるのだぞ? 分かっているのか!」

と言った瞬間、遺跡が揺れ始めたのだ。そして、遺跡の天井を壊して巨大生物が出て来たのだ。すると、三つの影が上空から降りて来たのだ。そして、調査団と咲達の近くに降り立ったのだ。すると、真由美が口を開く。

「達也君、十文字君。大丈夫? それに、貴方は一体何者なの?」

と真由美が尋ねたのだ。すると、孝一は魔人態の変身を解除したのだ。

「俺ですよ? 七草先輩。」

と孝一が言ったのだ。そして、それを見た調査団のメンバー全員が驚いて居たのだ。

「どう言う事だ! 犬塚、お前。」

と口を開く一条将輝。

「君は一体何者なの?」

と吉祥寺真紅郎が言ったのだ。すると、孝一は答えたのだ。

「今はそれどころじゃない筈だ。あれを叩かないと被害が出るぞ。これじゃ、オロチの

封印は失敗だ。これで、マガオロチが成体になって、五つの血脈が刺激されてマガタノオロチが復活する。」

と孝一が言ったのだ。

「マガタノオロチ？何だそれは？」

と一条将輝が聞いたのだ。そして、孝一は答えたのだ。

「あれの、成体だ。だが、奴が町に行く前に俺が止める。」

と孝一は言い瞬時に場所を転移させて。別の場所に来た、孝一。しかし、左手にはダークリングに似た別の道具を持って居たのだ。それは、オーブリング。彼はそれをかざして光に包まれたのだ。

インナースペース内

孝一が一枚の人の様な物が描かれたカードを取り出してオーブリングにリードしたのだ。

「ソファイー！」

「ソファイー！」

そして、もう一枚のカードもリードしたのだ。

「ベリアル！」

「ウルトラマンベリアル!」

そして、孝一はある台詞を言っ、両手を振り始めてオーブリングが掲げたのだ。
「光と闇の力、お借りします。」

「フージョンアップ。ウルトラマンオーブサンダーブレスター」

とオーブリングは言い孝一は光に包まれてゾフィーとベリアルが彼に合体して姿を変えて巨大化したのだ。

そして、ウルトラマンオーブサンダーブレスターに変身してマガオロチに立ち向かったのだ。そして、マガオロチに攻撃を続けて最後に光線を放ってマガオロチに直撃してマガオロチは爆発したのだ。そして、オーブは空に飛びだったのだ。そして、遺跡が崩壊したので調査は中止になったのだ。これによって遺跡の調査の事は有耶無耶になったのだ。

2月14日

この日はバレンタインデーだ。孝一と達也は恋人と同学年の女子生徒全員からもらって居た。ちなみに咲は許嫁の啓に大きめのチョコを渡していた。それから数週間後の3月上旬。第一高校で卒業式が行われ、今の三年生は卒業してそれぞれの進路に向かっていったのだ。

余談だが。遺跡調査の件で魔法協会の暴走は目に余る所があった為、政府と議会から

は今回の事で糾弾されて来年の魔法協会関係の予算を国と議会から削ることを言い渡されたのだ。

3月某日

その日、孝一は崩壊した古代遺跡の近くに居たのだ。

「封印は失敗したが奴らのおかげでマガオロチの尻尾を手に入れる事が出来たから今回はよしとしよう。」

そして、孝一はそう言うのとダークリングを持ったまま魔人態になって居るとそこには切られたマガオロチの尻尾があったのだ。すると孝一がダークリングの力で次元の穴を開けるとマガオロチの尻尾を次元の穴に回収したのだ。

ダブルセブン及びステイプルチエース編 ダブルセブンstory1

2013年4月某日

この日は魔法大学第一高校にて入学式が行われて居た。

孝一は入学式の警備を行っていた。そして、前日に行われた始球式が行われていたので新しいクラスも発表されたのだ。孝一のクラスは2年B組だ。因みに弟の紅音と夏そしてリーナも何故だが、同じクラスになった。そして、達也と鋼も同じクラスになったのだ。孝一はそれでも気にせずに居た。

何せそのクラス発表が自分には関係が無いからだ。孝一は入学式が行われている会場の周辺を警備しながらいると姉と咲と姉の許嫁の啓が前方からやって来たのだ。

「孝一。警備、ご苦労様。」

と姉の咲が話しかけて来たのだ。それに続き啓が口を開いたのだ。

「まじめにやってるみたいだね。孝一。」

と啓が言いながら、孝一の頭を撫でたのだ。だが、孝一は顔を赤くして言ったのだ。

「啓兄、やめてくれ。此処は学校だからな。」

と言いつ残して、その場をそそくさと離れたのだ。そして、家に帰宅したのだ。孝一が自分の部屋で本を読んで居ると家の使用人の一人が自分の部屋のドアをノックしたのだ。孝一が入る様に伝えて使用人が伝言を言ったのだ。

「若様。奥様が呼んでおられます。奥様のお部屋へお向かい下さい。」

と伝えられたので孝一は「分かった。」

使用人に言い、母の部屋に向かったのだ。孝一は母の部屋の着いてドアをノックしたのだ。中から声がしたのだ。

「入って良いわよ。」

と母が言ったので孝一は言ったのだ。孝一は部屋に入ったのだ。そこには、孝一達の実母である犬塚真夜、旧姓四葉真夜だ。そして、そこには十代の二人の男女がいたのだ。よく見ると自分の再従兄弟姉妹にあたる黒羽亜夜子と黒羽文弥だ。孝一は母の真夜に對して口を開いたのだ。

「お袋。どう言う事だ？」

と真夜に言ったのだ。すると、真夜が答えたのだ。

「彼女達は今日から第一高校に通う事になったのよ。その為に通う場所は達也さん達の家になる予定だったけど、向こうは水波さんが同居する事になったから、此方の家に来たのですよ。」

と答える真夜だった。孝一は真夜に対して抗議を始めたのだ。

「何で、俺達に相談無くやってんだ！と言うか、親父はこの事を知ってるのか？」

と孝一が言うと言夜が答えたのだ。

「それなら、総一さんは、了承済みよ。姉弟の中でリーダー的な存在の貴方に聞いてOKを貰えば良いかなと思っただけだよ。どうかな？」

いつもの調子で答える真夜に対して孝一は頭を抱えたのだった。その後、父の総一が家に帰宅したのだ。そして、家族全員で食事を行ったのだ。その場で亜夜子と文弥と犬塚公爵家の家族と話をしたので孝一達、姉弟は納得したのだ。そして、孝一は自分の部屋に戻ってベットに横になって寝たのだ。

ダブルセブンス トory 2

2013年4月10日

日本皇国関東州八王子市郊外魔法大学付属第一高校午前6時半

孝一は朝早くから学校に登校していた。そして、校内にある人気の無い場所で魔人態になっていたのだ。そして、木の切株の所にウルトラゼットライザーを置いて刀を近くまで近づけてある呪文を呟いたのだ。

「星の瞬く狭間の闇よ、暗黒のパワーを我にもたらせ！光から闇へ、闇から光へ！」

と言い終えて刀を上空に突きつけて、そこから、空間が歪み謎の光が三つ程出て来てゼットライザーに空いていた穴に装着されてゼットライザーが輝き出してゼットライザーに似た物が出て来たのだ。それは、ダークゼットライザーだ。それを手にした孝一は魔人態から元の姿に戻ったのだ。

それから、孝一は学校の近くにあったカフェでモーニングを頼み朝食を取ったのだ。そして、二時間後。学校に生徒達が登校し始めたのだ。孝一は料金を払って、店を出たのだ。

孝一は学校の校門付近まで行くと何か騒がしかったのだ。すると、孝一は見覚えのある赤髪の男子生徒を見つけたのだ。それは、孝一の弟の一人である紅音だった。孝一は紅音に近づき話しかけたのだ。

「おい、紅音。何の騒ぎだこれは？」

と孝一は紅音に聞いたのだ。すると、孝一に気付いた紅音が答えたのだ。

「あー兄貴。ああ、原因はあそこの三人だよ。」

と紅音は指を指したのだ。そして、孝一は紅音の指を指した方を見るとそこに見覚えのある女子生徒が二人と見覚えの無い男子生徒が言い争っていたのだ。二人の女子生徒は達也の許嫁であり真由美同様、達也の許嫁でもあり、七草真由美の妹の泉美と香澄だ。二人は今年から第一高校に入学したのだ。そして、紅音によれば、男子生徒の方は今年の七宝琢磨で、師補十八家の一つ七宝家の出身だ。如何やら三人はちよつとした事で言い争いになって居るらしいと紅音が教えたのだ。すると、孝一が言ったのだ。

「誰も止めないのか？後、夏は何処だ？」

と言うが紅音が言ったのだ。

「止めれるなら、とつくの当の前に止めてるよ。ああ、夏ならそろそろ来るはずだ。」

と答えたのだ。そう言った瞬間に夏が来たのだ。

「二人共如何した？」

と夏が笑顔を見せながら言ったのだ。そして、騒ぎを見た瞬間ある程度、事の次第を理解して孝一に聞いたのだ。

「兄貴。あれ如何する？」

と夏が孝一に話を振ったのだ。すると、孝一が言ったのだ。

「言わなくても分かっているだろ？止める。」

と言い孝一が動き出して二人はやれやれと言いながら孝一の後続いたのだ。

「大体、其方が先に謝ればいいだけの話だろ？何で僕たちが謝らなきゃいけないんだよ！」

と香澄が言ったのだ。そして、七宝が言い返したのだ。

「何故、お前達に俺が謝るんだ。お前らの方が謝ればいいだけの話だろ。」

と琢磨が言いい互いがCADに手を伸ばした瞬間、三人の男子生徒が割って入ったのだ。周囲の生徒がざわついたのだ。簡単だ。三人の内二人は知らない者は居ないと言っても過言でも無い、七武海の雷帝の孝一と童拳の夏なのだから。いきなりの事に三人は彼等を見たのだ。すると、孝一が、三人に言ったのだ。

「お前ら、ちよつと風紀委員会にその面を貸せ。そうすれば厳罰にはしないからよ。な？」

と孝一が睨みながら言うが紅音が口を開いたのだ。

「兄貴がそれを言うとは別の意味に聞こえるけど？」

と言うが孝一が紅音の後頭部を殴ったのだ。紅音が痛つてと言いつつ彼等に対峙したのだ。そして、三人は大人しく孝一の後についていたのだ。そして、紅音が色々言つてその場を解散させたのだ。その後、あの三人は孝一の御説教と雷を喰らい、解放されたのだ。その日、昼休みに再従兄弟姉妹の亜弥子と文弥が昼食を取る孝一の元に来たのだ。そして、文弥が孝一に聞いたのだ。

「孝一兄さん。隣の席、宜しいでしょうか？」

と言うが孝一が言ったのだ。

「おい、文弥。その呼び方はやめろ。色々、誤解を招く発言だ。」

と孝一が文弥に注意をして亜弥子が口を開いたのだ。

「あら、いつもその様な態度なんですか？」

と亜弥子が言ったのだが、孝一は否定したのだ。その後、孝一は午後の授業受ける為に教室に戻ったのだ。

その後、七宝琢磨が再び騒ぎを起こしたのだ。其れを聞いた孝一は再び彼を説教する為に彼の元に行く事にしたのだが、達也が来て七宝琢磨と十三束鋼が決闘が行われる事になったのだ。孝一は達也に自分と共に立ち合いをする様に言われたので立ち合いを

する事にしたのだ。それから数日後、その週の土曜日に七宝琢磨と十三束鋼の模擬戦が行われる事になったのだ。達也の合図と共に模擬戦が始まったのだ。その模擬戦の最中、鋼が接触型の術式解体を行ったのだ。模擬戦は最終的には鋼の勝利が決まったのだ。孝一は模擬戦が終わったのを確認するとその場を立ち去ろうとするとはがね自分に話しかけてきたのだ。

「ちよっと、待ってくれ！」

と鋼に呼び止められた孝一は鋼の方を向いたのだ。

「何だ？」

と孝一が鋼に言ったのだ。すると、彼がとんでもない事を口にしたのだ。

「去年の九校戦以来、僕は君と戦ってみたかんだ。僕と戦ってくれる？」

と鋼が言うのと孝一は少し考えたのだ。此処で鋼と模擬戦を行えば自分の強さを見せつける事になる。その為、孝一は了承したのだ。

「ああ、良いぞ。その代わり、少し本気を出させて貰うからな？」

と孝一が鋼に述べて鋼はそれを了承して、二人は模擬戦を行う事になったのだ。

練習室内で対峙する、孝一と鋼。鋼は自分用のCADを持っていた。孝一の方は右腰に三本の刀を挿した状態で左手首にはブレスレット状のCADを装着していたのだ。そして、達也が合図を出して模擬戦が始まったのだ。孝一は刀の一本を抜刀して斬撃を飛ばしたのだ。

「二刀流、三十六煩惱鳳！」

と孝一は言ったが鋼はそれを紙一重に躲けたのだ。そして、鋼が魔法を発動したが孝一は術式解体を行い発動を防いだのだ。そして、一進一退の戦いが進んだのだが、結果模擬戦の結果は孝一の勝利に決まったのだ。すると、孝一が琢磨に話しかけたのだ。

「おい、七宝。」

と孝一に話しかけられた琢磨は孝一の方を向いたのだ。

「何ででしょうか？」と琢磨が返した。

「お前は少し頭が固すぎる。少しは思考を柔軟に持った方が良い。」

と孝一が琢磨に言ったのだが彼が孝一に言い返したのだ。

「貴方にだけは言われたく無いですよ！数字付きでも無い貴方にね！」

と琢磨が言ったのだが、孝一はその発言に反応して琢磨を蹴り飛ばして、刀を首元に突きつけたのだ。

「お前の方こそ、何様のつもりだ？平民の分際でデカイ口を叩くな。」

と孝一が琢磨の首に刀を突き刺そうとすると達也が止めに入ったのだ。

「孝一、そこまでだ。七宝、お前のその発言は問題だ。取り消すなら今の内だぞ。」

と達也に言われた琢磨はすぐに撤回したが、孝一は少なからず腹を立てて家に帰ったのだ。しかし、その帰宅の途中で達也の諫言をして来たので孝一は怒りの矛を収めたのだ。

ステューブルチーフ ull story

2013年7月某日日本皇国関東八王子市某所魔法大学付属第一高校

この日、一学期の期末試験が行われていた。

その結果としては筆記試験は一位が達也で第二位は孝一で第三位は深雪なのだ。

そして、実技は第一位は深雪で第二位は達也で第三位は孝一なのだ。

最後の総合順位は第一位は達也で第二位で深雪で第三位は孝一なのだ。

その後、この期末の試験の結果を元に九校戦のメンバーの選出が決まったのだ。

ただ、今年の九校戦は規模を縮小しなければいけなかった。理由は簡単だ。今年の二月の遺跡調査の時に孝一の許可無く勝手に遺跡を調査したため政府と議会が魔法協会関係の国家予算を削減したからだ。

その後、孝一は姉の咲と姉の許嫁の啓に弟の紅音と夏と一緒に食堂で昼食を取って居たのだ。すると、一人の栗色に近い黒髪で腰まである長髪の少女が近づいて来たのだ。そして、彼女が話しかけて来たのだ。

「隣は良いかしら？」

と話しかけて来たのだ。彼女の名前は羽澄奏。第一高校の二年生だ。

羽澄奏は羽澄伯爵家の長女で、彼女も貴族の出身でありながら魔法師と言う貴族と魔法協会での立場は孝一達同様に少し複雑な立場にいるのだ。

「ええ、良いわよ。奏ちゃん。」

と咲が言う。ちなみに、孝一達と奏は家同士で付き合いがあり幼い頃から顔見知りでもある、言わば幼馴染でもある。奏は席に着いて食事を取り始めたのだ。そして、彼女が口を開いたのだ。

「そう言えば、九校戦が規模が縮小されるらしいわよ?」

と言ったが孝一が言ったのだ。

「仕方ねくだろ。あいつらが勝手に遺跡の調査をしたんだからよ。それに関しては俺は関係無いからな。寧ろ俺に文句を言う事は出来ないからな。」

と孝一が言ったのだ。しかし、奏が言ったのだ。

「あら、孝一は文句は言わないのかしら?」

と言うが孝一がこう返したのだ。

「そもそも論、あいつらが俺に許可を得てからすれば良かったがそれをせざるにあいつらが勝手に調査をし始めたんだ。まあ、俺が言っても言わなくても問題が無いはずだ。その件に関しては俺の中では終わった事だ。」

と孝一が言い奏は何も言わずにこの話を終わらせたのだ。その後、孝一と紅音と幼馴染

染の奏は九校戦の選手に咲と姉の許嫁の啓は技術スタツフに選ばれたのだ。

孝一はスピードシューティングに紅音はピラーズブレイクに奏は紅音と同じピラーズブレイクに出場だ。

それから、時が経ち。九校戦へ向かうバスに孝一達はバスに乗車していたのだ。その後、何も問題無く九校戦の会場に到着したのだ。

その後、九校戦の懇親会が行われたのだ。その際に孝一の婚約者の一人である一色愛梨が話し掛けたのだ。その際に色々話したのだ。

<<<<

>>>>

九校戦開始

九校戦の初日と二日目は第一高校が有利に進めたのだ。そして、孝一や紅音と咲そして、奏もそれぞれ種目で優勝したのだ。そこから、一条将輝率いる第三高校が快進撃を始めるも五分五分の対決となりそのまま新人戦に突入したのだ。そこでも、七宝琢磨と七草の双子が活躍して新人戦は第一高校の優勝になったのだ。その後、本戦が再び始まり第一高校と第三高校の互角の勝負が始まったのだ。

一方、孝一は来賓用の客席に来ていたのだ。そこには孝一の母である真夜と叔母の深夜。そして、十師族の当主に母と叔母の師匠でもある九島烈がそこにはいたのだ。そして、孝一が口を開いたのだ。

「やれやれ、いきなり呼び出されたかと思えば、珍しい面子が集まつてるみたいですね。どう言う風の吹きまじだ、お袋？」

と孝一が母に真夜に聞くが九島烈に顔を向けて説明したのだ。

「無理も無い。君を読んだのは他でも無い、私だ。今年初めの遺跡調査の件に関して君に謝りたかったのだよ。」

と言うが孝一は答えたのだ。

「それに関してはもう終わった事です。どう言い繕うがあんたらのしでかした事は変わりませんよ。それに、予算を増やすか減らすかは政府と議会が決める事です。俺は無関係ですよ。」

と言いつつその場を去ったのだ。

その後、九校戦本戦の結果。第一高校の総合優勝で決まったのだ。そして、孝一は幼馴染の奏を呼んだのだ。孝一はその際に奏に告白して奏はその告白に答えて孝一とは恋仲になったのだ。

古都騒乱、四葉継承、師族会議編

古都騒乱編 story 1

2013年9月9日

日本皇国関東州八王子市某所魔法大学付属第一高校

この日、孝一はある事情で学校の制服では無く貴族の大礼服を着用して居たのだ。この大礼服は本来は皇室又は政府若しくは議会主催の行事でのみ着用する正装なのだ。なのだが、今回は事情が違ったのだ。今日は皇太孫殿下がこの学校に来るので爵位を持ち尚且つ皇太孫殿下と面識のある孝一が対応する事になったのだ。

その為、他の生徒達は彼が制服を着て居ないので不思議に思い彼に視線を集中させて居たのだ。だが、と言う訳か当の本人は気にせず校内を歩いて学校の職員室の前に着いたのだ。そして彼は職員室に入り学校の教員と今日の事で話をしてから職員室を出たのだ。ちなみに今年も論文コンペがあり孝一の姉である咲の許嫁である五十里啓を中心に論文コンペの準備が行われて居たのだ。しかし、生徒達は孝一の着ていた大礼服を見ていたのだ。すると、目の前から七宝琢磨がやって来たのだ。その際に彼が孝一に聞いたのだ。

「先輩、学校では制服ですよ。それでは風紀委員の名に傷が付きましますよ。」
と琢磨が言うが孝一は返したのだ。

「今日は、さるお方がこの学校に来る。だから、今回は特別にこの服装で居る事を許されている。」

と言い孝一はその場を立ち去ったのだ。

それから、時間が経ち今日の学校の授業は無く皇太孫殿下が来るの時間が来たのだ。生徒達は一部を除いて緊張をしていたのだ。簡単だこの国の君主の一族である皇族で皇位継承順位第二位の人物で未来の天皇なのだからだ。すると、皇太孫が孝一に向かって声をかけたのだ。彼の名前は治仁親王。皇太子殿下の第一皇子だ。

「孝一！久しぶりだな。少しは頭が柔らかくなつたか？」

と言つて来ると孝一が返したのだ。

「殿下。今は公務です。少しは落ち着いて下さい。」

「良いじゃないか？少しくらいは？」

と彼が言うが孝一は言つたのだ。

「殿下。貴方は皇位継承順位第二位のお方なのです。少しはお立場を理解して下さい。」

と孝一が彼に進言するが当の本人は何処ふく風だ。飄々としているが孝一はため息

をつくがこれでは話が進まないので話を中断して校内を案内する事にしたのだ。

「では、殿下。今から校内を案内します。私について来て下さい。」

と孝一が治仁親王に言い彼も頷き彼についていったのだ。そして、その場にいた殆どの生徒全員が嵐が過ぎ去ったかのような顔をしていたのだ。生徒達は緊張が解けてその場で喋り始めたのだ。一方、孝一と治仁親王は話をしていったのだ。

「なあ、孝一。実はお前に伝える事があるんだ。」

「はあ、何だ。治仁。話とは？」

と孝一が聞いたのだ。実は二人はこう言った人が居ない時は名前で呼び合っているのだ。治仁親王が口を開いたのだ。

「実はな、陛下がお前に少尉の階級を与えようと言っている。この事は内閣の承認を得ている。」

と彼が言うのと孝一が答えたのだ。

「分かった。その話は承るぜ。」

と答えたのだ。そして、二人は公開授業がある場所に着いたのだ。そこで魔法の実技の授業が行われていたのだ。孝一は此処で魔法の説明を治仁親王にしていたのだ。それから時間が経って公開授業が終わり治仁親王が皇居へと帰っていたのだ。すると後輩達が孝一に集まり出したのだ。

「犬塚先輩！親王殿下とはどんな関係何ですか？」

「殿下の母君が俺の父の姉にあたるからな。殿下とは従兄弟になるんだ。」

と孝一が答えて周囲の生徒達が驚いたのだが孝一や姉の咲と弟の紅音と夏は気にせずになっていたのだ。その後、学校の下校の時間になったので生徒達は家に帰路に着いたのだ。

その日の夜。孝一は自宅の御堂の中に居たのだ。彼は一体何をしているかと言うと自分の体内に居る尾獣達と会話をしていたので。

「いきなり呼び出した上にこっちに来ちまって、悪いな。お前達。」

『やれやれ、俺様達を呼び出したんだ？』

とタヌキの様な姿をしたのが一尾の守鶴だ。

『仕方がないやよく。俺達に話が無ければ此処に呼び出さ無いやよく？』

とナメクジの様な姿をしたのが六尾の犀犬だ。

『全くですね。私達は彼と共生していますから、仕方有りませんよ。』

と体が馬で顔が海豚の姿をしたのが五尾の穆王だ。

『そうですよ。余り言いすぎは良い事は無いですよ？』

と言ったのが猫の姿をしたのが二尾の又旅だ。

『まあ、悪くねーからよ気にすんな。』

「何かを叫ぶ少女とその少女に近づくと少年がいた。」

「!?」

何か巨大生物と光の巨人が戦って居たのだ。すると、巨大生物が火球を出したのだ。その、火球が巨人に直撃したのだ。そして、その火球の直撃の衝撃で近くに居た二人は衝撃に巻き込まれたのだ。

「!?」

それを見た巨人は驚愕したのだ。そして、巨人は何か光に包まれた武器を取り出して頭上で円を描きエネルギーを武器に集中させて巨大生物に向けて光線を放ったのだ。その光線が巨大生物に当たるが巨人の手から武器が暴発して巨大生物を中心に爆発をしたのだ。すると、その爆発を中心に凄まじい大爆発が起きたのだ。

爆発と爆発の煙が収まるとそこに一人の少年が立っていた。

「う、う、」

「ハア、ハア、ハア。」

と息を切らしながらも立っていたのだ。すると、上空から何か光が降りて来て孝一は左手を上げてその光が左手に持っている機械を通るとそこから一枚の人に似た物が描かれているカードが出て来て、孝一はそれを腰にある機械に閉まって周囲を見渡したの

だ。すると、孝一は

「う、う、あーーーーー！」

と何処か悲しげな悲鳴を上げたのだ。それ同時に孝一は目を開けたのだ。体を起こして口を開いたのだ。

「また、あの夢か。もう、失った物は戻って来ない、二度と。」

と言いつつ何処か悲しげな顔をしたのだ。

「後、もう少しで論文コンペだ。気分を変えよう。」

と言いつつ孝一は家にある道場に向かったのだ。

古都内乱編 story 2

2013年9月25日

この日、孝一は校内を歩いてきた。すると、前からエリカが歩いて来たのだ。すると、エリカが孝一に対して喋りかけて来たのだ。

「ねえねえ、孝一に頼みたい事があるんだけど良いかな？」

エリカが孝一に聞いて来たのだ。しかし、孝一は少し不安が頭によぎったのだが気にせず聞くことにしたのだ。

「何だ、エリカ？頼みたい事は？」

孝一がエリカに聞いたのだ。そして、エリカが答えたのだ。

「孝一つて、京都の事、詳しいんでしょ？ちよつと、京都の案内をして欲しいの、お願い？」

エリカが孝一に頼んで来たのだ。この時、孝一は自分の予想の中率の高さを恨んだのだ。しかし、孝一は悩んだのだ。簡単な話だ。孝一にとって京都に行くとは色々厄介な事になるからだ。だが、恋人のエリカの頼みでもある為、断れないと言う理由もある。そして、孝一は答えたのだ。

「分かった。案内をしよう。但し、俺の目の届く範囲と提案した場所以外はお断りだからな？それと俺の都合もあるから休みを確認したら後日、追って伝える。」

孝一がエリカに言い彼女が言ったのだ。

「ええ、分かったわよ。今年の論文コンペの会場とその周辺よ。お願い出来るかしら？」
エリカが答えて孝一は頷いたのだ。そして、数日後。

2013年10月6日午前9時

関西西州京都市京都駅

孝一はエリカと同級生の吉田幹彦と西城レオンハルトと柴田美月ら六人で京都に居たのだ。そして、彼らは会場とその周辺を中心に孝一は案内をしたのだ。

それから、3時間が経ち正午になったので全員は昼食を取る事にしたのだ。すると、一人の男性が近づいたのだ。

「やあ、貴方達は第一高校の生徒さんだね？」

孝一達は声のした方へ顔を向けたのだ。そこには天使のような容姿をした少年が立っていた。そして、彼が口を開いたのだ。

「初めまして。僕は九島光宣。魔法大学付属第二高校の一年生だよ。」

光宣が自己紹介をして来たのだ。すると、孝一が口を開いて言ったのだ。

「お前が、九島光宣だな？リーナから話を聞いている。俺達に何か用か？」
すると、光宣が口を開いて言ったのだ。

「僕も祖父から貴方の事を聞いています。リーナは元気ですか？」

光宣が孝一にリーナの事を聞いて来たのだ。そして、孝一はその事を答えたのだ。

「ああ、リーナは元気にしてるよ。まあ、そっちが原因で俺達の所で過ごす事になつてるがな。」

孝一が言うのと光宣が答えたのだ。

「それに関しては僕達の責任でもあるから謝罪するよ。貴方と言いつても色々問題になりますからね。それに僕はこの後、用事があるからこれにて話を終わらせてもらおうよ。」

と光宣が言うのと孝一が頷いて答えたのだ。

「ああ、その方が良いかもな。俺の方も政府や皇国議会から言われかねんからな。」

孝一が言い光宣は

「では、これで。」

と言い立ち去つたのだ。そして、孝一達は光宣が見えなくなるまで彼を見ていた。そして、レオと幹比古が孝一に聞いたのだ。

「なあ、さつき問題が起きるって言って言ったが何かあるのか？」

「確かに、なんでそんなに君は以前から魔法協会や十師族と距離を取ってる様に見えるから。」

そして、孝一はそれに答えたのだ。

「まあ、俺や姉貴達は貴族の生まれだからな、政府と魔法協会の取り決めで貴族に関しては政府の管轄になるからな。だからこそ、俺達は基本的には政府側の人間になつてしまふからな。色々面倒な事になるんだ。まあ、そろそろ時間だ。切り上げるぞ。」

と言つて孝一達は関東州に戻つたのだ。それから数日後、孝一は学校側から京都の会場と会場周辺の立地や警備の配置を決めなければならないからだ。そして、孝一は後日、学校が休みの日に再び京都に向かつたのだ。

2013年10月13日午前10時25分

日本皇国関西州京都市京都駅

孝一はこの日、再び京都に来ていた。そして、論文コンペの会場とその周辺を見て周り警備の配置をどう報告するかを考えていた。すると、前から第三高校の生徒であり十師族の一条家の次期当主、一条将輝が歩いて来るのに気付いた。そして、向こうもどうやら自分に気付いたのか此方に話しかけて来たのだ。

「犬塚孝一。お前も警備の配置確認か？」

と彼が言つたので孝一は答えたのだ。

「ああ、そうだ。」

手短かに孝一は答えたのだ。そして、孝一は将輝に聞いたのだ。

「一条。お前は貴族と魔法協会の対立をどう思う？ 答えてくれ。」

と孝一に聞かれた当の将輝本人は答えたのだ。

「ああ、この対立はどの道、解決をしなければならぬ。長い道のりだがな。お前は どう思ってるんだ？」

彼に聞かれた孝一は自分の胸の内を語ったのだ。

「俺もどうにかしなきゃいけないーのは分かっている。しかし、あいつらは何だ！ 何故、我ら貴族があつたの、成り上がりの奴らに頭を下げねばならぬのだ！ 少しは自分達の横柄な態度を改めん限り、俺達は未来永劫、相反する存在としていがみ合いを続けるのだぞ！」

孝一は将輝に言ったのだ。すると、それまで黙っていた将輝が口を開いたのだ。

「確かにそうだな。俺達も少しは態度や自分達の考えを改めて貴族に接し無ければろくな事にならないからな。」

将輝が言うのと二人は京都市内を歩いて居たのだ。すると、孝一は何か人が路地裏に入ったのを見つけたのだ。しかし、その服装は本土では見ない服装だったのだ。

「一条。見たか？」

孝一が将輝に聞いたのだ。

「ああ、余り見ない服装だな。しかも、この時期で偉く薄着だな。」

将輝が答えたのだ。しかし、孝一はその服装に見覚えがあったのだ。

「あれは、恐らくカトヴァーナ系の人間だな、ありや。」

孝一は言ったのだ。それを聞いた将輝を口を開いたのだ。

「カトヴァーナ系だと？何故、連邦構成国の大公国の人間がここに居るんだ？」

「一条。余り追いかけても意味がないぞ。ここで奴らを刺激しない方が良くぞ。」

孝一が言ったので、将輝もそれに賛同したのだ。

「そうだな。此処は追いかけない方が良いな。」

二人はその場を離れたのだ。二人はそれぞれ金沢市と東京特別市に帰って行ったのだ。その翌日、孝一は学校に例の人物の事を伏せて報告をしたのだ。それから数日後。

2013年10月20日午前8時30分

この日、まさに論文コンペが行われる当日である。その後、各学校が順番にそれぞれの発表をしたのだ。まず、午前の部が開かれてから、その後、昼休憩を挟んで午後の部が開かれたのだ。

最終的に審査が行われる事になったのだ。結果、第二高校の優勝になったのだ。

その日、夜。孝一はある路地裏に居たのだ。ある目的で此処に居たのだ。その目的とは、以前、京都市内で見えた連邦構成自治体の大公国の人間を始末する為に居たのだ。路

地裏を歩いていたら目的の人物を見つけたのだ。そして、孝一は魔人態になってその人物に近づいたのだ。

「よお。お前ここで何してんだ？もし、よかつたら俺と遊ぼうぜ？」

と緑髪の男に声を掛けたのだが、男は驚いて孝一に言ったのだ。

「お前は、何者だ！何処から現れたのだ！」

すると、孝一は答えたのだ。

「お前に答える義務は無い。お前の目的は大方、反乱を起こす事だろ？カトヴァーナ人。

まあ、お前を此処で始末させて貰う。」

すると、孝一は刀を振り上げてそのまま緑髪の男を刀で斬殺したのだ。そして、その場で男の死体を燃やしたのだ。そして、孝一はこれから起きる反乱を予期して行動を開始したのだ。まず、自宅にその事を自分の父に報告してなるべくこの事を秘密裏に事を運ぼうとしたのだ。

四葉継承編 story 1

2013年12月22日AM10:00 日本皇国首都東京特別市市内某所

この日、孝一はリーナとエリカと三人で一緒にデートをする日だった。ちなみに花音と奏は家の事情で今日は来れなかったのだ。そして、三人は東京特別市にあるデパートに来ていたのだ。歩く事、十分が経ち目的のデパートに着いたので三人はデパートに入ったのだ。

三人はデパートで買い物をしてから二時間後昼の12時になったので三人はデパートのフードコートで食事を取る事にしたのだ。そして、三人はそれぞれがご飯を選んで食事を取ったのだ。すると、孝一が口を開いたのだ。

「そうだ。俺と夏は明後日は学校を公欠になっているからな。」

「え!? どうしてなの?」

エリカが孝一に聞きそれに続きリーナも聞いたのだ。

「いきなりね？ どうしてなの？」

孝一は二人の質問にこう答えたのだ。

「その日、政府から七武海の最後のメンバー選定の会議があるんだ。仕方ないからな。」

「まあ、仕方ないわよね。でもいきなりね。どうしてそうなったのかしら？」

エリカはそう言つて孝一に聞いたのだ。そして、孝一はエリカの質問に答えたのだ。

「まあな、いい加減そろそろ最後の一人を選定をしなきゃいけないからな。だが、皇国政府としては魔法協会との力関係を均衡させたいという意図だろうな。」

「それに関しては仕方ないわよ。でも、大丈夫かしら？ でも、孝一のことだから大丈夫だ

とは思うけど。」

孝一の発言を聞いてリーナは心配そうに言うが孝一は気にせずリーナに言ったのだ。

「安心しろ、リーナ。そう簡単に俺は負ける様な柔な実力じゃないからな。あまり心配はするな。」

それを聞いたリーナとエリカは安心した表情をして孝一に言ったのだ。

「ちゃんと会議に出席してよね。孝一。」

「孝一。少しは会議には落ち着いて自分の考えを述べてね?」

それから数時間後、三人はデパートで買い物デートを行ったのだ。

2013年12月24日AM9:25 日本皇国首都東京特別市市内某所

それからデパートデートから二日後。孝一と夏は皇国政府が所有しているとある皇国政府のビルの地下にやって来たのだ。そして、二人は警備員の案内で政府の七武海選任の会議が行われる会議室にやって来たのだ。そこには内閣と軍の代表の数人と孝一と夏以外の七武海のメンバー四人が居たのだ。そして、その中の一人で白い羽のような物をつけた黒い帽子を被り背中に本人と同じ位の長さの刀を背負った男が口を開いた

のだ。

「全く。お前達は少し遅すぎるのでは無いのか？」

「ふん。珍しい事もあるんだな。鷹の目。気まぐれで余り出て来ないお前が出て来るとはな。」

そう言われた孝一はその人物に言い返したのだ。そして、鷹の目と呼ばれた男はジュラキユール・ミホークで孝一と夏と同様に皇国七武海の一人で世界最強の剣士で孝一とは常にその座を争っているという関係だ。言い合いをする二人に割って入る人物が居たのだ。

「少しは、場所を考えたらどうだ？」

フードを被って仮面を付けた金髪の少女が言うとな彼女に続いてもう一人、フードを被った骸骨の姿をした者が口を開いたのだ。

「仕方あるまい。彼等とて忙しいのだからな。遅くなるのは当然だ。」

金髪の仮面の少女の名前はイビルアイで骸骨はアインズ・ウール・ゴウンなのだ。するともう一人アインズ同様骸骨なのだがそれはヤギの角を生やして犬科の頭の骸骨がエリアス・アインズワースが口を開いたのだ。

「本当に遅くなるのは仕方無い事だからそろそろ会議を始めようじゃ無いか。」

アインズワースがそう言うのと孝一と夏は自分達の席に座ると同時に会議が始まったのだ。そして、軍の代表が立ち上がり話し始めたのだ。

「本日はお集まり頂きありがとうございます。私は日本皇国陸軍少佐を務める宇佐美左京です。今回の会議の司会及び進行を担当させて頂きます。では、本日は七武海のメンバーの選任をする為皆様には誰が適任かを推薦又は賛同の方をお願いします。」

司会進行の軍人である陸軍少佐の宇佐美左京が自己紹介をして今回の会議の議題を口にしたのだ。するとジュラキユール・ミホークが口を開いたのだ。

「そうであれば俺は傍観を希望させてもらう。誰が七武海に加盟しようが関係無い事だからな。」

「俺も別に誰でも良いぜ。此処に加盟する奴は大概は頭の狂ったイカれた奴かその怪物三匹位だからな。」

ミホークに続き孝一が口を開き自分の意見を言ったのだ。すると、エインズワースがある事を言ったのだ。

「じゃあ、魔術師のミハイル・レンフレッドは如何かな？あの男なら性格には少し難があるが信頼できるよ？」

「なら、ターニャ・フォン・デクレチャフは如何だ？あのチビは中々の強さを誇っているぞ？」

イビルアイが一人の人物を推薦したのだ。すると、夏がイビルアイに言ったのだ。

「確か、あのクソチビガキ、性格は気難しい上合理的過ぎる所があるからな？俺は少し嫌なんだよな。」

夏が言うが政府側の代表の人間がある事を口にしたのだ。

「実は、ある者が皇国七武海に加盟したいと言う話があるのです。」

その話を聞いて七武海のメンバー全員が驚いたのだ。そして、孝一は口を開いたのだ。

「とんだ物好きが居たもんだな。で？誰なんだ、その物好きの頭の狂ってイカれた奴は？」

「はい。その者の名前はボア・ハンコックです。ですので彼女を七武海のメンバーに私共皇国政府としては推薦したいのですが、皆様はどう思いますか？ご意見をお願いします。」

政府の代表の発言を聞いて七武海のメンバーの面々が驚愕しながらも個々の発言をしたのだ。

「あの者が七武海に加盟しようとするのか？ 全くあの女の考えている事は良く分からんな。しかし、俺としてはどっちでも構わない。」

ミホークが言い、続いて孝一と夏が口を開いて喋り始めたのだ。

「俺は鷹の目に賛成だ。どのみち七武海メンバーが誰になろうが構わないからな。」

「俺も兄貴と鷹の目に賛成するぜ。あんまり誰かって議論を長引かせるよりもマシだと思っぜ？」

そして、それまで静かにして居たアインズが口を開いたのだ。

「確かに、我等と実力の配分や人と我等人外の差を広げる訳にはいけないからな。」

「まあ、僕としては君達や魔法協会が口出しをして来なければ基本的には賛成だよ。」

「我々は人智超えた存在。人間からしたら恐ろしい物だからな。少しでも我々の力と人間の力を均衡させたいのだろうな。まあ、私も誰がなろうが関係無いのだがな。」

アインズとエインズワースとイビルアイが共にそう言つて特段反対意見を述べずに言つたのですと軍の代表である宇佐美が立ち上がり喋り始めたのだ。

「では、七武海最後の一人はボア・ハンコックでよろしいですか?」

と宇佐美がその場に居た者全てに確認するとその場に居た者全てが頷き最終的にボア・ハンコックが七武海最後のメンバーに選任されたのだ。

「それと、もう一つ。宜しいでしょうか?」

すると、宇佐美が政府と七武海の面々に対して確認をしたのだ。そして、イビルアイ

が宇佐美に聞いたのだ。

「何だ？まだ言いたい事があるのか？」

「はい。ボア・ハンコックが七武海加盟に際して彼女が反乱を起こそうとした首謀者の身柄を手土産にその者の身柄の交換に加盟をしたいと申しているのですが。」

宇佐美がそう言うのと孝一がその発言に反応したのだ。

「反乱の首謀者だと？どこの奴だ？教えてくれ？」

「はい。名はバダ・サンクレイ。旧カトヴァーナ帝国の現在は日本皇国の連邦構成自治体の特別構成国のカトヴァーナ大公国の旧陸軍大将です。」

宇佐美のその発言を聞いて孝一は驚いたのだ。

「まさか、俺の予想が当たっていたとはな。」

「ほお、予想とは何だ？雷帝？」

孝一の発言を聞いてアインズが孝一に尋ねたのだ。

「ああ、実は今年の10月の終わりにカトヴァーナ大公国の人間を京都で見かけてな妙な胸騒ぎがしたんでそいつを追いかけたが見失ってな。まあ、大方何かしらの暴動か反乱だがその時は不確定要素しか無かったからな。その時は親父には報告したが政府と七武海の方にはまだ粗方の証拠が集まってからの方が良いなと思ったから事後であったが報告しておくぞ。」

「そうなのですか？ですが、証拠が無い以上報告が遅れるのは当然ですので今回は致しか無いでしょう。カトヴァーナ大公国はかつて皇国と祖国統一戦争の際に朝鮮及びジユラ・テンペスト大公国を除く現在の由古丹州、山城州、瑞穂州、秋津州、トリスティン王国、ロートレアモン騎士王国、アティスマータ新王国、アルザーノ帝国と連合軍を組んで皇国と戦争をしましたが同盟国及び友好国の英米仏印並びに日本皇国連邦加盟国そしてアジア・中東諸国の支援によって最終的には皇国の勝利に終わりそれらを由古

丹州、山城州、瑞穂州、秋津州は連邦構成道州としてカトヴァーナ帝国、トリステイン王国、ロートレアモン騎士王国、アティスマータ新王国、アルザーノ帝国は特別構成国の大公国として編入しました。」

孝一と宇佐美の発言を聞いてエイズワースが口を開いたのだ。

「しかし、彼等も今になってなのかな？ 確か、彼等には高度な自治権を認められている筈だよな？ 其処だけが気がかりだね。」

「ああ、そうだ。日本皇国憲法の条項で高度な自治権が認められているし皇国議会に議員を選出が認められているからな。」

エイズワースの発言に孝一が追隨して解説したのだ。すると、宇佐美が口を開いたのだ。

「そろそろ、12時です。昼食を取ってから続きをしましょうか？」

「「「構わん。」」」

宇佐美の発言に一同が同意したのだ。

2013年12月24日AM15:46 日本皇国東京特別市市内某所

それから六時間後。十二時から昼食休憩を挟んでからAM13時からAM15時までの二時間程会議を開かれたのだが、その際に七武海のメンバーに皇国政府からそれぞれ

れ今回の会議までの問題点を指摘されるが当人達はそれぞれがその指摘された問題点を受け入れたのだ。そして、孝一と夏は政府のビルから出て来たのだ。すると、孝一がビルの方に振り返って口を開いたのだ。

「遂に、時が動き始めたな。これから始まる厄災をどのように対応するが楽しみだ。」

「兄貴。そろそろ家に帰ろうぜ。此処で長居は無用だぜ？」

「ああ、そうだな。長居は無用だな。家に帰るぞ。夏。」

すると、夏が孝一に言って、孝一がそう言って踵を返して帰路に経ったのだ。

それから二十分後。二人は自分達の家の近くまでに来て居たのだ。すると、自分達が歩いて来た反対側から第一高校の制服を着た集団が歩いて来ている事に気づいたのだ。そして、孝一と夏が歩いて来ているのに気がついたのだ。よく見ると咲と達也達のいつものメンバーが居たのだ。そして、向こうの方も孝一と夏が存在に気付いて近づいて来て話しかけたのだ。

「二人共、お疲れ様。会議の方は如何だった？」

「ああ。終わったぜ、七武海のメンバーが決まった。皇国政府が明日の午前定の例会見で発表される予定だけどな。後、そいつらが何で此処に居るんだ？」

孝一と夏の姉である咲が話しかけて孝一が答えのさ。すると、紅音が孝一の質問に答えたのさ。

「ああ。今日の昼に親父からメールが来て家でクリスマスパーティをするから同級生を連れて来ても良いてメールに書いてあったからな。」

紅音が答えると孝一が頭を少し抱えたのさだが気にせず口を開いたのさ。

「まあ、親父の事だどうせ思い付きで言い出したんだらうな。家までもう少しで家に着くからな。行こうぜ。」

そう言つて彼等は孝一達、犬塚四姉弟の家に向かったのさ。そして、それから数分後

に彼等は驚く事になるのだ。犬塚四姉弟の家の事だ。少し歩いてからレオが話しかけて来たのだ。

「なあ、まだ着かないのか？結構歩いてる気がするんだけどよ？」

「そう言えばレオの言う通りだね。如何してなのかな？」

レオに続いて幹比古が聞いて来たので孝一が答えたのだ。

「嫌。実はもう着いているんだ。左隣に大きな柵があつてでっかい庭みたいなのが見えるだろ？」

孝一が言うのと鋼が答えたのだ。

「うん。見えるというか目の前のこの公園みたいな所だよね？」

「実は此処が俺達の家だけど？」

孝一の発言に犬塚四姉弟と五十里啓そしてリーナとエリカと花音と奏以外の面々は驚きの余り固まり一部のメンバーが言い始めたのだ。

「え、此処が孝一さん達の家なのですか？いくら何でも広すぎませんか!？」

「ちよつ、広!」

上がほのかで下が英美だが二人の言葉はまさに犬塚姉弟の付き合ひのある者以外の思いを代弁して居た。すると、美月が驚かなかつたエリカに聞いたのだ。

「そう言えばエリカちゃん、驚かないのね？」

「そうよ、美月。私は時々、来てたからね。最初は驚いたけど今は慣れたわよ。」

エリカと美月の会話が弾みかけたので孝一が割つて入る。

「もう少ししたら家の門に着くから行くぞ。」

孝一がそう言うのと歩き始めたのだ。それから歩き始めてすぐに大きな門にたどり着いたのだ。すると、大きな門が開いたのだ。そして、大きな邸宅へと向かい扉の前に着くと扉が開いたのだ。中から一人の男性が出て来たのだ。

「ようやく帰って来たな。そろそろ帰って来ると思って居たぞ。」

「全く。いきなり出て来るなよ親父？」

孝一の発言に同級生の面々が驚いたのだ。そして、総一が喋り始めたのだ。

「そうそう、家に入ろう。君達も入りたまえ。君達は客人だからね。案内をしよう。」

そして、孝一達は大きな部屋にやって来たのだ。そこは宴会室で謂わば犬塚公爵家にとって大事な催しや祝い事がある時に使われる部屋なのだ。すると、部屋の真ん中に置かれた机と椅子に四人の男女が座っていた。一番奥に座っているのが犬塚正一で犬塚

公爵家の前頭主で現在は隠居して衆議院議員と大蔵大臣を務めている。向かつて彼の右隣りに座っているのが安倍晴子で正一の妻でもある。晴子の隣に座っているのが犬塚姉弟の末っ子である犬塚信乃だ。そして、晴子の近くに座っているのが犬塚真夜、旧姓四葉真夜なのだから達也と深雪を除く孝一達と同級生は緊張して居たのだが、孝一は彼等に対してある事を言ったのだ。

「お前達、そう緊張するな。この方々は俺達の祖父母と両親だ。大丈夫だからな。」

「そう言われても、結構緊張するからね。でも、君達は今思えば貴族の生まれだってようやく実感が湧いたよ。」

孝一の言葉に幹比古が言うのと孝一がこう返したのだ。

「幹比古。それは、如何言う事だ?」

「嫌、なんと言うか。特に孝一、君が貴族としての威厳が余りにも無いからそう思えてしまふのかな?」

「ああ、昔からよく言われるよ。全然貴族らしく無いってな。でもそっちの方が気が楽だから良いんだけどな？」

すると、正一が会話の間に入り喋り始めたのだ。

「君達も疲れただろ？遠慮せずに座りたまえ。」

「「は、はい。」」

正一の言葉を聞いて一同は席についたのだ。そして、使用人達が食事が用意され一同の前に置かれて食事が始まったのだ。それからすぐに正一が孝一達の姉弟の同級生にある事を聞いたのだ。

「そうそう、孝一達は学校ではどんな様子で過ごしているんだね？」

「えっと、至って普通に過ごして居ますよ。それに真面目に授業を受けて居ますよ。」

「そうかこの子達、特に孝一はある意味ヤンチャ坊主だからな。問題に巻き込まれるかな、少し心配だからな。」

そう答える鋼が答えたのだ。それを聞いた正一が孝一の方を見ながらそう言ったのだ。すると、孝一が正一に対して言ったのだ。

「祖父さん、俺でもそこまでヤンチャはしないぞ。そもそも、問題に巻き込まれてると言うよりも達也が勝手に問題に首を突っ込んでるだけで俺はそれに巻き込まれてに過ぎないからな。」

孝一がそう言い返して達也の方に視線を向けたのだ。しかし、当の本人である達也はどこ吹く風である。すると、いきなり晴子が喋り始めたのだ。

「全く、孝一。貴方が暴れ過ぎだからそう言われるのですよ？少しは反省しなさい。これだから正一にそう言われてしまうのですよ？」

「うっ。返す言葉もありません。すみません。」

晴子にそう言われて言い返す言葉が無かったので孝一は謝罪するしか無かったのだ。それから、二時間程食事やクリスマスケーキを取ってからエリカと花音と奏以外はその場で解散したのだ。エリカと花音と奏は親の許可を貰って犬塚公爵家に泊まって行く事になったのだ。孝一は母の真夜の部屋に来ていた。すると真夜が孝一に問いかけたのだ。

「珍しいわね、孝一。貴方が用も無ければ私の部屋に来ないのの如何したのですか？」

「ああ、ちよつとな。今年の年末年始は四葉家の本邸に行く。」

真夜の問いに孝一は答えたので真夜は驚いたのだ。

「珍しいわね。今まではあれ程、四葉家に行く事を嫌がって居たのに今年は何こうとするのね。」

「ああ、今日の七武海の会議である情報が出て来てなそれを四葉家を通して魔法協会と

十師族を伝えたいからな。良いか？お袋。」

真夜の返答に孝一がそう答えて真夜が続ける。

「ええ良いわよ、孝一。でもあまり無茶しちやダメよ？孝一？」

「ああ、分かっているぜ。お袋。あまり無茶はしないぜ？」

そして、孝一は今年の年末年始は四葉家に行く事になったのだ。

四葉継承編 story 2

2013年12月25日PM10:24 日本皇国関東州八王子市市内某所

この日、国立魔法大学附属第一高校の二期期の終業式だ。そして、今日から第一高校は冬休みになるのだ。その為、全国にある国立魔法大学付属高校は終業式の日には授業が無く生徒達は午前中で帰る事になる。一方、孝一は気にせずに第一高校の正門前に立っていたのだ。すると、孝一の右肩の辺りで突如煙が出てその煙が無くなるとそこには小さな九本の尻尾を生やした狐が居たのだ。

「やれやれだ本気かお前？ 四葉家の本邸に行くのは？ お前は彼処に行く事だけは極端に嫌がってたからな。」

「ああ、そうだな。だが、今回は事情が事情だ。少し、伝えたい用件があるんでね。そうでも無い限り四葉家に行くのは嫌なんでね。お前も少しは分かってくれるな？ 九喇嘛。」

九喇嘛と呼ばれたのは尾獣の一体で孝一にとっては無くってはならない戦闘での相棒の一体である尾獣、九尾の九喇嘛である。孝一と尾獣達は昔から強い絆と信頼関係を持っている為いざとなればお互い協力して戦う事が出来る程の信頼関係と絆を結んでいるのだ。孝一は小さい声で九喇嘛と会話をしていたらいつものメンバーが来る心配がしたので九喇嘛に言ったのだ。

「九喇嘛。そろそろ戻れ。あいつらが来たからな。お前が居るとややこしくなるでね。」

「ああ、分かったぜ。そろそろ戻るとするか。」

九喇嘛がそう言って煙を出して戻っていたのだ。すると、エリカが話しかけて来たのだ。

「孝一、待った？今、皆集まった所だから。」

「ああ、大丈夫だ。俺もそんなには待っていないからな。さてと、行くとしようか。」

すると、達也が孝一に喋りかけたのだ。

「しかしどう言う風の吹きまじだ、孝一。四葉家に来るとは、お前は四葉家の本邸がかなり苦手だったはずだが？」

「ああ、そうだよ。俺だつて用が無けりや、あんな陰気臭くて嫌な奴らしか居ない所に好き好んで行くのは嫌だからな。そもそも俺だつて基本的には行きたいのは山々だが皇室の年賀行事や貴族関係の奴で忙しいんだ。少しは察してくれ。」

孝一が達也にそう返すと亜夜子が会話に入つて来たのだ。

「それもそうですけど、用件とは一体何なのですか？」

「あー、それに関しては向こうに行くまでは言えないな。少し厄介な事になる可能性があるからな。すまないな。」

「そうですか。」

亜夜子が孝一に対して質問したのだが孝一はその質問に対して答えをはぐらかしたので亜夜子は残念そうな顔をしながら孝一を見つめたのだ。そして、四葉兄妹と七草の双子姉妹、レオ、幹比古、ほのか、雫、鋼、エイミー、自分達の家の方角に向かつて帰って行つたのだ。そして、残つた犬塚四姉弟とリーナとエリカと花音と啓そして黒羽姉弟はそのまま犬塚公爵邸に向かつて歩き出した。それから、十数分後。犬塚公爵邸の門の辺りまでつくると一人の金髪の長髪の少女が居る事に気付いたのだ。

「何をして居る、愛梨？」

「実は、お父様が貴方の家に泊まるように言われたの。だから、貴方のお父上には伝えてあるみたいだから大丈夫よ？」

「そうか、親父殿がそう申されたのか。後で、親父に少し文句を言っておくか。」

家の門の前に居た恋人の一色愛梨に孝一が話しかけて何故、自分の家の門の前に居た理由を聞いたのだ。そして、愛梨は孝一の質問に答えて孝一は納得して孝一は自分の親に文句を言おうと思ひ家に入ろうとしたのだ。

「お前らそろそろ家に入るぞ。いい加減入らねーとお袋が何かしら言っただけで来るからな。」

孝一そう言うのと門を開けて全員が公爵邸の敷地に入ったのだ。そして、咲はリーナとエリカと愛梨と花音及び奏そして亜夜子達と仲良くお風呂に入ったのだ。そんな中、全員がお風呂に入って居ると風呂場の扉が開いたのだ。そこから姿を現したのが咲と孝一達姉弟の母親である真夜が入って来たのだ。

「お母さん、珍しいね。最近はあまり一緒に入ることは殆ど無かったからね。」

「そういう時もあるわよ、咲。それにエリカさんと愛梨さんに孝一との関係を少しお話がしたかったのね。良いかしら？」

「良いよ、お母さん。一緒に久しぶりに入りたいしね。それと確かに孝一との関係をどこまで進んでるのか聞きたいしね。」

咲の質問に真夜がそう返して咲は納得してエリカと愛梨の方に視線を向けたのだ。すると、咲の視線に気付いた二人が反応した。

「えっと、その孝一とはいつも学校では授業の時以外は一緒に居ますけど。孝一はいつ

も人目を気にしてきちんと距離を取ってくれるから良いんです。」

「私は金沢に居るので孝一とは電話以外では会話しないのですが、孝一は優しく接してくれるは。」

二人は慌てふためいて話をはぐらかして話を逸らそうとしたのだ。その後、彼女達は湯船の中で話を盛り上がって話が長くなったのだ。一方、その頃男性陣はそれぞれの過ごし方で過ごして居た。文弥は啓に学校の課題を教えてもらって居たのだ。

「文弥君。此処はこうやって、こうするんだよ。」

「ありがとうございます。五十里先輩と咲さんに教えてもらおうと孝一兄さん達とは違つて分かりやすいです。」

「それを本人達が聞いたら怒りそうな発言だね。まあ、あの三人は教えるのは苦手だからね。」

文弥の発言に啓が少し呆れながらも文弥の発言に同意したのだ。一方その頃、紅音と夏は道場で体術の組み手を行なって居たのだ。

「はああ!!」

「よつと、これでどうだ!」

紅音と夏は互角に組み手をして汗を流したのだ。そして、孝一はと言うと邸宅内にある御堂の中で瞑想をして居たのだ。すると、末弟の信乃が御堂に入って来たのだ。

「兄ちゃん。皆、風呂から出たけどどうする?」

「ああ信乃、悪いが此処に案内してくれないか? エリカと愛梨そして文弥と亜夜子に少し会わせたい奴等が居るんだ。頼めるか?」

「うん、分かった。連れて来る。」

信乃がそう言つて御堂から出て行つたのだ。すると、尾獣の一体である一尾の守鶴が出て来て孝一に話しかけたのだ。

「おいおい。まさかとは思うがあの人を俺様達に会わせるじゃないんだろうな？」

「ああ、そうだ。守鶴。会わせるしお前達の事を知つてもらわなはいけないからな。お前がどう言おうがそうするつもりだ。大人しく会う事だな。」

「まっ、どのみち俺様達の存在がいずれは彼奴らにバレるからな。同て事ないけどな。じゃ、俺様は戻らせてもらうぜ。」

孝一が守鶴の問いにそう答えたて守鶴がそう返してそそくさと戻つて行つたのだ。それから、数分後。信乃が咲達を連れて来たのだ。

「兄ちゃん。連れ来たよ。」

「悪いな信乃。連れて来てもらつてな。お前はもう部屋に戻つて寝てて良いぞ。」

「うん、分かった。」

孝一は信乃に対してそう言うと言乃がそれに了承して部屋に戻っていったのだ。すると、咲を初めとした紅音と夏達、姉弟と孝一の恋人達が御堂に入って来たのだ。すると、エリカが孝一に話しかけたのだ。

「ねえ、孝一。何で私達を此処に呼んだの？私達に会わせたい人達って誰なの？」

「確かにそうね？その人達は何処に居るのかしら？」

エリカの言葉に続いて愛梨がそう言うと言乃が口を開いたのだ。

「御二方。言いたい事は分かりますが気持ちを抑えて下さい。」

「姉さん。言う通りですよ。でも、確かにそうですね孝一兄さん。その人達は何処におられるのですか？」

亜夜子に続いて文弥が喋ると孝一に対して尋ねると孝一が答えたのだ。

「大丈夫だ。その答えはすぐに分かるからな。待っている。」

孝一がそう言うのと瞑想を始めるとこの場に居る全ての者達にサイオンとチャクラを包み込んだのだ。すると、全員が何か催眠術でも掛かったかのように眠りについたのだ。そして、孝一もそのまま自分の精神世界に行く事にしたのだ。

そして、どこか無機質なコンクリートの場所に孝一はやって来たのだ。すると、孝一が奥の方に歩き始めたのだ。

奥の方の部屋に着いた孝一は尾獣達と話そうとすると孝一が歩いて来た方から声が聞こえて孝一は其方の方に体を向けたのだ。そして、いつものメンバーが孝一の居る部屋にやって来て孝一がいる事に気付いてその一人であるエリカが孝一に話しかけたのだ。

「孝一、此処に居たの？探したんだからね？後、此処は何処なの？それに私達に会わせた人達は何処に居るの？」

「すまないな、エリカ。此処は俺のチャクラ世界だ。」

「チャクラ世界？」

「ああ、分かりやすく言えば俺の体内にある精神世界と言えば分かりやすいな。それにお前達に会わせたい奴らの居る場所に着いているぞ。」

「え!?!もう着いて居るんですか?」

「ああ、そうだぞ?」

エリカの問いの全てに孝一はそう答えると文弥が驚いたのだ。孝一は文弥の反応を見て少し微笑むと何処かともなく声が聞こえて来たのだ。

「おいおい、いつまで俺様達を放って置くんだ?そろそろ待ちくたびれたぞ?」

「すまないな。守鶴。そろそろお前達を紹介するでしょうか。」

「このでかい狸は何!? ってか、なんでこんなにもでかい動物達が居るのよ!」

孝一がそう答えると守鶴と呼んだ大きな狸が現れたのだ。否、正確に言えば守鶴を含めた九体の動物が現れて愛梨が驚きの声を上げたのだ。すると、咲がエリカ達、四人に説明をしたのだ。

「彼等は尾獣っていう、複数の尻尾を持った動物なのよ。」

「尻尾を持った動物? そんな動物が何で孝一さんの精神世界に居るのですか?」

「まあ、尾獣の場合はそのまま状態では人間が尾獣の力を使う事が出来ない。だから、尾獣を人間に体内に封印してその力を使用するんだ。そして、その尾獣をその身に宿した者を人柱力と呼んでいてな。しかもこれは代々、人柱力の役目をやっていたのが俺達犬塚公爵家な訳だ。」

咲の説明に亜夜子が聞くと孝一がそう答えたのだ。すると、エリカが孝一に聞いたのだ。

「じゃあ、孝一は昔から彼等と一緒に居たわけなの？」

「ああ、そうだ。だが、俺はコイツらの事を一度も憎いとは思った事が無いんだ。俺とつてコイツらとは仲間であり友でもあるからな。コイツらも俺が望む時や必要な時には力を貸してくれるからな頼もしい奴らさ。」

「そうなのね。だから漸く理解できたは。貴方が力を行使しない理由が今はつきりと分かったは。」

「どういう事だ愛梨？」

「貴方は自分の力の大きさを知っているだから貴方は自分の力を出来るだけ使わずに他の人の成長を願ってその事をしていたのでしょ？」

「ああ、愛梨の言う通りだよ。俺は強大な力を持ちすぎている。だから俺は無闇矢鱈に力を行使したり魔法や能力を発動を控えているんだ。」

エリカと愛梨の質問と言葉に孝一がそう答えたのだ。そして、孝一は口を開いたのだ。

「そうだ、お前達。自己紹介をしてもらおうか？」

「じゃあ、俺様からだな。俺様は一尾の守鶴だ。」

「私は二尾の又旅です。」

「僕は三尾の磯舞だよ。」

「俺は四尾の孫悟空だ。」

「私は五尾の穆王ですよ。」

「俺は六尾の犀犬やよ、よろしくやよ。」

「俺は七尾の重明だよ。」

「俺は八尾の牛鬼だ。よろしく頼むぜ。」

「ワシは九尾の九喇嘛だ。余りお前達とは馴れ合わないからな。」

「私は千葉エリカよ。よろしくね。」

「私は一色愛梨よ。よろしくお願ひします。」

「私は黒羽亜夜子です。よろしくお願ひします。」

「僕は黒羽文弥です。よろしくお願ひします。」

尾獣達とエリカ達がお互い自己紹介をして会話をしはじめたのだ。

「ねえ、孝一。彼等は尾獣って言うのよね？」

「ああ、そうだ。中には見た目がアレだが根は良い奴等ばかりだからな。」

エリカが尋ねると孝一がそう答えるのだ。孝一の発言を聞いて一部の尾獣達が驚いて抗議をしたのだ。

「おいおい、まさかとは思うが俺様の事じゃないだろうな？」

「え!?!まさか俺もか？」

「やれやれだな。それに関しては否定が出来ないな。」

守鶴と孫悟空が口々に言いそして牛鬼が続いて呆れながらも喋ったのだ。

「まあ、こいつらとは長い付き合いだからな。お互い考えている事がすぐに分かるからな。それにいざ戦いともなればこいつらは力を貸してくれるからな。まあ、お互い持ち

つ持たれつの関係だからな。そろそろ、元の世界に戻るとしようか。」

「どうしてですか、孝一兄さん？」

「ここは俺以外の人間がこの空間にいと色々大変な事になるからな。」

孝一の発言を聞いて文弥が聞いて孝一が答えたのだ。

「そうですか。分かりました。じゃあ、戻ります。」

文弥を含めた全員が納得して孝一のチャクラ世界から元の世界に戻る事にしたのだ。そして、全員が御堂の中で意識を取り戻して孝一と会話を始めたのだ。

「それじゃ、部屋に戻って寝ますか。リーナ、エリカ、愛梨、花音、奏、五人は今日一緒に寝ようか？」

「……ええ、(うん) 良いわよ?」

「では、私達も寝るとしましょうか、文弥？」

「僕もそうさせてもらおうよ。」

孝一がそう聞くと彼女達がそう答えたのだ。そして、亜夜子がそう言い弟の文弥は答えたのだ。そして、彼等は自分達の部屋に戻って寝る事にして孝一は恋人達と一緒に寝る事にしたのだ。

2013年12月30日PM5:46日本皇国東京特別市市内某所

孝一が尾獣達を紹介してから五日後。孝一達は四葉家の本邸に向かう為に犬塚公爵家が保有する3台の車に孝一達は車に乗っていたのだ。実は四葉家の方から迎えを向かわせると言われたが孝一がそれを拒否したのだ。理由としては孝一が昔、一部の四葉家の分家の人間に一度だけ命を狙われた事があるので孝一としてはそれを利用する手もあつたが命を狙われた事があるのでそれを理由に拒否したのだ。

そして、車のエンジンが掛かり四葉家の本邸に向けて孝一達姉弟と黒羽姉弟と孝一の恋人達を乗せた車が発信したのだ。そして数時間後、高速道路を使用して甲信越州に入ったのだ。その道中で新発田勝成がガーディアン of 堤琴鳴と琴鳴の弟の奏太を連れ

て突如現れたのだ。すると、孝一が彼等に対して口を開いたのだ。

「おいおい、どう言うつもりだ？勝成さんよ？答えてもらうか？」

「私は用があるのは君だよ。孝一殿。琴鳴、奏太。やれ！」

すると、二人が同時に孝一に攻撃を仕掛けたのだが孝一がその攻撃を交わしたのだ。そして、孝一が二人に対して反撃をしたのだ。すると、エリカと愛梨が車から降りて来て孝一に援護しようとするが孝一が二人に対してある事を言ったのだ。

「二人共、大丈夫だ。そこで少し待っている。すぐに終わらせる。」

「でも！貴方一人で三人を相手にするのは大変よ！」

「そうよ！孝一でもこの相手をするのは大変だよ！」

二人がそう言うが孝一は反撃しつつこう返したのだ。

「だから、大丈夫だつ言つてるだろ？しよすがねーな。あーもう頭に来た。少し本気を出すか。」

すると、奏太が魔法を発動して孝一に放つたのだしかし孝一がその魔法を刀で防ぐと同時に魔人態へと姿を変えて琴鳴と奏太に刀で峰打ちを打ち込んだのだ。そして、勝成に体を向けて琴鳴と奏太に同様に刀で峰打ちを打ち込んだのだ。

紅音と夏が車から降りて来たのを確認した孝一は魔人態から本来の姿である人間態に変えたのだ。二人は孝一に話しかけたのだ。

「兄貴、大丈夫か？」

「あらら、幾ら峰打ちでも手加減なしにやるのは少しやり過ぎだと思っただけどよ兄貴？」
「今回はばかりは仕方があるまい正当防衛でもあるからな。エリカ達にも少し説明しなきゃいけないからな。」

孝一がエリカ達と黒羽姉弟の方に顔を向けたのだ。彼女達に近づいたのだ。そして、彼女達に説明したのだ。

「さっきの姿は魔人態だな。俺の中にある光と闇があつてな、その闇の部分を具現化させたのがさっきの姿だ。」

「そうなの？ 貴方はやはり強すぎる力は行使しない理由が更に理解できたは。」

愛梨がそう言うのとエリカと黒羽姉弟が頷きなが同意したのだ。すると、孝一が気絶している三人を見てこう言ったのだ。

「じゃあ、この馬鹿どもを車に乗せて四葉家の本邸に行きますか。」

「「おう。（（えええ））」」

孝一がそう言うのと紅音達が賛成して新発田勝成と堤姉弟を車に乗せて四葉家の本邸に向かったのだ。それから数十分後、四葉家の本邸に着くと達也と妹の深雪と四葉家の

執事長であり執事筆頭でもある葉山忠教と達也と深雪のガーディアンである桜井水波が彼等を出迎えたのだ。すると、達也が口を開いたのだ。

「遅かったな。どうして此処まで遅くなったのだ？」

「それに関しては大だ。達也、葉山殿少し手を貸してくれないか遅くなった理由が車に乗せてあるんだ。」

孝一が達也の質問に軽く答えて理由を教える為に車に乗せている勝成と堤姉弟の姿を見せたのだ。すると、葉山がそれを見て孝一に尋ねたのだ。

「これはどう言う事ですか？孝一殿？」

「此処に来る途中でこいつらに襲撃をされてな。だからこいつらを気絶させて此処に着いたら尋問しようと思つてな。」

「そうですか。分かりました。達也様、如何しますか？」

「母上にこの事を報告をする。葉山さんは彼等を屋敷の中に運んでくれますか？」

「分かりました、達也様。では、皆さん。彼等を屋敷の運んでください。では、皆様は屋敷の中にどうぞ。」

達也がそう言うのと葉山が答えて孝一達を屋敷内に案内をして孝一達は葉山の後ろについて行つたのだ。そして、葉山が屋敷内にある部屋の前に案内をしたのだ。そこは、四葉家現当主である四葉深夜の執務室券私室の部屋だったのだ。

「奥様が此処でお待ちになられて居ます。どうぞ。」

「ああ、伯母上とは直接会うのは3年振りだからな。」

葉山がそう言うのと孝一が答えて部屋に入室したのだ。そこには四葉家の当主の深夜と彼女のガーディアンである穂波がそこに居たのだ。すると深夜が話始めたのだ。因みに達也と深雪の父親と深夜は2年半前に父親の浮気が原因で離婚しており親権は深夜が持つ事になり名字も四葉に戻して二人も四葉の名字を公的に名乗ったのだ。閑話

休憩。

「達也と葉山さんから報告を受けているは。今回の事は当主である私の不行届きでもあるからすみませんね。」

「良いんですよ、伯母上。あいつらの処分は其方の任せますよ。」

「それと、貴方達が孝一さんの恋人達ですね。皆さん美しい方々ですね。孝一さんは本当にモテますね？そうそう、孝一さんが此処に来た時に渡したい物があったのよ。だから此処で貴方に渡しますわ。葉山さん例の物を持って来て下さい。」

深夜がそう言うのと孝一がそう答えてそう返したのが深夜が孝一にある事を言い葉山に何かを持って来るように命じて葉山が袋に入れた何かを持って来たのだ。

「孝一殿。これが深夜様から贈り物です。どうぞ。」

「これは、天羽々斬だな。」

「天羽々斬？なにそれ？」

「大業物21工の一つで天をも斬り裂くと謳われる名刀だ。まさか、現物にしかも本物にお目に掛かるとは思わなかった。」

「そうなの!?孝一でも驚くほどの刀なのね。」

葉山から渡された物を見て孝一は驚きながらも刀の名前を言い当てたのだ。その名前を聞いてエリカが孝一に聞いて孝一が刀の事を説明してエリカが驚いたのだ。

「ああ、なんせ大業物は珍しいからな。だが、大業物21工は四本も持っているがこんな良い刀を貰えるだったら今回の事は大目に見るしかないな。」

「そうなのね、孝一は相変わらずね。でも、貴方らしいはね。」

孝一の反応に愛梨は少し呆れながらも孝一を反応を見て少し嬉しそうにしている。

それから孝一達は葉山の案内でそれぞれの部屋に入室して休んだのだ。それから年明けにある慶春会まで少し休む事にしたのだ。

2014年1月1日PM9:00甲信越州内某所四葉家本邸

年が明けて四葉家の当主と直系の人間と分家の当主と人間が四葉家の屋敷にある大広間に集まって居たのだ。すると、椎葉家当主の英嗣と真柴家当主の真佐さらには新発田家当主の理が口を開いたのだ。

「深夜様。新年明けましておめでとうございます。新年そうそう言うのもアレですが。私の息子の勝成とそのガーディアンである堤姉弟が行方が分からないのです。お教え下さい。」

「確かにそうですぞ。彼等が本家に来た途端、彼等が姿を消して居るのです。」

「もしこれが彼等の仕業なら彼等を処分をするべきです。」

そう彼等が主張をするが黒羽家当主である貢が話に割って入ったのだ。

「では、私の子供達も同罪として処分するのですか？ 今回の一件は理殿の御子息が孝一殿を暗殺しようとしたと聞き及んでいるのですが？」

「う、それは。私は何も知らない。本当に知らないんだ！」

「そうでしょうか？ 貴方達が秘密裏、孝一さんを殺そうとする計画が執事の一人である青木が全て自白をして居ますよ。」

「な!?!クソ、彼奴なぜ口を割ったのだ!?!」

「おい！お前！何を言ってる！」

「しまった！」

更に会話に割って入ったのが津久葉家の長女である津久葉夕歌そう言うとき彼等が驚き動揺して居ると今まで黙って居た孝一が刀を彼等に突きつけこう言ったのだ。

「おい。お前ら正直に言えばお前らの処分に關しては伯母上に任せるつもりだったがもう我慢ならん。俺自ら手打ちにしてくれる！」

「ちよ、兄貴幾らなんでも手を出すのはまずいってば！」

「俺でもこいつらが自分の非を認めれば情状酌量で伯母上に罰を軽くして貰うつもりだったがしかたないだろ！」

孝一の発言を聞いて夏が止めに入るが孝一はそう言い返して刀を構えたのだ。それを見た彼等は何としても許して貰おうとするが孝一は無視をしたのだ。

「頼む！今回の計画は青木が立てて無理矢理参加させられたのだ！」

「そ、そうだ！私達は無関係なのだから許してくれ！」

その懇願も虚しく孝一は英嗣を刀で斬りつけて殺して刀を納刀すると同時に理と真佐には彼が使用する魔法の一つを使ったのだ。

「くらえ！スターダストレボリューション!!」

「ひい！頼む！本当に頼み！この通りだ！ぐああ!!」

「あの世で自分のした行いを後悔する事だな！スターライトエクステインクション！」

「ぐあああ！」

真佐にはスターダストレボリューションを理にはスターライトエクステインクションを放って彼等を葬り去ったのだ。そして、大広間に青木がこのことやつて来たのだ。否、正確には連行されて来たと言う方が正しいか。すると孝一が大広間を一瞬の内暗くしたのだ。そして、青木に問いただしたのだ。

「おい、青木。正直に言い謝罪をすればお前だけは伯母上に対してだけは情状酌量で許すように進言する。どうだ？もし、拒否をすれば分かって居るだろうな？」

「誰が貴様に謝るか！お前のような奴に謝る位で有れば死んだ方がマシだ！殺すなら心置きなく殺せ！」

「そうか、分かった。ならば死ね！」

孝一がそう言うのと流星群《ミーティア・ライン》を発動をして青木を殺したのだ。すると新発田勝成と堤姉弟が大広間に連れてこられて勝成が代表して孝一に対して謝罪をしたのだ。

「孝一殿、私の行いをどうか許して欲しい。私と彼女達は今回の事は今日言われてやるように言われたんだ。」

「構わない。お前達は元々今回の一件は反対していたみたいだからな。許してやるよ。」

孝一がそう言うのと勝成達を許したのだ。そして、孝一は深夜の方に体を向けてこう言ったのだ。

「申し訳ありません。伯母上。本来なら貴方に処分をお任せするつもりでしたが今回ばかりは俺の方も流石に頭に來たので重ね重ね申し訳ありません。」

「いえ、良いのですよ。今回は一部の分家と執事が勝手にやった事であつて貴方は何も悪くありませんよ。」

孝一が深夜に対して謝罪をすると、深夜が彼の行いを不問にして逆に孝一に謝罪したのだ。

その後、四葉家の話し合いで四葉家の次期当主を達也にする事になったのだ。そして、その際に深夜の方から孝一に四葉家の分家の当主にならないかと打診されたが孝一は犬塚公爵家の嫡男を理由に丁重に断つて代わりに弟の夏を四葉家の分家の当主として据える事を提案して残つた分家の当主達全員がそれを了承して夏もそれを了承したのだ。更に孝一はその際に七武海の会議で反乱を起こそうとした者を七武海に加盟したボア・ハンコックが捕らえて尚且つもしかしたら今年中には反乱が起こると伝えて魔法協会と師族会議に通達を要請したのだ。それと、同時に紅音と水波の婚約も決まったのだ。実はこの事はだいぶ前から深夜と真夜が話をして居たらしいが最終的に決める

のは本人達だとして二人の話し合いの結果婚約が決まったのだ。

そして、翌日の1月2日に魔法協会に対して四葉家の次期当主を達也にする事と一部の大公国が反乱を起こす事を魔法協会と師族会議に通達したのだ。そして、同日に犬塚公爵家が世間に対して尾獣と人柱力に存在を公表して当代の人柱力は犬塚公爵家の嫡男である犬塚孝一である事を発表されたのだ。

師族会議編 full story

2014年1月5日 PM8:06 日本皇国関東州八王子市市内某所

この日、全国にある魔法大学付属高校は三学期の始業である。そして、孝一は今学校に登校して居る途中だ。しかし、その横には白い尻尾が五本ある顔が海豚で体が馬の動物が彼と一緒に歩いて居たのだ。

「悪いな、穆王。無理を言っつて。」

「いえ、私の方は大丈夫ですよ。ですが、私で良かったのですか？」

「どう言う事だ？」

「私じゃなくても、又旅や磯舞に犀犬そして牛鬼の方が良かったはずですが？」

「守鶴と孫と重明は喧しいからダメだし。又旅と九喇嘛は別の意味で騒ぎになるし。磯舞は性格的に問題あり。犀犬はのんびり過ぎるからダメだ。牛鬼は性格は問題無いが姿が問題だ。」

「まあ、確かにそうですね。」

孝一と穆王は第一高校の所まで歩くが同じく第一高校の生徒達が孝一と穆王に視線を集めて居たのだ。ちなみ姉の咲と弟の紅音と夏は先に学校に登校して居た。しかし、本人達は気にせず第一高校に登校したのだ。すると校門の前に何時ものメンバーが居たのだ。

「おはようございます、孝一さん。」

「よーおはようー！」

「おはようございます。」

「ああ、おはよう。何でお前らは此処に居るんだ？」

雫とほのかそしてレオが挨拶をすると孝一も挨拶をして尋ねたのだ。孝一の質問に幹比古が答えたのだ。

「うん。君に聞きたい事があるんだ。この間、犬塚公爵家から発表で尾獣に関する事だから教えて欲しいんだ。」

「あゝそうだな。それに関しては昼休みにして良いか？」

「ああ、分かったよ。じゃあ、昼休みにしようか。」

幹比古がそう答えると孝一がそう返して何時ものメンバー全員が自分達のクラスの教室に向かったのだ。そして、孝一達は授業を受けたのだ。時間が経ち昼休みになり孝一達はいつも通りに食堂で昼食を取る事にしたのだ。穆王は孝一の近くでキャベツの千切りと焼いた小魚を食べている。そして、昼食を取り始めたのだ。すると、鋼が孝一に質問したのだ。

「ねえ、孝一。尾獣ってのはどう言う存在なのかな？」

「ああ、尾獣は一尾を除き複数の尻尾を持った神獣又は魔獣だ。そして数としては一尾、二尾、三尾、四尾、五尾、六尾、七尾、八尾、九尾の合計九体いるんだ。」

「へえ〜そうなんだ。結構可愛い気がする！」

「ああ、それなんだが良い奴らなんだが見た目はちよつとあれな奴等が居るからな。」

鋼の質問に孝一が答えるとエイミーが反応すると孝一がそう返したのだ。すると、穆王が食事を終えたのか話の輪に入って来たのだ。

「そうですね。我々の姿は人によつては驚く方が殆どでしょうね。」

「そうだな。しかし、見た目は少し変わって居るな。」

「そうだが見た目イコール性格とは限らないからな。こいつみたいに見た目はこれだが性格は良いからな。」

「そうなんだね。」

穆王が会話に入り達也がそう答えると孝一が達也に追従する形で答えて幹比古が領きながら答えたのだ。すると、穆王が更に追加である事を言ったのだ。

「私達、尾獣は基本的には貴方達、人間には対立するつもりも無いですし非常に友好的に接するのが鉄則ですからね。まあ、一部を除けばの話ですがね。」

「えつと、一部って事はダメだったり嫌いな人間が居るって事ですよね？」

「ええ、居るには居ますよ。この学校の生徒で。」

穆王の発言を聞いてほのかが聞いて来たので穆王が答えたのだ。すると、雫が穆王に誰なのかを聞こうとしたのだ。

「一体、誰なの？」

「ええ、森崎駿という人間ですね。あれは、私達はどうも好きにはなれませんね。」

「あゝ、彼か。でも何で彼の事が嫌い何ですか？」

「彼の性格と態度に思考が私達としてもどうも好きにはなれませんね。」

雫の質問に穆王がそう答える。その後、彼等は昼休みが終わりそれぞれの教室に戻ったのだ。そして、午後の授業のチャイムが鳴ったのだ。一方、穆王は昼食を食べた影響か昼寝をし始めたのだ。しかし、孝一は穆王に気にせずに授業を受けて居たのだ。簡単な話だ。尾獣は元々マイペースな部分が多いの為である。そして、午後の授業が全て終わり孝一は姉の咲と弟の紅音と夏そして穆王と一緒に帰ろうとする。すると達也が孝一の所にやって来たのだ。

「どうした、達也。俺に何か用か？」

「ああ、来月に師族会議があるのは知って居るな？」

「まあな。俺には関係無いがな。」

「実は、師族会議の方からお前に出席の要請があつてな。俺がお前の案内をする事になつた。」

孝一は自分の所にやつて来た達也に尋ねると彼がそう答えたのだ。それを聞いた孝一は達也に聞いたのだ。

「まさかとは思うがこないだ四葉家に行った時に七武海会議であがつた反乱の件か？その為だけに俺を呼び出したのか？」

「ああ、そうだ。何がなんでもお前には出て貰うし反乱の件を説明をして貰わなければならぬからな。それと、その際に数字付きの師補十八家及び百家とその支流そして全ての魔法師が参加する会議が行われるからなそちらにも出て貰うからな。」

「そうかよ。それなら断る理由も無いからな。顔は出させて貰うからな。」

孝一の答えを聞いた達也はその場を去って行き孝一はそれを確認すると穆王を連れて学校の校門に向かったのだ。孝一はリーナとエリカそして花音及び奏並びに姉の咲、弟の紅音と夏、そして何時のメンバーがそこには居たのだ。校門の前に居たのだ。すると、リーナが孝一が歩いて来るのに気付いて孝一に話しかけたのだ。

「ようやく来たわね、孝一。」

「孝一、遅いわよ！」

「まあまあ、孝一さんも遅いのは何時もの事なのですから。」

「美月、全くフォローになってないからな。」

「すみません！孝一さん！」

「気にして無いから良いぞ。美月。」

リーナに続いてエリカが言うのと美月が間に入って言うが孝一がつつこんだのだ。彼等は何時もの喫茶店に向かって歩き出した。そして、喫茶店に着いた彼らは喫茶店に入りそれぞれがメニューを見て決めたのだ。因みに穆王は喫茶店に入る前に孝一の中に戻って居たのだ。閑話休題。

「そう言えば此処の所、軍と警察が街中でよく見るけどどうなってるのかな？」

「噂では何処かの大公国が反乱を起こすって言う噂があるからね。」

「それに関しては俺達は何も知らんぞ。そもそも、知って居ても政府からは箝口令を徹底的に敷かれるからな。俺達に聞かれても答えられないからな。」

鋼がそう言うのと幹比古が追加で言うのと孝一がその場に居た全員にそう告げたのだ。それを聞いたほのかが孝一に尋ねたのだ。

「えっと、如何してですか？孝一さん。」

「理由は簡単な話だ。俺達は政府の重要な情報や機密情報が無条件にその場で最優先で知る事が出来るからな。だから基本的にはそれらの情報を知った場合は箝口令を徹底的に敷かれるからな。」

「そうなんですか。」

「ほのか、落ち着いて。これに関しては孝一さんの言ってる事が正しいから。」

孝一がほのかの質問に答えるとほのかが少し落胆したのだ。その後、彼等は色々話をしてその場を解散したのだ。孝一は何時ものメンバーと別れて姉と弟そして恋人達と家に帰って居たのだ。それから、約一カ月後。

—————

2014年2月4日 PM9:24 日本皇国関東州横浜市市内某所皇国魔法協会本部

この日、魔法協会本部で師族会議と数字付きの会議が行われるのだ。そして、本日はやはり政府は魔法大学と付属高校は休校になるのだ。簡単な話だ。今日は魔法協会の重要な会議が行われるのだから無理も無いのだ。そして、孝一と夏は今回の師族会議の議題に関して十師族からオブザーバーとして意見を述べる為、魔法協会に顔を出したのだが孝一達犬塚姉弟は貴族である事を理由に基本的には魔法協会関連の事柄には出席をしない様にして居たのだが今回は事情が事情なだけあつて出席をしなければならなかったのだ。

「にしても、此処の奴等は嫌な視線を俺達に向けやがるな。」

「仕方ねーだろ、兄貴。俺達は魔法協会や魔法師からしてみりゃあ政府側の人間で協会からある程度は距離を取ってるからそう思いたくなるのも当然だぞ。」

夏が兄の孝一に言うが孝一は少し不機嫌も直つたのだが歩いて居ると二人の近くから誰かが二人に話しかけて来たのだ。

「お前達、珍しく来ていたのか？」

「ああ、今回の議題で俺達の意見を聞きたいと言う事で出席を要請されたからな。一条。」

一条将輝が二人にそう言うのと孝一が歩きながら彼にそう告げるとそのまま議場に入って行ったのだ。そこには、十師族の全ての当主と次期当主が集まって居たのだ。今此処に居るメンバーは、

一条家現当主、一条剛毅 次期当主、一条将輝

二木家現当主、二木真衣 次期当主、二木結衣

三木家現当主、三木元 次期当主、三木元治

四葉家現当主、四葉深夜 次期当主、四葉達也

五輪家現当主、五輪勇海 次期当主、五輪洋史

六塚家現当主、六塚温子

七草家現当主、七草弘一 次期当主、七草智一

八代家現当主、八代雷蔵 当主補佐、八代隆雷

九島家現当主、九島真言 次期当主、九島玄明

十文字家現当主、十文字和樹 次期当主、十文字克人

孝一は何食わぬ顔で師族会議のある会議室に入室すると多くの者が孝一に対して視線を集中させたのだ。当の本人はどこ吹く風なのだが。そして、孝一は伯母である深夜と従兄弟の達也の近くに立って会議が始まるのを待ったのだ。それから時間が経つと師族会議の議長である九島烈が会議室に入って来たのだ。

「では、今より師族会議を始めます。」

「その前に先生。一つ宜しいでしょうか？」

「何だ、弘一？」

「何故、七武海の人間が居るのでしょうか？」

「彼に関しては私自ら師族会議の議題に関する事で出席を要請したんだ。問題は無い。」

「そうですか。」

九島烈が師族会議の開始を宣言すると七草家現当主の七草弘一が烈に質問をしたのだ。そして、烈が弘一の質問にそう答えると弘一が納得してその場は収まったのだ。

「その前に一つ私の方から宜しいでしょうか？ 四葉殿。」

「何でしょうか？一条殿。」

「御息が四葉家の次期当主に決まった事お祝い申し上げます。そこで私の愚息、一条将輝が御息女の四葉深雪殿に婚約したいと申して居るので宜しいでしょうか？」

「それに関しては本人達の意味ですので私達が関与すべきでは無いので構いませんよ。」

「そうですか。」

「では、会議を進めるとしようか。」

一条剛毅が深夜に対してそう言うと言と深夜がそう返すと彼は納得して口を閉ざしたのだ。そして、九島烈が会議が進行を宣言して会議が始まったのだ。すると、孝一が喋り始めたのだ。

「では、今回の議題に関して私から宜しいでしょうか？」

「構わないぞ。」

「分かりました、孫。方々に例の資料をお渡しを。」

「あいよ。よつこらせと。ほらほら。」

孝一がそう言うのと十文字家現当主の十文字和樹が了承して孝一が尾獣の一体である四尾、孫悟空に資料を渡す様に言ったのだ。すると、煙と共に四尾の孫悟空が出て来て十師族の当主達の前に資料を置いて行ったのだ。

「それでは御当主の皆様方、お手元に置かれている資料を拝見をお願いします。」

「これは、本当なのか、犬塚侯爵卿？」

「ええ、それは事実です。我々、七武海と政府の入念な調査と話し合いの結果その結論に至りました。」

「まさか、一部の大公国の者達がその様な事をしようとして居るとは思わなかった。」

「しかし、何故今になってこの事を我々、魔法協会に報告をしたのでしょうか。昨年時点では分かつて居た事のはず、何故なのでしょう？」

「それに関しましては当方としても完全なる物的証拠も無く状況証拠と当該人物の証言だけでは判断するのは難しいと判断して秘密裏に我々が調査をした上でそう断定しましたが幾分調査に少し時間が掛かってしまったので報告が遅れた次第です。そこに着いては私が政府と七武海の代表してこの場にて謝罪します。申し訳ありません。ですがこの一件は我々、政府、七武海そして魔法協会の皆様が力を合わせなければならぬ事です。大公国の者達が自分勝手な理由で同じ国に住む罪無き同胞を殺そうとして居るのは許されません。どうかお力をお貸し下さい。」

「それに関しては仕方あるまい。」

一条家の当主である一条剛毅が孝一に質問して孝一が答えて更に孝一が更にそう言うとうと六塚家現当主である温子と八代家現当主の八代雷蔵の二人が孝一に対して口々に

言うところ孝一がそう発言すると七草家現当主の七草弘一が納得した様に言ったのだ。その後、師族会議は進み様々な問題を話し合いを行いその結果として魔法協会としての内乱への対応が決まったのだ。万が一反乱が起きた場合は政府の要請に応じて魔法協会は協力する事になったのだ。そして午後1時から数字付きを始めとした家と古式と一般の魔法師の家が集まって会議を始めたのだ。すると、十三束家の当主である十三束翡翠が口を開いたのだ。

「しかし、この報告書が本当なら一大事よ。でも何故今になって彼等は反乱を起こそうと考えたのかしら？」

「ですが、奴等に情けをかけた結果でこうなったのは皇国政府の責任でもあるのでは無いのでは無いのでしょうか？」

「だが、政府は彼等と融和を図って来たのだ。政府に対して非難をする事は出来ない筈だが？」

翡翠の発言に十山家の当主である十山信夫がそう言うところ七宝家の当主である七宝拓

曰がそう言つて彼を諫めたのだ。すると今まで黙つて居た孝一が口を開いたのだ。

「これに關してはどっこいどっこいのはすだが。そこまでして自分達の非を認めようとしない奴等はそう言つて自分の責任から逃げようとする。だから、そう言う発言をしない方が良いと思うぜ。」

「どう言う事だ!!」

「そこままの意味だぜ。俺は事実を述べたまでだ。しかし、嫌な予感がするがまあ良い、それを置いておこう。」

「ぐぬぬぬ。」

彼等は孝一の発言を聞いて激昂するが何も言い返す事も出来ずに黙り込んでしまったのだ。すると、巨大会議室の入り口のドアが勢いよく開くと同時に何人かのかなり昔のしかも戦前に日本軍が使用して居たボルトアクション式の銃を装備した集団が入つて来たのだ。よく見るとそれは退役済みで国内でその殆どが軍の博物館に飾られて居

る99式短小銃であった。孝一はため息を吐いて嘆いたのだ。

「やれやれ、何してんだ此奴らは。それにどうやってあの99式短小銃を手に入れたんだ？」

「全員、武器を外せ！さもなければこの場で全員を殺すぞ！」

その集団のリーダーらしき人物がそう叫ぶと銃口をこの場にいる者全てに突き付けて言い放ったのだ。当の孝一はリーダーの要求を無視して彼等に体を向けたのだ。

「おい、貴様！俺の命令を聞いて居たのか？何故、武器を外さないのだ！」

すると、リーダーが孝一に銃口を向けて孝一に向かって叫んだのだ。しかし、叫ばれた本人である孝一は気にせず居ると口を開いたのだ。

「やれやれ本当ならもう少し後に俺の力を見せるつもりだったが仕方ないな。」

「何を言つて居るんだ貴様は！」

孝一のぼやきにリーダーの男が叫ぶと銃を発砲するが孝一はそれを刀で防ぐと同時に魔人態へと姿を変えたのだ。それを見たその場に居た殆どの者達、全員が驚き驚愕するとリーダーらしき男が部下の者達に叫びながらある事を命じたのだ。

「う、撃つて!!撃つんだ!!」

「……は、はい。」

彼等全員は銃を発砲するが孝一は刀で銃弾を全て弾いて襲撃した者達、全て峰打ちで気絶させると即座に魔人態から人間の姿に戻ったのだ。すると孝一は自分に視線が集中して居る事に気づき彼等の方に体を向けると同時に一条剛毅が孝一に近づき質問をしたのだ。

「彼等は大丈夫なのかね?そして君は一体、何なのかね?」

「ああ、此奴ら全員は大丈夫ですよ。峰打ちですから。その質問は後にしてくれませんかね？その前にする事が有ります。」

孝一はそう言うとりーダーの男の胸倉を掴むと男の顔に一発パンチをお見舞いしたのだ。そのパンチが効いたのか男は意識を取り戻したのだ。それを確認した孝一は男に質問したのだ。

「おい、お前に幾つか質問がある。一つ目はお前らの目的。二つ目は99式短小銃をどうやって手に入れたそれを答えろ。そうすれば今回の事は俺の方から情状酌量で許す様に政府に言う。さあ、答えるんだ。」

「誰が、言うものか。我らの誇りを思い知るが良い、グツフ。」

「ツチ。くそ。」

孝一の質問に男はそう答えると舌を噛み切つて自殺をしたのだ。

「自殺しやがった。恐らく他の奴らも俺が峰打ちを打ち込むと同時に恐らく舌を噛み切りやがったな。」

「まさかな。その前に君のあの姿は何だね？それとあの銃の事を知って居るのかね？」

「二つ目の質問は後にさせていただきます。二つ目に関しては知って居ますよ。」

孝一の発言に七草家当主、弘一がそう言うと同時に孝一に質問をしたのだ。すると孝一は銃を拾いながらそう答えたのだ

「この銃は99式短小銃です。1950年代前半まで陸軍で使用されて居たボルトアクション式の主力銃ですよ。そして、今は殆どが個人所有の奴と反社会勢力でも無い限りは軍博物館に保管されて居る。」

「そんな銃が何で彼等が持っているんだ？」

「これはあくまで俺の予想ですが、俺の三つ程の可能性がありますね。」

「三つの可能性だと？」

孝一が七草家当主の七草弘一の質問に答えると孝一の言葉を聞いて一条剛毅が反応したのだ。

「ええ、一つ目の可能性は個人所有の奴が何らかの理由で紛失した可能性です。まあ、これは一番、低い可能性ですがね。」

「何故そう言えるのだ？」

「簡単な話です。個人所有の場合銃と言うのはそう簡単にゴミとして出せませんし今のご時世に銃をそのまま状態で理由もなくしかも玩具やエアガンや電動ガンでも無い実銃の此奴を外で持ち歩けば銃刀法違反で捕まりますし持っていても殆ど場合が家の中の誰にも知られない場所に隠すので余程の事が無い限り紛失する可能性がゼロでは無いですが限り無く低いでしょうね。」

「確かにそうだな。では、二つ目は何だね？」

孝一がそう言うのと十文字家当主の十文字和樹がそう言い孝一に尋ねたのだ。

「二つ目としては暴力団でしょうね。」

「何故なのかね？」

「これに関しては暴力団に関連した法律の影響で彼等の収入源が減った事が一番の要因ですがそれに彼等の武装も最近じゃ自動小銃やオートマチックの拳銃が多いと聞きますからボルトアクション式の銃は狙撃銃でも無い限り彼等はボルトアクション式の銃は使用しなくなったのが大きいですしね。ですが、これも可能性が低いでしょうね。暴力団関係者である事を隠して様々な物の売買や破棄に関しては法律で禁止されていますから彼等もそれをすれば組織に捜査のメスが入ってしまうので余程の事が無い限り行いませんね。ただ、無いとは言い切れませんがね。」

「確かに言われてみればそうだな。彼等も金に困れば何を仕出かすかわからんからな。」

で三つ目の可能性は？」

十文字和樹の質問に孝一が答えて千葉丈一郎が納得したかの様に頷き孝一に質問をしたのだ。

「三つ目は軍博物館の人間が横流しをした。」

「そんな馬鹿な！それをすれば下手をしたら終身刑だぞ！」

「ええですが可能性としてはこれが一番大きいですよ。何せ軍博物館の博物館員は基本的には法律上、公務員として扱われますし武器の横流しをすれば重罪に成りますからね。ただ、公務員の給料は一般企業とは違い法律で決められていますからね。恐らくお金に困ったか賄賂を貰ったのどちらかか両方の理由で武器の横流しをしたんだと思いますけどね。」

「確かにそうだな。」

丈一郎を含めたその場に居た物全てが納得したのだ。そして、九島烈が孝一の前まで行きある事を聞いたのだ。

「では、答えてもらおうかね。先程の姿は何なのかね？」

「あれは、俺の闇の力であり魔人態でありますよ。」

「魔人態だと？」

孝一が烈の質問にそう答えると烈がそう反応すると孝一が更に続けるの。

「人には必ず心には光と闇が存在する。だが誰もそれに気付かず一生を終える。例えば光と闇の力が強くても誰もそれを扱えずに人生を終えるがな。俺の場合は光と闇の力が強すぎるからな。だからこそ俺はそれを使いこなす為に修行をして居たから。」

「それはどう言う事ですか？しかも貴方は光と闇の力が強すぎるとはどう言う事ですか？」

孝一の言葉に二木真衣が孝一に聞いたのだ。

「光と闇は人によってどの様に具現化するか個人差があるからな。俺の場合は光は光の巨人として闇は魔人態として具現化して居るからな。」

「魔人態は先程の姿であるから分かりますが光の巨人とは一体何なのですか？」

六塚家当主の温子が孝一の言葉に反応して孝一に聞いたのだ。

「それは今からある映像を見せますのでそれかた光の巨人の説明をしますので。」

孝一がそう言うのと会議室全体を光で包み込んだのだ。余りの光の輝きに全員が目を開くのが輝きが収まると全員が目を開けるとそこは光の空間に居たのだ。すると、深夜が孝一存在に気付き孝一に聞いたのだ。

「孝一さん、此処は一体どこなのですか？それに先程の映像を見せると言っていました

が説明をお願いします。」

「此処で映像とある事を説明しますよ。」

深夜の質問に孝一がそう答えるとある事を言い始めたのだ。

「その前に一つ多次元宇宙論は知って居るか？」

「ええ、知っているわよ。確か観測不可能な複数の宇宙があるっていう理論物理学の筈だけど。それがどうしたの？」

「今から説明に関係があるんでね。まずに映像を見せながら説明をしますよ。」

孝一の質問に真由美が答えて孝一がそう返して手を前にかざして映像を出したのだ。すると、そこから高速で大量の星々の間を抜けて一つの惑星が出て来てそれを見た八代雷蔵が孝一に尋ねると孝一が喋り始めたのだ。

「あれは何だね？」

「あれはM78星雲にあるとある惑星ですよ。そして、この惑星こそ今から光の巨人に関する説明と関係する惑星ですよ。」

「M78星雲。確かオリオン座にある地球から約1600光年彼方にある反射星雲のはずだが。」

「ええ、そうですよ。ですがこの宇宙では違いますよ。この宇宙では地球から300万年離れた場所にある星雲ですよ。そして、この宇宙の地球時間で27万年前のこの惑星ですよ。」

「27万年のこの惑星か。」

孝一の発言に雷蔵が嘆くが孝一は気にせずに続ける。

「当時のこの惑星の住民は現在の地球人とは殆ど変わらない姿をして生きていました。」

「何と！しかも我々の文明レベルが違いがありすぎるでは無いか！」

「しかし、この惑星を照らす太陽の輝きに終わりが近づいていました。そして太陽が遂に爆発をしてしまいこの惑星の住民は絶望の淵に立ちました。」

「そんな太陽が爆発しちゃうなんて。可哀想。」

孝一の説明に十三束翡翠が文明レベルで驚きエイミイが悲しそう顔をするが孝一は説明を続けたのだ。

「だが、当時の住民達は諦めなかった。彼等は長い時間をかけて人工太陽プラズマスパークを開発したんだ。そして、この人工太陽の開発がこの惑星と住民にとって新たな歴史の始まりでもあった。」

「凄い。人工太陽を開発しちゃう何て。」

「しかし、新たな歴史の始まりと言ったな。その歴史とは何だね？」

ほのかが人工太陽の開発に驚いた表情をして七草智一が孝一の尋ねたのだ。

「プラズマスパークを開発して起動した直後に事故でプラズマスパークから発せられる放射線、ディファレーター光線が出てしまい二人の研究員が被曝してしまったんだ。しかし、直ぐに分析と調査が行われたが結果としては二人の研究員への悪影響はない事が確認されたんだ。それと同時にその彼等の身体は強化され、必要に応じて怪力を出せる、破壊光線を発射できる、巨大化できるなどの超能力を得た事が判明してな。星を治めていた、優れた政治家にして科学者であるウルトラの長老はこのことを受けて人々にディファレーター光線を照射を決めたんだ。」

孝一がそう言うのと映像を続きを見ながら説明をするとプラズマスパークの光が星の住民達に照射されると人々の姿が変わり赤と銀とそして青の色をした体にそして巨大化したのだ。それを見た十師族を含めた魔法師達、魔法協会のメンバーが驚いて十文字克人が孝一に尋ねたのだ。

「犬塚あれは一体、何なのだ。」

「彼等はウルトラ一族。そしてこの星の名前はウルトラの星。しかし、デイファレーター光線は自然の恒星にもわずかながら放射しているんだが超人化かつ変身後のウルトラ族にとってデイファレーター光線の少ない場所では生命維持にすら支障をきたすようになってな。その為にカラータイマーが開発されてこれ以降ウルトラ族の者達は他の惑星や恒星に赴く際はエネルギー配分を目安をカラータイマーの点滅で判断する様になったんだ。それから二十数万年後。後に全ての多次元宇宙に恐怖と混乱をもたらしたウルトラ大戦争が起きたんだ。」

「ウルトラ大戦争?」

「エンペラ星人率いる宇宙人、怪獣連合軍がウルトラの星に侵攻した事を発端に始まった戦争でウルトラの星が陥落寸前まで追い込まれたが後のウルトラの父と呼ばれるウルトラマンケンとウルトラマンベリアルなどの初めとしたウルトラ戦士達の活躍で陥落せずに済んだがそしてウルトラマンケンがエンペラ星人との一球撃ちによって互角に渡り合いそして引き分けに持ち込んだ事とウルトラの星の長老達が開発したウルト

ラベルによって宇宙人、怪獣連合軍はほぼ壊滅した事でウルトラの星側の勝利で終わったんだ。」

「その後はどうなったのさ？」

ウルトラの父とエンペラ星人の剣劇が繰り広げられた後に二人は同時に走り出して同時に斬り合い同時に二人は脇腹を押さえて倒れ込んだのだ。孝一の説明に映像を見ながら一条剛毅が聞き孝一が質問に答えると剛毅の息子である将輝が孝一に聞いたのだ。

「戦後、ウルトラの星ではこの戦争の結果として平和を愛する惑星の星々と協力して宇宙警備隊を結成したんだ。そして初代隊長としてウルトラの父ことウルトラマンケンが就任したんだ。しかし、それがいけなかった。宇宙警備隊が発足してから時が経ってから一人のウルトラ戦士がウルトラの星で最も禁忌とされるプラズマスパークの力を独り占めしようとした。だがプラズマスパークの力は彼の力を超えていた。そして、彼はウルトラの星から追放されたんだ。」

「彼は確かウルトラマンベリアルだった筈だが。」

「ああ、そして彼は宇宙の彼方に消えたが一人の宇宙人が彼の目の前に現れたのだ。」

ウルトラマンベリアルが宇宙の彼方に消えて行くと何処か小惑星に居ると一人の宇宙人が現れたのだ。孝一の説明に達也が映像を見てさらに聞いたのだ。

「あの宇宙人は一体何者なんなのだ？」

「あの宇宙人はレイブラット星人、かつてこの宇宙を数万年もの間も支配した宇宙人だ。そしてレイブラット星人が自分の遺伝子をベリアルに打ち込んだ。」

レイブラット星人がベリアルに入り込むとベリアルが悪魔の様な姿になり一つの武器の様な物が現れてベリアルはウルトラの星に舞い戻ったのだ。

「レイブラットの力を手に入れたベリアルはウルトラの星への復讐の為にウルトラの星に戻るがその際にウルトラの長老の一人であり伝説の超人であるウルトラマンキングによってベリアルは封印されたのだ。」

「まさかその様な歴史が有るとは。」

ウルトラの星で暴れるベリアルがウルトラマンケンが彼を止めて説得するベリアルは彼を吹き飛ばすがウルトラマンキングがベリアルは念動力で動きを止めて周囲の建物の瓦礫でベリアルを封印したのだ。

「その後、様々な多次元宇宙で様々なウルトラマンが現れてその宇宙の平和を守っているんだ。そして彼等は時として様々な方法で他の多次元宇宙へ行きそこで多くの宇宙の平和を乱す者と戦って居るんだ。」

「何故、彼等はそうまでして平和を守ろうとしているんだ？」

「さあ俺でも分からんな。ただ一つだけ言える事がある。彼等は彼等なりに平和を守ろうとしているんだと思うぜ。」

「そうか。お前の光の巨人の姿はまさかとは思うがウルトラマンの姿なのか？」

「ああ、そうだぜ。」

達也の質問に孝一はそう答えると続けてこう言ったのだ。

「世界や宇宙は広い。未来は誰にも分からない。そして未来は変える事が出来る良いようにも悪いようにもそれを成すのは俺達自身の力でだがな。」

その後、孝一はウルトラマンが存在する宇宙を説明して続けたのだ。するとそのタイミングで大きな振動が起きたのだ。

「何が起きた!」

「大変です! 外で巨大生物が出現しました!」

「なんだと!」

いきなりの振動で慌てるが一人の魔法協会のスタッフが会議室に入って来るなりそう言う一人の一条剛毅が叫び全員が外に出るとそこには茶色の巨大なトカゲが居たのだ。それを見た孝一が口を開いたのだ。

「あれは地底怪獣テレスドン。」

「テレスドン？知って居るのか？」

「ええ、あれは別の宇宙に出現する怪獣ですよ。仕方ないな。」

孝一は摩利に聞かれてそう答えると魔人態に姿を変えて刀を抜いて次元の穴を開けたのだ。そしてそこから尻尾の様な物が出て来たのだ。それを見た何人かは驚き孝一が喋り始めたのだ。

「達也達は覚えているか？古代遺跡の件を？」

「ああ、覚えているぞ？」

「あれはあの時お前達に妨害されて封印できなかったマガオロチの尻尾だ。」

「何だと!？」

「まあ良い、折角だからな。こいつの力を使わせて貰うとしようか。」

孝一はそう言うのとダークリングを取り出すと何かカードらしきものダークリングにリードしたのだ。

「ゼットンよ!」

『ゼットン!』

「パンドンよ!」

『パンドン!』

「お前達の力、頂くぞ！」

『超合体！』

孝一がダークリングを掲げると光が彼を包み込んで次元の穴の中に入っていきそこから光と共に巨大生物が現れたのだ。

「超合体！ゼツパンドン！」

孝一はゼツパンドンになるとテレスドンに向かって攻撃をし始めてテレスドンと戦い始めたのだ。そしてゼツパンドンはテレスドンを圧倒するがテレスドンが炎を吐くがゼツパンドンがゼツパンドンワールドを展開して防ぐと火炎弾を三発ほど放ってテレスドンを撃破したのだ。そして孝一はゼツパンドンの超合体を解除したのだ。

「あー疲れた。」

「にしても何故あんなのが出て来たのだ？」

「知らないな。だが何か原因だと思いがな。」

克人が孝一に質問すると孝一はそう言ったのだ。その後、話がずれたの魔法協会の会議が進行して反乱への対応が決まり魔法師達がそれぞれの家に帰路に立ったのだ。孝一は家の帰り自分の部屋に入り本を開いて机の上に置いて読み始めたのだ。すると、亜夜子が孝一の自室のドアがノックされたのだ。

「孝一さん。少し宜しいですか？」

「どうした、亜夜子？話なら手短かに頼むぜ？」

「孝一さん。実は昔から貴方の事が好きだったんです。私を側に居させて下さい！お願いしますー！」

「亜夜子、俺で良いのか？」

「構いませんよ。貴方のそばに居れるなら構いませんよ。」

亜夜子がそう言うのと孝一は本を閉じると彼女に近づきキスをしたのだ。亜夜子は顔を赤くしているが孝一は彼女を頭を撫でたのだ。

「可愛いなお前は。」

「少し人を揶揄うのはやめた方が良いでしょう?」

「分かったよ。でも、覚悟は良いな?」

その後、孝一と亜夜子との婚約を魔法協会を通して発表したのだ。余談だがこの事を知った文弥は大喜びをしながら孝一と亜夜子に抱きついたのは別の話である。

過去編

過去編story1

2009年4月6日 日本皇国東京特別市市内某所特別市立中学

この日、日本皇国の首都の東京特別市市内某所の市立中学の入学式が行われたのだ。そしてこの中学に孝一と弟の紅音と夏そしてリーナが入学したのだ。

「あくあく。何でこんな中学に入らなきゃいけないんだ？」

「仕方ねくだろ、兄貴。今回ばかりは親父がそうしろって言ってきたんだからよ。」

「そうだけ、兄貴。もう諦めろよ。」

「二人の言う通りよ、孝一。」

「まあ、そうだな。それとお前達、俺達の事は一切秘密だぞ。」

文句を言う孝一に紅音達、三人が孝一を宥めながらも孝一は自分達の秘密を喋らない様に言いながら歩いて居たのだ。すると校門の近くを歩いていると聞き覚えのある五つの声が聞きたのだ。孝一達が近づくと声の本人達が孝一達に気付いて孝一達に話しかけたのだ。

「孝一達ようやく来たみたいね。」

「相変わらず四人は良く一緒に居るわね。」

「少しは早く来たら？」

「全く。私達を少し見習ったら？」

「皆さん。彼等だつてわざとやってる訳では無いんですから？」

上から啓、咲、花音、奏、小春が順番に喋るが本人達は気にせず聞き流すと孝一と夏と紅音が口を開いて話し出したのだ。因みに話はズレるが最後にフォローした小春はフルネームを本多小春と言い本多伯爵家の一人娘で孝一達とは幼馴染でもある。そして、本多伯爵家はかの徳川四天王の一人である本多忠勝の子孫でありその後、昭和期に当時の当主だった本多忠直の勲功のおかげで子爵から伯爵になって居るのだ。閑話休題。

※小春の容姿はSAOIFのヒロインのコハルを想像して下さい。設定の諸々は追って追加します。

「何時に着こうが入学式に間に合えば良い話のはずだろ？」

「そりやそうだよ姉貴。」

「小春く全然フォロー出来てないぞ。」

「あ！ごめんなさい！悪気は無いんです！」

「別に良いんだよ。そもそも紅音と夏がのんびりし過ぎて居るからな。」

「そろそろ入学式が始まるから自分達のクラスを確認してから体育館に行つてクラスの椅子がある場所に座るんだよ?」

五十里啓が孝一達にそう言うのと孝一達は自分達のクラスを確認して中学校の校舎に入つて居たのだ。彼等が学校の体育館に入ると同じ新入生達の視線が孝一達に向くが本人達はどく吹く風で自分達のクラスの椅子がある場所に座つたのだ。そして、入学式が始まり司会が式辞進行して校長の挨拶が行われてから入学式が進行して行き入学式が終わると明日から学校の新入生歓迎会と学校説明があるので授業は無いと伝えられてその場は解散になつたのだ。

2009年4月7日AM8:12首都東京特別市市内某所市立中学

孝一達は学校に登校すると四人はそれぞれの教室に入ったのだ。孝一は1年A組、紅

音は1年B組、夏は1年D組、リーナは1年F組、奏は1年C組、小春は1年E組だ。閑話休題。孝一の教室で自分の机の所まで行き机に座つたのだ。すると、一人の男子生徒が孝一に近づいて来て話しかけて来たのだ。

「やあ僕は柳原大智だよ、これから三年間よろしくね。」

「俺は、犬塚孝一だ。余りお前とは関わりたく無いがな。」

「君も今のうちに僕とのコネを持って居た方がこれからの人生の為だから後悔しても知らないよ?。」

「知らんな。俺は実力じゃなくてコネでのし上がるのは嫌なのでね。」

「ふん。本当に知らないよ?。」

「勝手に言っている。」

柳原と名乗った生徒が孝一に自己紹介して少し見下した感じで言うが当の本人である孝一は気にせず、適当に受け流して無視をしたのだ。柳原が立ち去ると別の中性的な生徒がやって来たのだ。

「やあ、僕は里見スバルだよ。よろしくね。」

「俺は犬塚孝一だ。お前は女子生徒か？まあ、一人称に関して是人それぞれだからとかく言う権利は無いがな。」

「ああ、良く言われるよ？でも僕は全然気にしないからね？」

「ふん。そう言う事なら俺は何も言わん。」

「ああ、僕の方も構わないよ。」

孝一の発言にスバルも同意して彼女は自分の机に戻って居たのだ。それから、数分後。このクラスの担任の女性教師が教室に入って来たのだ。

「えー、私がこのクラスの担任の伊藤香奈です。これから一年間宜しくね。皆さん。」

「では、まず一人ずつ順番に自己紹介をお願いします。」

担任の伊藤香奈が生徒全員に自己紹介をする様に言うと一番最初の生徒から一人ずつ自己紹介をし始めたのだ。そして、自己紹介の順番が孝一に回って来たのだ。その為、孝一は自分の自己紹介をしたのだ。

「俺は犬塚孝一だ。これから一年よろしく頼むぜ。以上だ。」

「えー、次の方よろしいかな？次の方はお願い出来るかな？」

孝一が自己紹介を終えると担任の伊藤香奈が次の生徒を指名したのだ。そして、最後は柳原大智が指名された。

「僕は柳原大智だよ。柳原総合商社社長の一人息子だよ。皆、僕と一緒にクラスになれ

た事を名譽に思い給え。以上だよ。」

彼の周囲の者達を見下した発言を聞いてクラスに居た殆どの生徒全員が不快な顔をしたのだ。しかし、当の本人は気にせずに受け流したのだ。担任の伊藤香奈は焦ってその場の空気を直す為に口を開いたのだ。

「え〜っと。では、皆さん。次は上級生の皆さんがこの学校の部活動などを紹介をして下さるので体育館に移動しましょうか。」

彼女の発言にクラスの生徒全員が並んで体育館に向かったのだ。そして、1年A組が体育館に着くとそして他の一年生のクラスの生徒達がやって来たのだ。学校の上級生達が体育館に入って来たのだ。司会の教師が進行をし始めたのだ。

「え〜今から部活動紹介を始めます。」

教師がそう言うのと部活動紹介を始めたのだ。

「まずは運動部から剣術部、剣道部、野球部、柔道部、テニス部、陸上部、サッカー部、バレー部、バスケット部、弓道部、卓球部、フエンス部、狩猟部などの運動部あります。続いては文化部の紹介です。美術部、書道部、吹奏楽部、茶道部、演劇部、新聞部、放送部、ダンス部、軽音楽部、サイエンス部、家庭科部などの文化部があります。そして、今から一部の部活がデモストレーションを行います。」

教師がそう言うると一部の部活に生徒達が出て来たのだ。

「まずは柔道部からお願いします。」

教師が言うると柔道部に所属する男女二人の生徒が中央に置かれて居る畳に行きデモストレーションを始めたのだ。そして、女性生徒が一本背負いを行い一本を取ったのだ。続いて男子生徒が一本背負いを行い一本を取ったのだ。柔道部のデモストレーションが終わると教師が進行を始めたのだ。

「柔道部の部員の生徒さん。ありがとうございます。続いては剣道部です。お願いします。」

教師の言葉で剣道部の部員の男子生徒二人が中央に行きデモストレーションを始めたのだ。剣道部の部員の男子生徒二人が試合を始めたのだ。そして、双方が面と胴に一本ずつ入れてデモストレーションが終わり教師が次の部活の紹介をしたのだ。

「剣道部の部員の生徒さん。ありがとうございます。続いては剣術部です。お願いします。」

教師がそう言うのと剣術部の男子生徒が二人が中央に行きデモストレーションを始めたのだ。剣術部の男子生徒二人が同時に自己加速術式を発動して動き始めての互角に渡り合ったのだ。そして、双方が一本ずつ取ってデモストレーションが終わると教師が次の部活を紹介したのだ。

「剣術部の部員の生徒さん。ありがとうございます。続いては文化部の吹奏楽部の紹介です。吹奏楽部の方お願いします。」

教師がそう言うのと吹奏楽部の部員達が中央に集まり演奏を始めたのだ。そして、吹奏

楽部の演奏が5、6分続いて演奏が終わると吹奏楽部の部員達は戻っていたのだ。そして、教師が次の部活を紹介をしたのだ。

「吹奏楽部の部員の生徒さん。ありがとうございます。続いてはダンス部の紹介です。お願いします。」

教師がそう言うのとダンス部の部員達が中央に集まってダンス部が音楽をかけてダンスを踊り始めたのだ。そして、5、6分踊り続けてダンスが終わるとダンス部の部員達が戻って居たのだ。そして、教師が進行をしたのだ。

「え〜今から休憩に入ります。少しの間トイレ休憩をして下さい。」

教師の言葉でトイレ休憩に入る事になったので全校生徒がトイレ休憩に立って10分間は休憩したのだ。それからトイレ休憩も終わり部活動の紹介の続きをして全ての部活動を紹介して全校集会が終わったので新入生である一年生は体育館から順番に出て行きその後全校生徒が体育館から出て行ったのだ。

「やあ、君は何処の部活に入るのかな？」

「何処に入ろうが俺の勝手であり、自由の筈だ。そもそも部活に入るかどうかは本人の判断に任されて居る。だから何処に入ろうが俺の自由だろ？」

「やれやれ君は本当に自由気ままな性格だね。」

「何とでも言え。俺は俺だ。」

「まあ本人の自由だからね。それじゃ。」

柳原が孝一に話しかけて喋るが孝一がそう言うのと柳原がそのまま自分の席に戻って行ったのだ。すると担任の伊藤香奈が教室に入って来たのだ。

「えゝ部活の入部に関しては本人の自由です。入部の時期に關しても本人の自由です。で各自、入部の判断に關しては自由ですので宜しいですね？それと明日から授業が本格的に始まります。では、皆さん明日から頑張つて下さい。では、皆さんさようなら。」

「「「さようなら。」」」

伊藤香奈がそう言うのと帰りの挨拶をして生徒全員が挨拶をしてそのまま下校の準備をして教室から出て行つたのだ。そして、孝一は下駄箱まで歩いて行き靴を履き替えたのだ。そして、校舎の玄関から出ると同時に右の方から話しかけられたのだ。

—————

「兄貴やつと来た。相変わらずのんびりしてるな。」

「それに関して俺に言わずに担任に言ってくれないか？どうする事も出来んからな。」

「まあな。」

孝一に話しかけたのは弟の紅音だった。二人は話して居ると横から聞き覚えの無い声が聞こえて来たのだ。

「えっと、紅音君。そちらの人は誰なのかな？」

「ああ、俺の兄貴だ。」

「え!?! そうなの!?!」

「全然。似てない気がする。」

「そうだね。」

「あらそうなの？」

「ふん親戚か何かか？」

「えっと。どちらにせよ自己紹介をしなきゃダメだと思うけど。」

「確かに兄さんの言う通りだね。」

金髪の男女三人に緑髪の少女が一人に黒髪に近い紫髪の少女が一人で銀髪に近い黒髪の少年が一人がそう言うが自己紹介が始めたのだ。

「私は高橋翠だよ。宜しくね？」

「私は真木光里だよ。宜しくね？」

「私は今井由香理よ。宜しく。」

「僕は風見亜音だよ。宜しく。」

「僕は風見葵だよ。宜しく。」

「俺は倉田銀次だ。宜しく頼むぜ。」

「俺は犬塚孝一だ。宜しくな。因みに余り似てないがこの赤髪とは三卵生の三つ子の兄弟だ。俺が長男でこいつが次男でこの場に居ない奴が三男だ。」

「へ〜そうなんだ。結構珍しいね。」

自分達の自己紹介すると孝一の発言に翠が物珍しそうな反応をして居る。そうこうして居ると夏がやって来たのだ。

「おーい兄貴〜、紅音。」

「夏か。相変わらずだな。」

「兄貴、何だよ。その言い草は。」

孝一はそう言うのと夏が少し抗議したのだ。そうこうしている内にリーナと奏と小春がやって来たのだ。

「珍しいはね、孝一が人と会話を好んでするなんて。」

「そうね。信頼を置いた人間以外とは余り人と関わる事を嫌う孝一がね。」

「あの二人共、そう言うのと孝一さんに失礼ですよ。」

「小春、フォローするのは構わんが余りフォローにはなつて無いぞ。後、リーナと奏、お前達は少しは俺の事を何だと思つて居るんだ?」

リーナと奏がそう言うが小春がフォローするが孝一が小春にツツコミを入れてからリーナと奏に自分への考えを少なからず知り突っ込んだのだ。

「えつとお知り合いかな?」

「ああ、リーナとは俺の恋人で奏と小春は幼馴染でな。」

「そうなのね。」

「まあな。こいつらとは付き合いが長いからな。嫌でもお互いの考えがある程度は分かっちゃうからな。」

「そう言う物なのか？」

「他の所は知らんが俺達はそれで十分だからな。」

翠の質問に孝一が答えて翠が納得して孝一が自分達の関係を述べると銀次が反応して孝一が銀次の反応にそう返したのだ。すると奏がこう言ったのだ。

「じゃあそろそろ帰りましょうか？皆さんも一緒に帰りませんか？」

「うん。一緒に帰らせて貰うわ。」

「そうさせて貰うよ。」

「それもそうだな。」

奏の発言に翠と亜音が提案に乗って孝一も彼等に同調したのだ。そして彼等は歩き出したのだ。そのタイミングで孝一と紅音と夏の姉である咲とその許嫁のである五十里啓と彼等の幼馴染でもある千代田花音がやって来たのだ。

「皆々相変わらず仲良くやってるわね？」

「皆が仲が良いのは昔からだよ。」

「確かにそうね。でも仲が良いのは良いことじゃ無い？」

彼女達の登場で翠達が驚いて居ると咲達が自己紹介をし始めたのだ。

「私は二年の犬塚咲よ。宜しくね。」

「僕は同じ二年の五十里啓だよ。宜しく。」

「私は同じ二年の千代田花音よ。宜しくね。」

咲達が自己紹介すると翠達も自己紹介をしたのだ。

「私は高橋翠です。宜しく願います。」

「私は真木光里です。宜しく願います。」

「私は今井由香理です。宜しく願います。」

「僕は風見亜音です。宜しく願います。」

「僕は風見葵です。宜しく願います。」

「俺は倉田銀次だ。宜しく頼むぜ。」

「ちよつと、銀次。相手は先輩だよ!?! 少し失礼だよ!」

「ああ、僕達の方は構わないよ。」

銀次の態度に翠が注意するが啓が構わないと言いその場は収まったのだ。そして彼等は歩き出したのだ。彼等は歩きながら色々な会話を行なっていたのだ。その中で翠が孝一達と奏そして小春にある質問をしたのだ。

「そう言えば先輩達に犬塚君達と羽澄さんと本多さんって聞き覚えのある名字何だけど私の気のせいなのかな?」

「あくそうゆう事ね。どうしようか?」

「何で俺に目を向けるんだ姉貴?」

「仕方がないでしょ? 聞かれたからには答えなきやいけないよ?」

「チエ。」

翠の質問に咲が確認の為に孝一に目を向けるが孝一が抗議すると横から花音がそう言うのと孝一は少し不満そうにしたのだが意味は無く咲が答えたのだ。

「えっと。それは多分気のせいじゃないのかな？」

「あゝそうなんですか？それでしたら私の気のせいですね。」

咲の返答に翠は納得して受け流したのだ。そして彼らは歩き出して家に向かったのだ。そして翠達はある事を言ったのだ。

「私達はこつちなんでそれじゃまた明日で。」

「バイバイ！」

「それじゃ。」

「そつれでは。」

「それじゃまた明日ね。」

「明日な。」

「ああ。」

「明日も楽しみにしてゐるぜ。」

「それじゃ。」

「また明日も会いましょうか。」

彼等は此処で分かれてそれぞれの家に帰って居たのだ。そして啓と花音の二人も此処で分かれて家に帰りそして孝一達は市内にある高級住宅街にやって来たのだ。実を

言うところの住宅街が彼等の住んでいる地区でもあるのだ。すると奏が口を開いたのだ。

「それじゃ私は此処で。」

「それじゃあね、奏ちゃん。」

「じゃあな、奏。」

孝一達と奏は此処で分かれて奏は自分の家に向かったのだ。そして孝一達はそのまま歩き出したのだ。そして小春も口を開いて言ったのだ。

「それでは私も此処で分かれさせてもらいます。」

「バイバイ小春ちゃん。」

「じゃあな、小春。」

「じゃあな。」

「ああ。」

孝一達と小春じやそのまま分かれてそれぞれの家に向かったのだ。そして孝一達は自分達の家に向かつて歩き出してそれから数分後に大きな門が現れて孝一達はそこで立ち止まると門が開き始めたのだ。するとそこには何十人も大人の男女がおり一斉に合わせてある事を言ったのだ。

「二」お帰りなさいませ。若様方、お嬢様方。「二」

そう彼等は孝一達の実家の使用人達であり此処は孝一達の実家であり自宅でもあるのだ。そして孝一が代表してある事を言ったのだ。

「ああ、ただいまみんな。今日もお疲れ様。これからも頼むよ。」

孝一達、犬塚姉弟にとって物心ついた時から彼等は家族当然のように育ったので使用

人にと言うよりも大切な家族なのでむしろお礼を言うのが当たり前になつてゐるのだ。すると奥の方から初老の男性がやって来て孝一達にある事を言つたのだ。

「皆様。旦那様と奥様がお呼びです。すぐにそちらへお向かい下さい。」

「分かつたよ爺。」

爺と呼ばれた初老の男性がそう言い孝一達はすぐに自分達の両親の元に向かつたのだ。そして孝一達はこの家の主人でもあり父親でもある当主の書齋にやって来て居てそして孝一は書齋のドアをノックしたのだ。すると中から声がしたのだ。

「入つていいぞ。」

「入るぞ親父。」

「あ！お母さん！」

「ん？げ！」

孝一達は父親である総一に促されて入るとそこには彼等四姉弟にとつて母である真夜がそこに居たのだがその近くに見覚えのある二つの顔を見て孝一が声を上げたのだ。

「お久しぶりです孝一兄さん。」

「お久しぶりですわ咲姉様。」

その二人は孝一達の母方の再従兄弟にあたる黒羽亜夜子とその双子の弟の黒羽文弥だ。すると孝一が文弥に近づくと両頬をつねったのだ。

「いふあいですいふあいです。なにをしますのでか孝一兄ふあん！（訳。痛いです痛いです。何をしますのでか孝一兄さん！）」

「言つても意味が無いがいい加減にその呼び方を辞めろつて言つてるだろ文弥？」

「そう言われましても孝一兄さんは達也兄さん同じで僕にとって兄の様な存在ですの
で。」

「ま、勝手にしろ。」

両頬をつねるのを辞めた孝一はそう言うのと文弥がそう言い返し孝一は返答したのだ。
すると咲が動いて居たのだ。

「亜夜子ちゃん。お姉ちゃんよ。」

「お久しぶりですね咲姉様。」

「だって孝一が四葉家の本家に行くのをものすごい嫌がつてるからね。こうやって会う
のは久しぶりね?」

「確かにそうですね。」

「嫌のものは嫌なんだよ。何で俺の命を狙った奴らが居る様な場所に行かないやいな
いんだ？」

そう孝一達は昔は四葉家の本家には行っていたのだが孝一が一部の四葉家の魔法師
が暴走して孝一の存在を危険視して殺そうとしたのだがただその時に既に孝一が自然
系の能力者であった孝一には意味は無く返り討ちにあい全員が孝一に殺されたのだっ
たのだ。それ件以来、孝一は四葉家の本家に行くのを嫌がる様になったのだ。

「孝一。貴方の気持ちは分かりますがすけど貴方を殺そうとした者達が勝手にやった事なの
で四葉家自体は無関係なんですよ？」

「ああそれは分かっているぞお袋。でもな一度でもそんな事されたら誰だって嫌な物は嫌
になるんだぞ？」

真夜がそう言うが孝一がそう言い返したのだ。孝一も分かつては居るが嫌な物は嫌
であり孝一の命を狙った事で実際に彼の中に居る尾獣達もかなりのレベルで嫌がって
居るのが現実なのだ。

「さてお前達。そろそろ着替えて来い。」

「「「分かった。(わ)「「」」

父である総一そう言われて孝一達は自分達の部屋へ行き着替えたのだ。そして孝一は自分の部屋で着替えをして居るとそこに二匹の白と黒の猫が孝一の近づいて来たのだ。そしてそれに気付いた孝一はその二匹を抱き上げたのだ。

「ヴァイスとシュヴァルツか。ヨシヨシ今日はお利口で居たか？」

「ニャア。」

「ニャア！」

孝一はかなりの動物好きで特にその中でも猫が一番好きで猫達にもよく懐かれて居るためか自分の部屋にわざわざ猫が寝れる様にケージを置いてあつたりキャットタ

ワーが置いてある程である。因みに白猫がヴァイスで黒猫でシュヴァルツで二匹とも一歳である。閑話休題。

着替え終えた孝一はヴァイスとシュヴァルツと一緒に部屋を出てダイニングルームへと向かったのだ。既にそこには咲と紅音と夏そして亜夜子と文弥がそこに居たのだ。すると咲が孝一に尋ねたのだ。

「孝一は相変わらずね？どうしてたの？」

「ああちよつとな。コイツらと戯れてた。」

「あらヴァイスとシュヴァルツじゃない。」

「えつとこの子達は一体？」

「可愛い！」

ヴァイスとシュヴァルツの姿を見た咲は納得して文弥は戸惑いそして亜夜子は二匹の猫を見て喜んだのだ。そして真夜がある事を言ったのだ。

「亜夜子さん。ご飯ですので落ち着いてください。」

「あ！すみません。」

「良いんですよ？食事が終わったらで良いのでまずは食事を取りましょうか？」

「分かりました。」

真夜と亜夜子が会話をしてその会話を終わらせると彼等は食事を取り始めたのだ。そして亜夜子と文弥が来た理由としては孝一達にとって母方の伯母にあたりそして四葉家の現当主である四葉深夜からの伝言がある為に来たのである。

「そうか。伯母上からの伝言か。」

「はい。そして今から深夜様からの伝言をお伝えします。」

「ああ頼む。」

「はい。深夜様の伝言は半年以内に何者かによるテロが起きると言うのが伝言です。」

「はあ。どいつもこいつも何でこの国でテロと戦争を起こそうとするんだ。この国がそんなに嫌いなのは分かるがそうまでしてこの国の力を削ぎたいのか？」

「恐らくそうだと思います。」

深夜からの伝言を聞いて孝一は呆れながらも言い文弥も同意して紅音と亜夜子が頷くながら同意して居たのだがその場の空気が重くなるがすると総一が口を開いたのだ。

「さあお前達。この話は此処までにしようか。」

「ああ分かった。そうだ文弥。一緒に風呂入るか？」

「え！良いんですか？」

「ああ。たまには良いだろ？」

総一がそう言うのと孝一も同意して文弥と一緒に風呂に誘うと言われた文弥が嬉しそうに言うのと孝一がそのままそう返したのだ。そして二人は風呂場に向かったのだ。風呂場に向かった二人を見るとヴァイスとシュヴァルツがそれぞれが咲と亜夜子の膝の上に飛び乗ったのだ。それを見て二人は二匹を撫でたのだ。

因みにヴァイスは咲でシュヴァルツは亜夜子の方の膝に乗って居る。閑話休題。

「にしてもこの二匹は本当に可愛いですしお利口ですね。」

「うふふ、そうでしょ？基本的に孝一が一番懐いて居るから孝一が一番お世話してるし基本的な躰けをして居るわよ？」

「そうですか。孝一さんはあの顔ですから動物が結構嫌いだと思っただけですか？」

「うふふ。あの子はあの顔でも結構動物好きよ?」

二人が仲良く会話をして居ると一方で孝一と文弥が頭と体を洗って浴槽に入って会話をしているのだ。

「孝一兄さん、羨ましいです。」

「何がだ?」

文弥の呟きに孝一が反応して聞き返したのだ。

「孝一兄さんはもの凄く鍛えられて居るので筋肉質ですが僕なんてどれだけ鍛えても全く筋肉がつきにくいんです。」

「文弥。それに関しては筋肉のつき方に関しては個人差があるからな。そう言った事は気にせずに居れば自然と筋肉はつくもんだぞ?」

「そうですか。」

孝一と文弥はなんだかんだで仲良く会話をして居たのだ。そして二人はそのまま風呂から上がりそのまま着替えるとそのまま孝一の部屋に向かったのだ。するとそこには咲と亜夜子の二人とヴァイスとシユヴァルツの二匹が居たのだ。

「はく人の部屋で何してんだ？姉貴？」

「えっと、姉さん？何をして居るんですか？」

「ああ孝一それならこの二匹を部屋に連れて来たのよ？」

「孝一さんの部屋は相変わらず広いですね。」

「仕方ないだろ屋敷が広いんだからな。」

「確かにそうですね。文弥、私は咲姉様と一緒にヴァイスとシュヴァルツを連れて来たんですよ？」

「分かったよ姉さん。」

「じゃあ私達はそろそろ部屋に戻るわね？」

孝一が自分の部屋に姉の咲が居たので聞くと咲がそう答えて文弥も亜夜子に尋ねるとそう答えたので納得したのだ。そして咲と亜夜子は咲の部屋に戻って居たのだ。そして孝一は明日の授業のために寝る事にしたので文弥と一緒にベットに横になったのだ。

その翌日、亜夜子と文弥は朝に学校があるのですぐに帰って行ったのだ。そして孝一達も学校へ行く為に制服に着替えて朝食を取って学校に登校したのだ。

過去編 Story 2

2009年5月11日日本皇国首都東京特別市市内某所

孝一達が中学に入学してから数週間が経ち孝一達は学校の授業を真面目に受けた居たのだ。そして四時間が終わり給食の時間になり孝一は弁当を取り出したのだ。弁当を食べようとした時に柳原がやって来て孝一に話しかけたのだ。

「やあ！僕と一緒に食事を取らないか？」

「断る。お前とは食事を取る気は無い。」

「君は一体全体何を考えて居るのか分からないよ。」

「そんなもん俺の勝手だ。」

「やれやれ入学の時に言ったけど僕と関係を持った方が良いよ?」

「その時に言ったが俺は自分の力でのし上がった方が良いんでね。お断りするぜ。」

「それは君の自由だから僕は何も言わないよ。」

「だったらどっかに行け。食事が取れん。」

「分かったよ。」

柳原が孝一に話しかけて来たのだが再び自分と関係を持ってコネを作った方が良いと言うが孝一は断り自分の昼食を取りたいからどこかに行くように促したのだ。それから孝一は弁当の蓋を開けて食事を取り始めたのだ。孝一は弁当を食べ終わると弁当を片付けてから教室を出て図書室に行ったのだ。

孝一は図書室に入るとそこに孝一の姉の咲と咲の許嫁の五十里啓がそこに居たのだ。咲が孝一に気づいて話しかけたのだ。

「珍しいはね孝一。貴方が図書室に来るなんてね。」

「確かにそうだね。でも何かあったの？」

「ああちよつとな。少し面倒な奴がクラスに居てな。あそこに居るくらいだったらこつちに居た方がマシだからな。」

「あはは。大変だね。」

「うふふ。あらあら相手も相手で孝一の性格からしてみれば苦手だしね？」

孝一は咲と啓の質問に答えてそう言う二人は笑いながらも孝一に同情したのだ。そして孝一は図書室の中にある本を一つ選んで近くにあつた椅子に座つて本を読み始めたのだ。それから時間が経つたのを孝一は確認したので本を元の場所に戻してから自分の教室に戻つたのだ。すると五時間目の授業は社会でその担当の先生が入つて来たのだ。教師が授業の始めるために日直に挨拶をする様に言つたのだ。

「はい、皆さん。今から五時間目を始めます。日直の方、挨拶をお願いします。」

「起立！礼！着席！」

生徒達は授業を開始の挨拶をしたのだ。そして先生が授業を始めたのだ。

「えーこの古墳時代は全国で多くの古墳が多く見つかった事で古墳時代と呼ばれています。この時代は初期と後期では古墳の形が違います。理由は何でしょうか？では皆さん挙手で自分の意見をお願いします。」

「はい。」

「じゃあ、宮田さん！」

「私としては当時の古墳を作る技術が発達したのだと思います。」

「そうですね。じゃあ次の方どうぞ。」

「はい。」

「森田君、どうぞ！」

「僕は当時の豪族は力をつけたからだとおもいます。」

「分かりました。それでは古墳が増えた理由を説明します。」

社会の授業の担当教師が説明を始めたのだ。そして教師が古墳時代と古墳の説明を続けたのだ。そして五時間目の終了を知らせるチャイムが鳴ると教師が挨拶を終わる為に挨拶を言ったのだ。

「日直の方、挨拶をお願いします。」

「起立！礼！着席！」

「「ありがとうございます。」」

教室に居た生徒達は授業の終わりの挨拶をして教師が教室から出て行くとな彼は休憩に入り始めたのだ。そして生徒達は仲の良い者同士で話始めたのだ。一方孝一は静かに本を読んでいたので。孝一は時計を見ると六時間目が始まる直前だったので次の授業の準備を始めたのだ。そして六時間目の授業の担当の教師が教室に入って来たのだ。

「授業を始めます。挨拶をお願いします。」

「起立！礼！着席！」

「では、授業を始めます。」

六時間目の教師がそう言うのと授業を開始したのだ。教師が口を開いたのだ。

「では教科書の6ページを開けてください。」

そして授業が進み六時間目が終了に近づきそしてチャイムが鳴り教師がある事を言ったのだ。

「今日の授業で出た事は復習をお願いします。では日直の方、挨拶をお願いします。」

「起立！礼！着席！」

そして教室に居た生徒達は掃除の準備を始めて自分達の掃除場所に向かったのだ。孝一は自分に担当する掃除場所に着くと同級生達と掃除を始めたのだ。孝一達は掃除を進めて掃除場所の掃除を殆ど終えたのだ。その為、孝一達は掃除を終えて自分達の教室に戻ったのだ。

「少し大変だったね。」

「そうだね。」

「やれやれだな。」

「仕方あるまい。そう学校側がそうすると決めている以上俺達はそれに従うしか無いのから。」

孝一達は教室に戻りながら話しながら歩いて少し愚痴を漏らしながら他の生徒が言うのと孝一がそう言い仕方が無いと言ったのだ。そして孝一達が教室に戻り教室に入ったのだ。彼等は担任の伊藤香奈が来るのを待ったのだ。それから数分後に担任の伊藤香奈が教室にやって来たのだ。

「えく今から帰りのホームルームを始めます。日直の方お願いします。」

「起立！礼！着席！」

伊藤香奈が帰りのホームルームを始めると言い日直が挨拶をすると伊藤香奈が話を始めたのだ。

「明日の四時間目に今度ある研修旅行の件で学級会を行います。そして五・六時間目は学年集会を行いそこで詳しい説明が行われます。そのつもりでお願いします。では日直の方、帰りの挨拶をお願いします。」

「起立！礼！着席！」

「「さようなら。」」

教室に居た生徒達が挨拶をすると生徒達が部活や下校の準備を始めたのだ。そして各自、自由に動き始めて部活に向かう者や下校する者などが居ると孝一は自身が所属する部活である狩猟部の部室に向かったのだ。彼は昔から狩りが趣味の一つでもある為に暇時間さえあれば実家の土地である野原や山で時々ではあるが狩りなどを行なっているのだ。

それから校舎内を歩いて孝一は狩猟部の部室にまでやって来たのだ。孝一は狩猟部の部室に入ると先に来ていたであろう先輩達と同じ学年の同級生達が居たのだ。する

と孝一が部室に入ると同時に顧問の教師がやって来て部長に始める様に言ったのだ。

「では、部長。部活を始めましょうか。」

「はい分かりました。それでは部活を始めます。」

「今から狩猟の方法と関係の法律を教えます。」

顧問の教師が狩猟の方法と関係の法律を教え始めたのだ。そして教師が狩猟関係の事を教えながら活動の仕方の方針を伝えて狩猟場に行きそこで動物の肉を使った狩猟を行なった。それから数時間が経つと下校時間が近くなったので部活を終わらせる事になりそのまま下校したのだ。孝一は歩きながら家に向かっていたのだ。すると目の前の方から弟の紅音と夏とリーナが話しかけたのだ。

「兄貴、部活終わり？」

「兄貴、早く帰ろうぜ！」

「孝一、待つてたは。」

「お前ら馬鹿か？それともその頭は飾りか？」

「兄貴、それ酷くね？」

「そうだ！そうだ！」

「二人とも落ち着いたら？」

彼等三人は会話をして居るが孝一が二人の弟に少し悪い言い方をするが彼等は気にせず聞き流して四人は歩き出したのだ。すると紅音が孝一に尋ねたのだ。

「なあ、兄貴。明日確か研修旅行の事で話が行われるんだろ？」

「ああそうだ。」

「でも俺達としては関係無いけどな。」

「それは仕方無いわよ。私達でもどうにも出来に無いからね？」

「ふん。どうであれ俺達は俺達だ。何が起きようとみ関係無いから気ままに居るぞ。」

紅音の質問に孝一がそう答えると夏が隣から話に加わりリーナも追従する形で自分の意見を述べると孝一が彼等に対して相変わらずの反応を示したのだ。それから数分後。孝一達は自分達の住んでいる家に帰って来たのだ。すると家の前にある大きな門が開くとそこに居た者達が口を開いたのだ。

「「「お帰りなさいませ。若様、お嬢様。」」」

「いつもありがとうな。お前達。紅音、夏、リーナ、家に入るぞ。」

「「「おう（ええ）」」」

彼等は屋敷に入り自分達の部屋に入ると制服から私服に着替えたのだ。孝一は自室で着替えて居るとヴァイスとシュバルツがやって来ると孝一の両足に頬ズリをし始めたのだ。

「ニャア！」

「ニャア〜！」

「ヴァイス、シュバルツ。よしよし、今日も良い子だったか？」

「ニャア！」

「ニャア〜！」

孝一はヴァイスとシュバルツの頭を撫でながら着替えを終えると二匹と一緒にリビングに向かうとそこに私服に着替えた姉の咲が居たのだ。それに気付いた孝一は咲に

話しかけたのだ。

「姉貴、帰って来てたのか？」

「ええ、そうよ？あらヴァイスとシユバルツじゃない。ヴァイスの方、お願い出来るかしら？」

「ああ、ヴァイス。姉貴の所に行つてやれ。」

「ニヤア〜！」

孝一は咲に促されるとヴァイスを咲の所に行かせるとヴァイスは咲の膝上に飛び乗りあくびをして丸くなったのだ。すると咲が孝一にある事を聞いたのだ。

「ねえ、孝一。明日、研修旅行の事で時間があるのね？」

「ああそうだ。」

「確か私は台湾だったけど今年はどうなのかな？」

「さあな。俺にもよく分からんな。」

「あ！兄貴に此処に居たのか？それに姉貴まで。そろそろ晩御飯だから親父が呼んで来
いって言われたから。」

「ああ分かった。」

「分かったは。」

孝一と咲はヴァイスとシユバルツを撫でながら会話をしているとそこに紅音がやつ
て来て晩御飯である事を伝えて二人はヴァイスとシユバルツを下ろしてダイニングへ
と向かったのだ。

「ようやく来たな。咲、孝一。すぐに席につきなさい。」

「分かった。」

「分かったは。」

ダイニングにやって来た二人は父である総一に席に座るように言われて席に座ったのだ。二人が席についていたのを確認すると彼等は食事を食べ始めたのだ。そんな中、父の総一が孝一にある事を聞いたのだ。

「そう言えば孝一、学校の研修旅行で行き先は伝えられたのか？」

「嫌、まだだ。ちょうど明日、その件で授業の枠組みの中で行われるからその時に伝えられると思うぞ。」

「そうか。」

彼等は会話をしながら食事をしてそのまま進めて全員が食事を終えてそれぞれが各

自の自由に過ごし始めたのだ。そして孝一は自宅にある望遠鏡と陰陽道関係の道具を自室で夜の星空を見ていた。しかし孝一は難しい顔で羅針盤らしき物を睨んでいたのだ。すると夏が部屋に入つて来たのだ。

「兄貴。ちよつと良いか？」

「夏、用件があるなら後にしてくれ。」

「ああ分かった。それに兄貴どうしたんだ？そんな物を出して何をしてるんだ？」

「ああちよつとな。少し悪い予感がしてな。だから少し陰陽道で調べていてな。」

「そうなんだな。」

「少し休む。夏、用件があるなら今のうちに聞いて行け。」

「ああ、兄貴。此処の所で教えて欲しいと思つてな。」

「ああ、そこか？此処はこうするんだ。全くお前は少し位自分で解こうと思わんのか？」
「良いじゃねーかよ。兄貴。」

孝一が休憩にした際に夏が宿題の事で聞くと孝一が教えると少し愚痴を漏らすと夏が言い返したのだ。そして夏は部屋から出て行ったのだ。そして孝一は少し悩みながらも言ったのだ。孝一はそのままベットに横になつて寝る事にしたのだ。

「しかしこれから何が起きるといふのだ？まあ考えても無理か。」

2009年5月12日AM8:07

日本皇国首都東京特別市市内某所市立中学第一校舎屋上

孝一は少し早めに学校にやって来て居たのだ。何故、彼はこんな早くに学校にやって

来ているのかと言うとある目的の為に早くに学校に来て屋上に来て居たのだ。ちなみに彼の左手にはダークリングを手にして居たのだ。閑話休題。

「—————。」

『テレスドン!』

すると孝一がカードを取り出してカードに何か呪文の様な物を唱えてダークリングにリードしたのだ。そしてカードがエネルギーになりそして地下深くに何処かに行ったのだ。すると孝一が口を開いたのだ。

「後は火の魔王獣の復活を待つだけだな。」

孝一がそう言うのと屋上から立ち去り教室に戻ったのだ。教室に戻った孝一は自分の椅子に座ると柳原がやって来たのだ。

「犬塚君、少し良いかね?」

「何だ柳原。要件があるなら手短かに頼むぞ。」

「そろそろ僕の誘いに乗らないかい？」

「何度も言っ居るが断る。」

「やれやれ本当に後悔しても知らないよ？」

「とつとと去れ。俺は俺の手で自分の未来を切り開くだけだ。」

「じゃあ戻るよ。」
